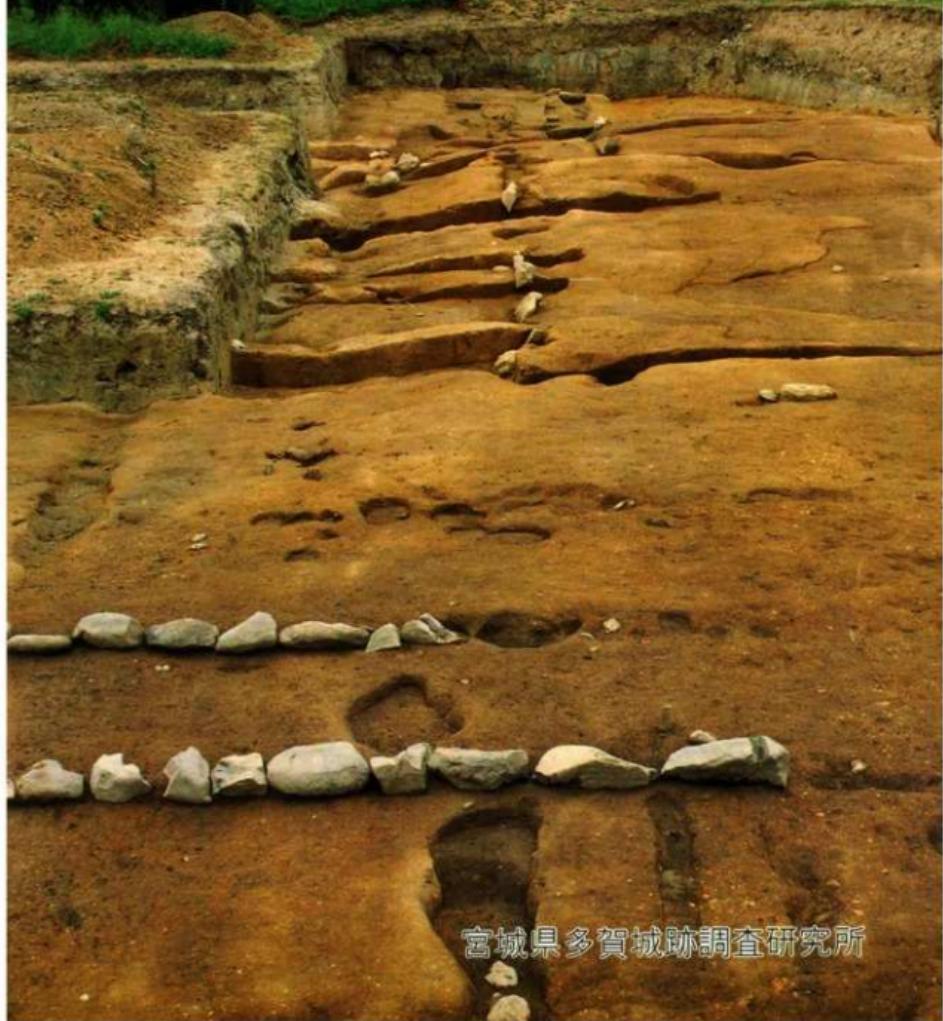


多賀城跡



序 文

本年度は多賀城跡調査研究第4次5ヶ年計画の第4年次にあたり、52次・53次調査を実施した。52次調査は從来築地の痕跡が全く認められなかつた外郭東辺中央部を対象としたものである。その結果一条の築地痕跡を検出することが出来、ある時期の東辺中央部の位置を決定することが出来た。53次調査では新たに門跡を発見した。この門は外郭東門の東北約80mに位置しており、從来知られていた東門より古く、8世紀代のものであることが判明した。のことから多賀城の東側は若干ながら8世紀と9世紀以降とでは形が違つていてと考えられるに至つた。8世紀の方がやや東側に張り出していたわけである。以上のように本年度の発掘調査によって、多賀城の構造・規模特に外郭東門・東辺築地の点について大いに得るところがあつた。

当研究所に設置されている多賀城跡調査研究指導委員会委員長の伊東信雄先生は昭和62年4月7日急逝された。多賀城跡の調査は昭和35年に伊東信雄先生が手を染めたのであつた。昭和44年に当研究所が発足して先生のお仕事を引き継いでからも、常に我々の調査研究を厳しくご指導になり、また暖かく見守つていて下さつた。今日曲がりなりにも我々が多賀城跡の解明を続けていけるのは、先生のご指導の賜である。先生を失つて我々の落胆は大きい。慎んでご冥福をお祈りするものである。

本年度も、多賀城跡調査研究指導委員会、文化庁の諸先生には折りに触れて適切なご指導・ご助言を頂いた。また県当局、多賀城市の関係各位には種々ご協力を頂いている。この他にも多くの方々に当研究所の業務に対してご理解とご援助を頂いた。以上の方々に深く感謝の意を表したい。

最後になつたが本年度の異動で所長佐々木光雄氏・研究第一科長進藤秋輝氏がそれぞれ宮城県教育庁文化財保護課課長・同調査第二係長にご栄転になつた。長期間にわたる両氏のご尽力に対して心より謝意を表したい。

昭和63年3月20日

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 桑原滋郎

目 次

I 調査の計画	1
II 第 50 次調査（昭和 61 年度分）	3
1 調査経過	3
2 層序	6
3 発見された遺構と遺物	8
4 考察	36
III 第 52 次調査	48
1 調査経過	48
2 層序	51
3 発見された遺構と遺物	55
4 考察	82
IV 第 53 次調査	86
V 付 章	92
1 関連研究・普及活動	92
2 研究所成果刊行物	94
図 版	

例 言

1. 本書は昭和 62 年度に実施した多賀城跡第 52 次調査の報告と第 53 次発掘調査の概要、および昨年度年報では概要のみを記載した昭和 61 年度の第 50 次調査の報告を収録したものである。
2. 発掘調査の測量原点は政庁正殿跡(S B 150 B)の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線と定めた。南北の基準線の方向は真北に対して $1^{\circ}C4'00''$ 東に偏している。遺構の位置は、南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東へ 50m の位置は E50 ないし E50m のように記している。
3. 政府跡の遺構期と瓦の分類基準については、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡一政府跡本文編一』1982 による。
4. 土色については『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄：1976)を参照した。
5. 本書の作成にあたっては桑原滋郎、白鳥良一、高野芳宏、丹羽 茂、古川雅清、後藤秀一、村田晃一が協議・検討を行い、執筆・編集は I・II を高野、III を後藤、IV を丹羽が担当した。これらの作業を古川淳一、多田玲子、小林史子、富士宏子、及川禎子、小野千恵子、岡田富子が援けた。

I 調査の計画

昭和 62 年度は多賀城跡発掘調査第 4 次 5 か年計画に基づく 4 年次にあたる。第 4 次 5 か年計画は昭和 60 年の第 21 回多賀城跡調査研究指導委員会で一部改訂が承認されており、この計画にしたがって第 52 次調査として外郭東辺中央地区、第 53 次調査として外郭東門北東地区の発掘調査を実施した。

第 52 次調査の目的はこれまで不明であった外郭東辺中央部での築地の位置を把握することとこの地区における遺構の分布状況を把握することにあつたまた、第 53 次調査の目的は、一昨年の第 51 次調査でこれまで外郭東辺の区画と理解してきた築地の外側で検出した南北築地跡の性格の究明するため、内側の築地との時期的な関係、およびこの築地に伴う東門跡を把握することにあつた。

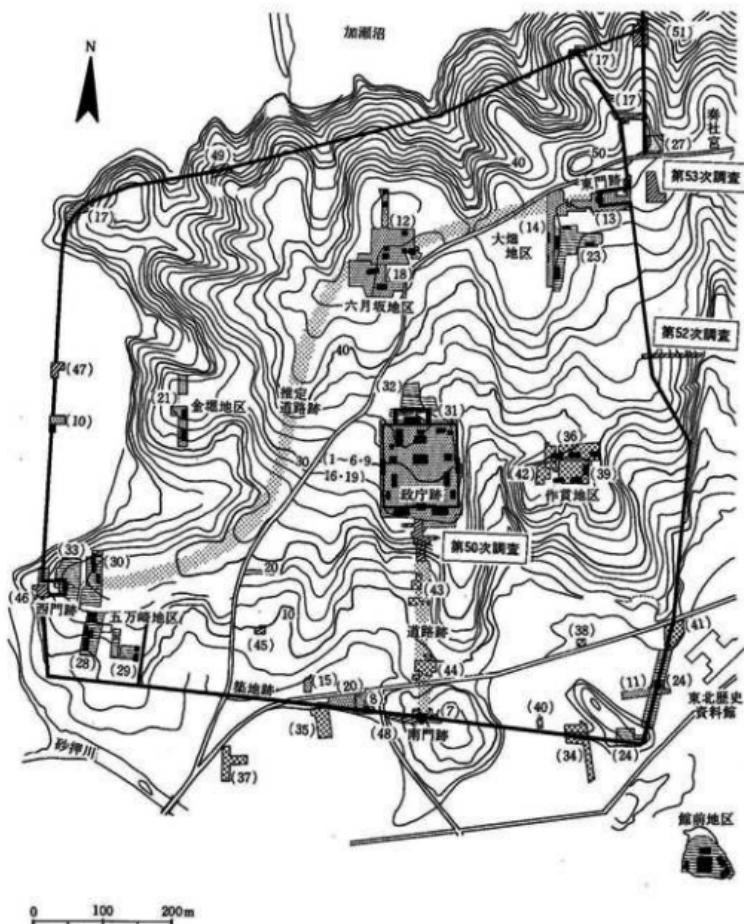
本年度の調査実施地区と実施状況は第 1 図・表 2 に示したとおりである。このほか年間を通して遺構データと出土遺物の整理を行つた。発掘調査事業費の総計は 29,000 千円（うち 50% 国庫補助）

年次	計		画 (昭和 59~61 年度は実績)	
	次数・発掘調査地区		調査面積	予算
59 年度	(1) 第 45 次 板下地区	70 m ²	1,820 m ²	29,000 千円
	(2) 第 46 次 外郭西門地区	750 m ²		
	(3) 第 47 次 外郭線西辺中央部	1,000 m ²		
60 年度	(1) 第 48 次 外郭南門地区	800 m ²	1,250 m ²	29,000 千円
	(2) 第 49 次 外郭北門推定地	450 m ²		
61 年度	(1) 第 50 次 政庁南前面地区	900 m ²	1,400 m ²	29,000 千円
	(2) 第 51 次 外郭線東北隅地区	500 m ²		
62 年度	(1) 第 52 次 大畠地区及び東辺外の地域	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 53 次 外郭東門北東部 (外郭外)	1,000 m ²		
63 年度	(1) 第 54 次 外郭東辺築地 (作貫地区)	1,000 m ²	2,000 m ²	35,000 千円
	(2) 第 55 次 奏社宮西辺築地 (大久保地区)	1,000 m ²		
計	11 地区		9,070 m ²	163,00 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 4 次 5 か年計画 (昭和 60 年 4 月 26 日一部改訂)

調査次数	調査地区	面積	期間
第 52 次	大畠地区及び東辺外の地域	420 m ²	6 月 8 日～10 月 19 日
第 53 次	外郭東門北東部 (外郭外)	800 m ²	8 月 1 日～12 月 5 日
計	2 地区	1,220 m ²	

表 2 昭和 62 年度発掘調査実績表



■ 第1次5か年計画の実施地区 ■ 第2次5か年計画の実施地区 ■ 第3次5か年計画の実施地区 ■ 第4次5か年計画の実施地区

第1図 多賀城跡調査実施地区 () は調査次数

II 第50次調査（昭和61年度分）

1. 調査経過

第50次調査は多賀城市市川字城前45、45、51-1・2の890m²を対象として実施した（第1・2図）。この地区は政府南門のすぐ南にあたり、このさらに南方を対象とした昭和58年度の第43・44次調査の成果によって政府と外郭南門とを結ぶ古代の道路跡の存在が推定されたところである。

第43・44次調査では、道路跡が8世紀から10世紀までの間一貫して政府の中軸線上を通りていたこと、当初の路幅は10m前後であったが、最終的には約22mに拡幅されたこと、地盤の高い東側を削平する一方、西側の低い部分に盛土して道路を造成していることなどが明らかとなった。なお、昭和44年度に政府南門前面の政府中軸線の東側を対象として第5次調査を実施しているが、道路跡を検出することができなかった。

今回の調査目的は、第43・44次調査で得られた道路の構造と変遷についての見通しを政府の南門に近い部分で検証することにあった。また、この地域はかなり勾配がきつくなつており、階段が設けられた可能性が考えられ、この点も検討課題であった。

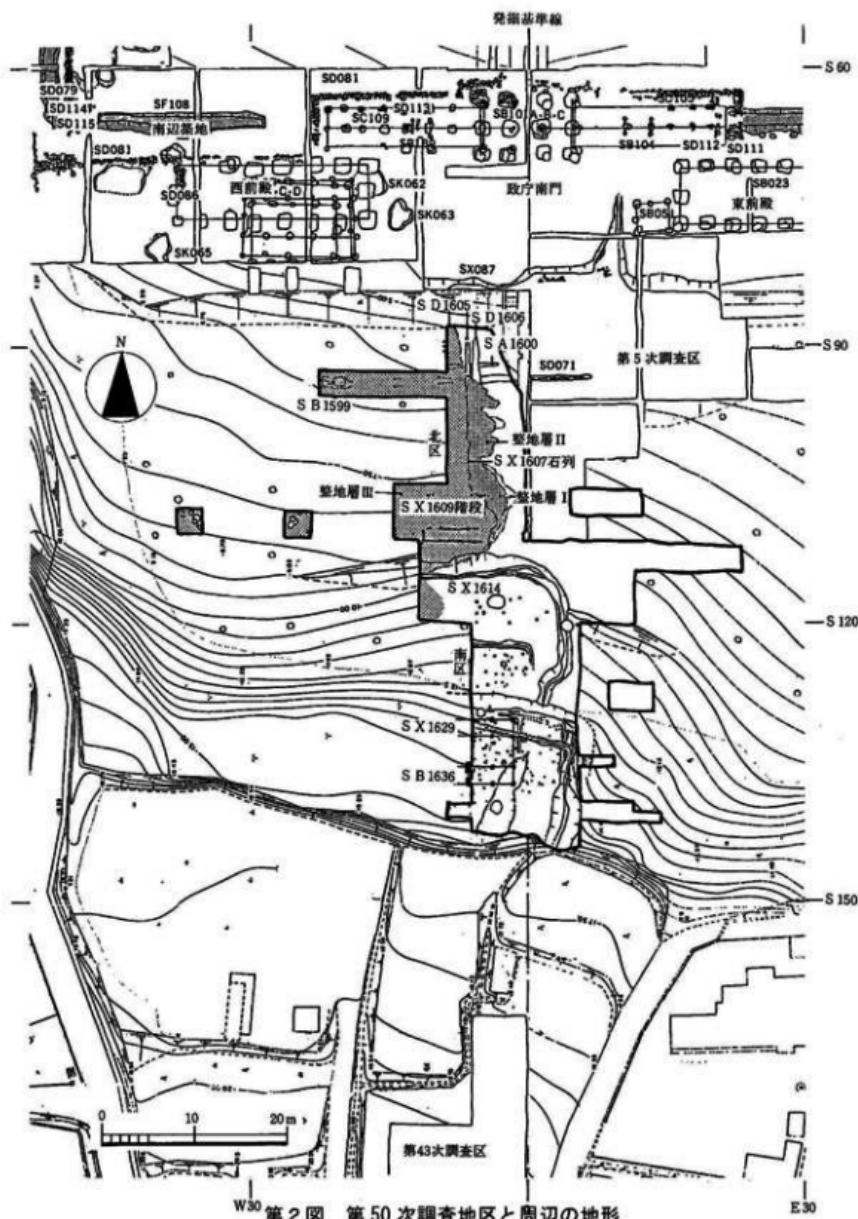
今回の調査対象地の現地形は南と西に向かって傾斜し、政府南門の南46mの位置には東西方向の大きな段が形成されている。当初設定した調査区は、この段の北側で政府中軸線に接して西側に東西幅9m（東側は第5次調査対象地）、南北26mの範囲と、段の南側で中軸線の東西に各6mの計12m幅、南北30mの範囲である。以下では便宜上、段の北を北区、南を南区として記述する。

調査は5月6日に調査区の設定、また月末までの間に昭和45年度整備時に植栽した樹木の移植および杉・雜木の伐採作業、機材の搬入作業を行った後、北区ついで南区の順に表土除去と遺構検出を行った。その後の精査については両区で並行して作業を進めた。

北 区

北区については6月2日より第1層（環境整備の盛土と整備前の表土）の除去作業を開始した。政府中軸線に近い東半部では第1層の下はすぐに地山であったが、西半部の北では整地層、西半部南では須恵系土器の小破片を多量に含む第2層が分布し、この下に北の整地層が延びてくることが知られた。

6月16日より整地層上面の遺構検出にかかり、北半で東西溝（S A1600）、中央部で南北に断続的に並ぶ石列（S X1607）、南半で東西の石列（S X1609）を検出した。整地層は政府南門との位置関係から道路構築に関わるものとみられたもので、W6.5mの位置で南北に



並ぶ S X1607 石列を境として東と西で土質が異なり、東の整地層Ⅱと西の整地層Ⅲは時期が異なる可能性が考えられた。S X1609 石列は第2層下の整地層Ⅲの上面で検出した東西石列で、1.5m前後の間隔で3条が平行することから道路に設けられた緩やかな階段の跡と考えられた。また、地山面で検出した S A1600 東西溝は西の整地層Ⅲに覆われおり、第5次調査で検出した S D071 に連なるものとみられた。第5次調査の際この溝の底面でピット状のくぼみが連続的に並ぶことを確認しており、材木塀の布掘りの可能性が考えられるが、上部の精査ではこれを確認できなかった。この段階で第1回目の実測・写真撮影を行った(6月21日～7月5日)。

7月7日から下層遺構の検出作業に入った。まず、整地層Ⅲの北半部を除去した結果、先に一部検出していた南北の S X1607 石列の全容およびこの西に接する S D1608 南北溝を検出し、S X1607 が整地層Ⅱに伴う路肩の施設であること、S D1608 はその後に設けられた側溝であることが判明した。

整地層Ⅱの下層については、数カ所に東西方向の小トレンチを設定して調査を行った。その結果、旧表土上に盛土された整地層Ⅰの分布を確認するとともにこの西に接する S D1605 側溝、および S D1605 を切る S D1606 側溝を検出した。これによって道路跡には、(1) 整地層Ⅰと S D1605、(2) S D1606、(3) 整地層Ⅱと S X1607 路肩石列、(4) S D1608 側溝、(5) 整地層Ⅲと S X1609 階段という変遷があったことが把握できた。

一方、北側で検出していた S A1600 について道路遺構との関係を検討したところ、最も古い道路の側溝 S D1605 よりさらに古いことが判明し、この性格究明が重要な課題となつた。そこで、この構造把握のための精査を行うと共に、西への延びを追求するため、3m 幅の拡張トレンチを設定した。この結果、溝の最下部で密接して並ぶ丸太材の痕跡を確認し、拡張区西端の整地層Ⅲの下層で S A1600 が取り付く1間の掘立式門を検出した。これによって S A1600 が門に取り付く東西方向の塀跡であることが確定した。また、門の西側にも S A1600 と同様な S A1601 塀跡が続くこと、両塀の北側にはこれに平行する細い溝が伴うことが判明した。

このほか、整地層Ⅲの南西への広がりを追求するため、S X1609 階段跡の西方に方3m の調査区を2箇所設定した。その結果、この整地が道路部分に限らず政府南西の一帯に広く分布することを確認した。

南 区

南区については当初北半で政府中軸線の東6mから同西12mまでの18m幅で、その南では中軸線を中心とした12m幅で調査区を設定した。6月20日より北側から表土除去作業を開始し、道路遺構を完全に破壊する S X1614 平場とその北と東縁を巡る S D1615 を検出し

た。この平場では地山面で S D1617 溝、S E1619 井戸、S K1620 土壙、小規模な S X1622 平場などを検出した。ついで南側に対象を移して遺構検出作業を進めたところ、東西方向の大きな段 (S X1629) がみられ調査区の南端まで及ぶ広い平場であること、この平場は調査区の東端付近に部分的に分布する南区第2層に覆われることを確認した。南区で検出したこれらの遺構は出土遺物や堆積土の様相からみて12世紀から現代にかけてのものであり、古代の道路遺構を完全に破壊していることが明らかになった。

ただし、当初設定した調査区の東側は地形的にみて道路遺構の遺存する可能性があったため、8月27日に3箇所に東拡張区を設定した（南区北端でE24まで、中央でE9～15、南端でE16まで）。その結果、発掘基準線と方向の異なる多数の溝や土壙を検出したが、古代の遺構は皆無で道路跡についての資料を得ることが出来なかった（9月1日）。

8月21日からはS X1622 平場の精査、また25日からはS X1629 平場の精査にかかった。S X1622 では北と東縁に浅いS D1623 溝が巡り、内部の地山面に多数の小ピットがあること、出土したかわらけから12世紀とみられることが知られた。一方S X1629 で段付近に分布する堆積層を順次除去しながら遺構検出を試みた結果、当初の平場造成の後に2～3度整地を行って使用されその都度水切りの溝を北と東に設けていること、平場に伴う遺構としてはS B1636 挖立柱建物跡、S E1639 井戸、S K1641 回みなどがあることが知られた。これらの年代は出土したかわらけや白磁などから12世紀とみられた。このほかこれらの遺構を切るL字状溝 (S D1647) を検出し、これには寛永通宝が含まれていたことから、近世以降にもこの地域が利用されたことが知られた。

南区の実測・写真撮影は主として8月26日から9月上旬に実施したが、細部については精査と並行して行い10月14日に終了した。

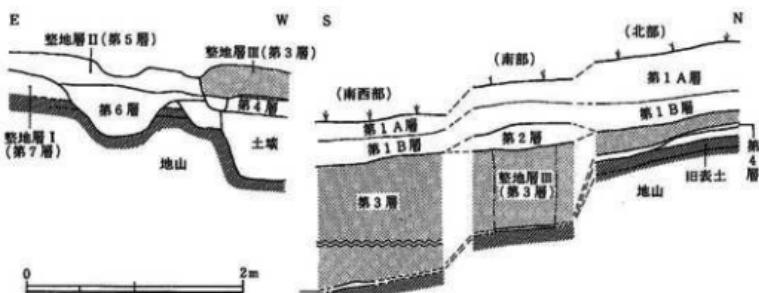
その後調査区全域の埋め戻しを行い、10月20日に全作業を終了した。なお、この間7月30日に報道機関に調査の成果を発表し、8月2日には一般を対象として現地説明会を開催した。

2. 層序

政庁南門の南約46mの位置にみられた東西の段を境として北と南では表土下の堆積層の様相が異なるため以下では分けて記載する。

A. 北区の層序（第3図）

北区の層は第1層～第8層、旧表土、地山・岩盤の順となる。このうち第1層は環境整備の盛土と耕作土、第2・4・6・8層は自然堆積層、第3・5・7層は道路構築に伴う



第3図 北区層序模式図

盛土整地層である。整地層の詳細については道路遺構の項で述べることとし、ここでは自然堆積層を中心に記載する。

第1層：昭和45年度の環境整備に伴う盛土層（1a）とそれ以前の耕作土層（1b）からなる。第1a層は調査区北端で最も厚く1.0mあるが、南に向かって次第に薄くなり0.3mほどとなる。第1b層は厚さが0.3m前後である。

第2層：暗褐色（10YR3/3）の均質な砂質シルト層で、須恵系土器の小破片を多量に含む。北区の南端部を中心として東西10m、南北6mの範囲に分布する堆積層で、厚さは最大0.4mである。

第3層：北区の西半に広く分布する整地層で、S X1604C道路跡の項で「整地層III」として記述する。

第4層：灰褐色（10YR6/2）の均質な砂質シルトで、上部に酸化鉄の薄い層が形成されている。北区の西半および西方の小調査区で認められた堆積層で、かなり広域に分布するとみられる。厚さは最大0.1m弱である。

第5層：北区の中央部に分布する整地層で、S X1604B1道路跡の項で「整地層II」として詳述する。

第6層：明褐色（7.5YR5/8）砂質シルトや黄褐色砂質シルトが細かい層状をなす堆積層である。S D1606側溝を埋めた後、その西側にも分布が及ぶ。厚さは最大0.2mである。

第7層：北区の中央東半部を中心として分布する整地層で、S X1604A1道路跡の項で「整地層I」として記述する。

第8層：明褐色（7.5YR5/8）の砂層で、西拡張区を中心に分布し S A1600の抜取溝の上部を埋めている（第7図）。厚さは最大0.2mである。

B. 南区の層序（第4図）

南区の西半部では第1層（耕作土）下はすぐ地山であったが、東半部では、第2層、第3層の堆積がみられた。



第4図 南区層序模式

第1層：環境整備に伴う盛土層(1a)とそれ以前の耕作土層(1b)からなる。第1a層は調査区北端で最も厚く0.5mあるが、南に向かって次第に薄くなる。第1b層は整備以前の表土で、厚さは0.3m前後である。

第2層：褐色(10YR4/4)や黄褐色(10YR5/6)砂質シルトの自然堆積層で、北の東への拡張区、東壁中央部、南の東への拡張区で部分的に分布する。厚さは最大で0.3mである。

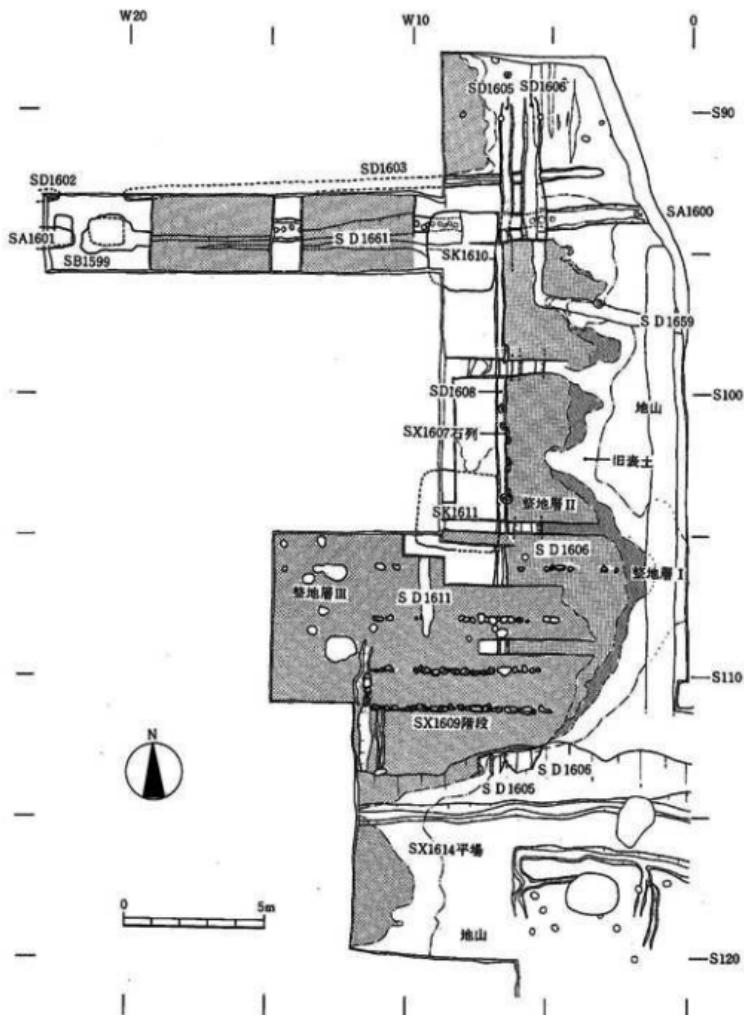
第3層：暗褐色(10YR3/4)シルトの均質な自然堆積層で、北東部に広く分布するとみられる。厚さは最大で0.4mである。

3. 発見された遺構と遺物

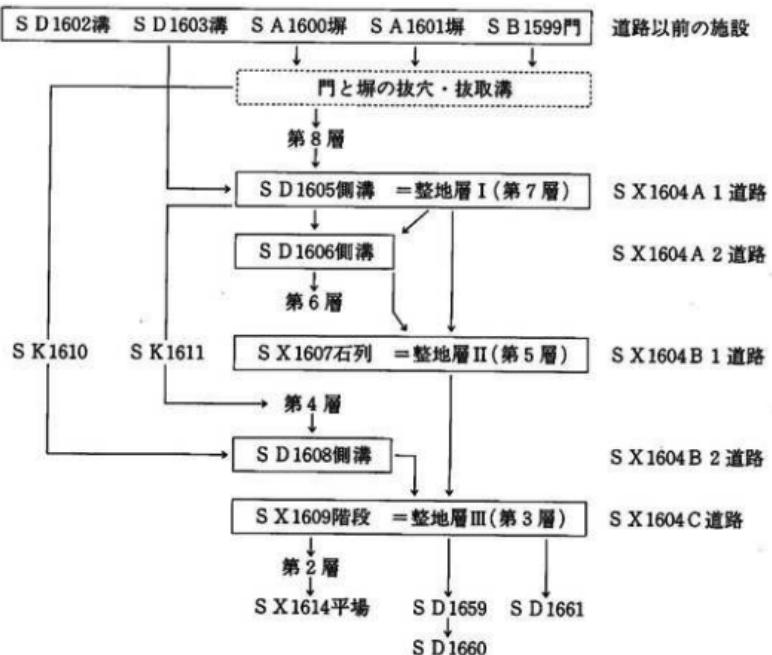
今回の調査で検出した遺構には道路跡5、門跡1、堀跡2、建物跡1のほか多数の土壌や溝などがある。北区では古代の遺構の保存状況が比較的良好であったが、南区では中世以降の平場形成にともなう大規模な削平のため古代遺構はほとんど遺存していなかった。以下では北区と南区に分けて発見された遺構・遺物について記載する。

A. 北区（第5・6図、図版2）

北区の遺構と堆積層には第6図のような重複関係がみられ、(1)道路より前の遺構…堀跡・門跡・溝、(2)道路の存続期間中の遺構…道路跡・土壌、(3)道路より新しい遺構…溝・土壌とに分けられる。



第5図 北区の検出遺構



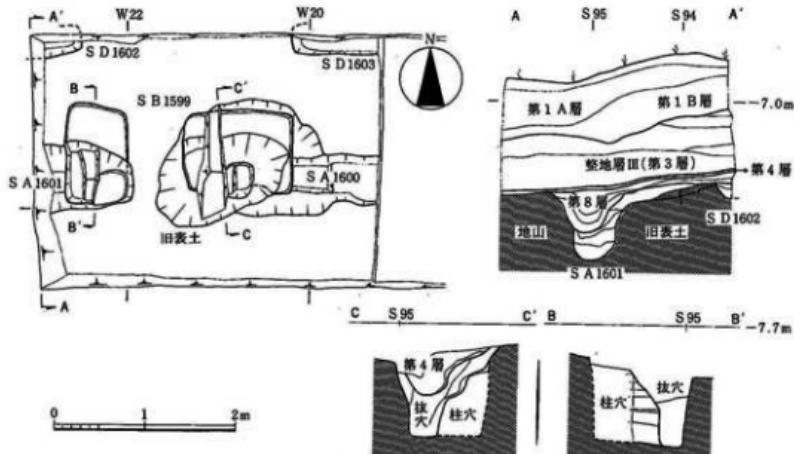
第6図 北区の遺構・層の重複関係

(1) 道路より前の遺構とその遺物

これには S B 1599 門、S A 1600・1601 塙、S D 1602・1603 溝がある。S B 1599 は政庁南門の南約 25m、西約 22m の位置で検出した 1 間の門跡であり、S A 1600・1601 は S B 1599 に取り付く東西方向の材木塙跡である。また、S D 1602・1603 は S A 1600・1601 塙の北側に並行する東西溝で、位置関係から両塙に付設された溝と考えられる。これらはすべて旧表土上面で検出され、第4層ないし整地層IIIに覆われていた。

S B 1599 門跡 (第7図、図版3)

政庁中軸線の西約 22m の位置で検出した間口 1 間の掘立式門跡で、控柱がない棟門構造のものとみられる。柱穴は一辺 0.7~1.2m の方形で、深さは 1.0m である。両柱穴とも柱抜取穴が認められ、これらの位置から柱間はおよそ 1.5m と推定される。なお、この抜取穴は S A 1600・1601 塙跡の抜取溝と一連の土で埋まっており、門柱と塙の材が同時に抜き取られたことが知られる。門跡から遺物は出土していない。



第7図 SB 1559 門跡・SA 1600・1601 塚跡

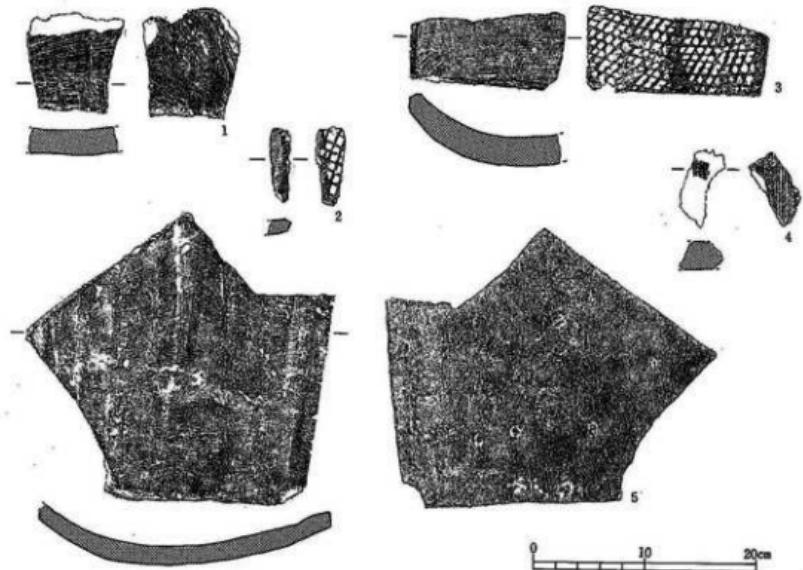
SA 1600 塚跡（第7～9図、図版3）

S B 1599 門から東へ延びる材木塚の跡で、第5次調査で検出した部分を含めると東西約27mになる。第5次調査の東端部分の遺存からみるとさらに東へ延びていたものと推定される。塚は布掘の中に丸太材をほぼ密接して立て並べたもので、方向は東西発掘基準線に対し東で約3度40分北に偏している。SD 1605・1606 側溝、SK 1610 と重複し、これらより古い。

布掘は材の抜取・切取溝によりほとんど破壊され最下部しか残っていないが、およそ幅0.5m弱、深さ0.8m前後のものと推定される。この底面では材の立つ部分が他より若干掘り下げられている。また材は布堀下部に残る痕跡から径15cm前後とみられる。

抜取・切取溝はSB 1599門の柱抜取穴と一連であり、上幅約0.7m、深さ0.6m前後、断面U字形である。西半部では布掘の底面まで達し、材が抜き取られているが、東半部では途中で止まり材が切り取られている。この上半部の埋まり土は北側に分布する第8層と一連の土が自然堆積していることからみて、抜取りないし切取り後に完全に埋め戻されなかつたと考えられる。

遺物は抜取・切取溝からのみ出土し、少量の平瓦・丸瓦・隅瓦のほか微量の須恵器・土師器がある（第8図）。平瓦はIA類3点（1）、IC類aタイプ（2）、IC類bタイプ（3）、軒平瓦660に組むIB類（4）の各1点であり、隅瓦は平瓦IA類を用いたもの（5）1点で



第8図 S A 1600 塀の抜取溝の瓦

ある。いずれも第Ⅰ期の瓦である。土師器は非クロロ調整の内黒杯の小破片であり、須恵器は甕の口縁部と体部の破片である。

S A 1601 塀跡（第7図、図版3）

S B 1599 門から西へ延びる木材塀跡で、長さ 0.5m 分のみを検出した。構造・規模・方向などの状況は S A 1600 と同様とみられ、抜取溝は S B 1599 門の柱抜取穴と一連である。遺物は出土していない。

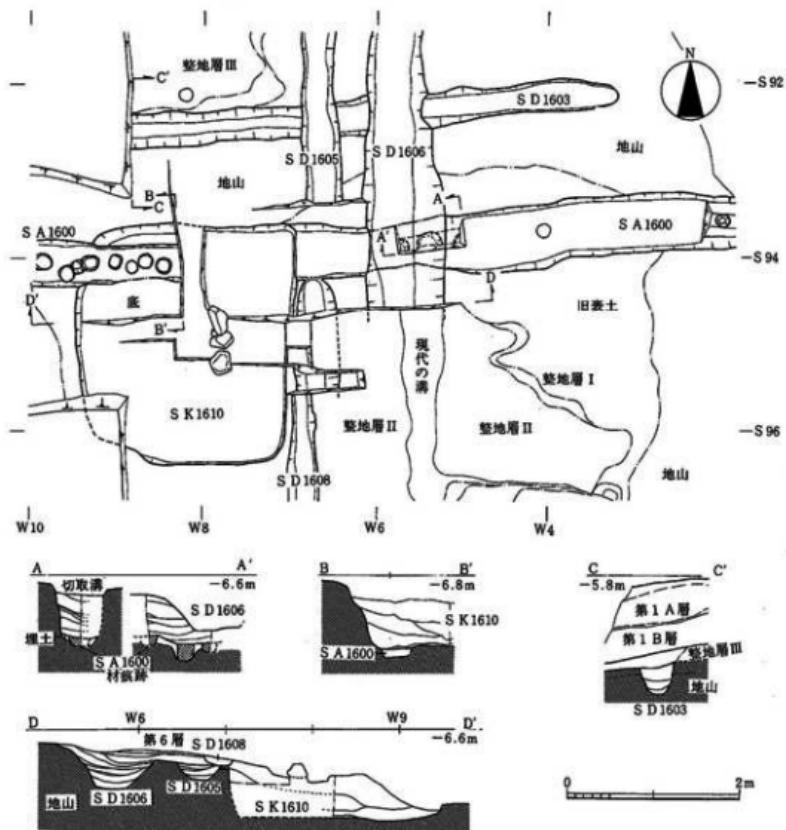
S D 1602・1603 溝（第7・9図）

S D 1603・S D 1602 溝はそれぞれ S A 1600・1601 塀跡の北側にある東西溝である。ともに塀と平行し、塀との心々距離は 1.5m である。両溝は S B 1599 門跡の北で離れており、その間隔は 2.3m である。S D 1603 は S D 1605・1606 側溝と重複し、いずれよりも古い。遺物は出土していない。

東側の S D 1603 は幅 0.4m、深さ 0.15~0.3m で、断面は浅い U 字形をなす。長さ 17.1m

分を確認したが、さらに東へ延びていたものと思われる。底面のレベルは西端が東端より約1.3m低い。堆積土は上部と下部で様相が異なり、上部は褐色(10YR4/4)シルトで人為的に埋め戻されたとみられる。これに対し下部は褐色(10YR4/4)の砂層で自然堆積した痕跡が明瞭である。この溝の性格については、下部の自然堆積層を重視すると開渠で排水溝の可能性が強いと思われるが、底面レベルが門付近の西端が最も低いため排水先が疑問となり、断定するに至らなかった。

西側の S D 1602 は東端を部分的に検出したもので、S D 1603 と同構造の溝とみられる。



第9図 SA1600 壕跡・SD1603・1605・1606・1608 溝

(2) 道路存続中の遺構とその遺物

S X 1604 道路に関わる遺構としては、S D 1605・1606・1608 側溝、S X 1607 路肩の石列、S X 1609 階段、整地層 I・II・III がある。また、道路存続中の遺構としては S K 1610・1611 土壙がある。

これらには第6図に示した重複関係が認められ、S D 1605 と S D 1606、S D 1606 と整地層 II、整地層 II と S D 1608、S D 1608 と整地層 III の間にはそれぞれ自然堆積層ないし溝内への自然堆積土が存在することなどから、道路跡には5時期の変遷が確認される。このうち S D 1605・S X 1607・S X 1609 の3時期は盛土整地を伴う大規模な構築とみられるが、S D 1606 と S D 1608 の2時期の構築は側溝部分のみを対象として行われている。そこで、S X 1604 道路遺構については、整地層 I と S D 1605 を A 1、S D 1606 を A 2、整地層 II と S X 1607 を B 1、S D 1608 を B 2、整地層 III と S X 1609 を C とし、以下古い順に記載する。

なお、今回得られた道路跡のデータは南北発掘基準線(ほぼ政庁中軸線)の西半部に限定されており、基準線の東側については第5次調査および今回の調査の結果、道路跡の痕跡がすべて削平されていることが明らかになった。このため、道路幅の復元は発掘基準線とともに東西対称のものと仮定して扱うこととした⁽¹⁾。

S X 1604 A 1 道路跡（第5・9・10図、図版4）

旧表土上に盛土(整地層 I)して路面を造成し、西端に S D 1605 側溝を設けたものである。整地層 I・S D 1605 は S D 1606 側溝・整地層 II と重複し、これらより古い。また S D 1605 は S A 1600 槌跡・S D 1603 溝とも重複し、これらより新しい。

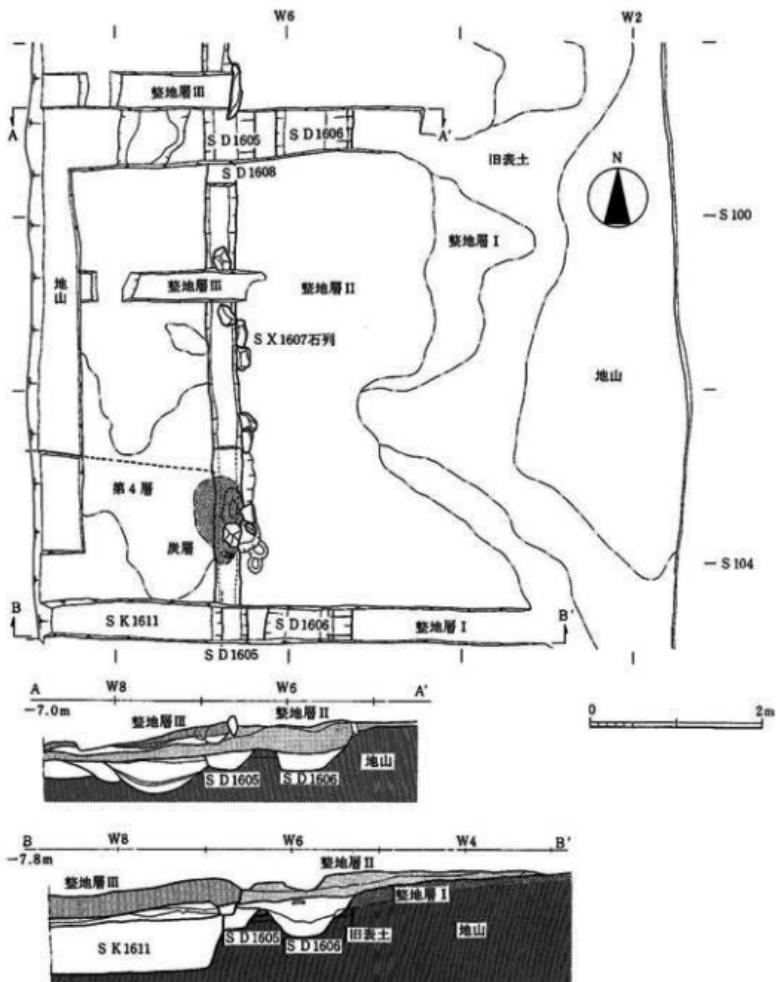
S D 1605：幅 0.6m、西壁の深さ 0.3m で、断面は V 状をなす。上層遺構を保存するため部分的な検出にとどめたが、南北 23.5m 分を確認した。溝内には褐色(10YR 4/4)や明褐色(10YR 5/6)などの均質な薄い砂質土が層をなす。

溝の東壁は北端・南端とも南北発掘基準線の W6.5m の位置にあり、方向は発掘基準線とほぼ一致する。この時期の路幅は、南北発掘基準線に対し東西対称とすると約 13m と推定される。なお、推定される道路東端位置の地山面のレベルは西端より 0.1~0.2m ほど高く、東側の削平を考慮すれば路面は西に向かってやや低くなっていたものと推定される。

整地層 I：S D 1605 の東側に東西 7m、南北 19m の範囲で分布し、西端が最も厚く 0.3m であるが、東に向かって次第に薄くなる。主として明褐色(10YR 6/8)砂質土や褐色(7.5YR 4/3)粘質土が用いられている。側溝・整地層とも遺物は出土していない。

S X 1604 A 2 道路跡（第5・9・10図、図版4）

A 1 の S D 1605 側溝が完全に埋まった後、位置を若干東へ寄せて S D 1606 側溝を設けた



第10図 S X1604 A 1 ~ B 2 道路跡

時期である。方向は発掘基準線とほぼ一致する。SD1606の東壁の位置はW5.3mにあり、路幅は約11mと推定される。SD1605側溝・SA1600・SD1603溝と重複し、これらより新しい。また、整地層IIに覆われている。

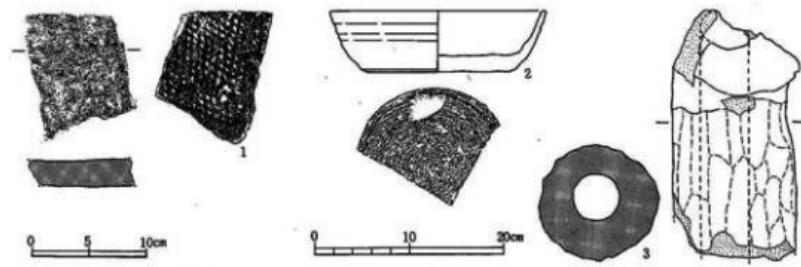
S D 1606: 幅約 1.0m、深さ 0.3m、断面U状で、断続的な南北 23.5m 分を確認した。第 6 層(自然堆積層)で埋まっており、溝内に堆積した第 6 層から第 I 期の平瓦 I A 類の小破片が 1 点出土した。

S X 1604 B 1 道路跡 (第 5・10 図、図版 5)

整地層 I の上にさらに盛土整地(整地層 II)を行って路面を造成し、政府南門に近い部分ではその路肩に石を並べた(S X 1607)ものである。方向は発掘基準線にほぼ一致する。路幅は西肩の石列が W6.5m の位置にあることからおよそ 13m と推定される。路面は以前の時期と同様に南と西に傾斜している。整地層 II は多数の遺構と重複し、S A 1600 壁跡・整地層 I・S D 1605・S D 1606 側溝より新しく、整地層 III より古い。

整地層 II : 東西 4m、南北 18m の範囲に分布し、西端で最大 0.3m の厚さがあり、東に向かって次第に薄くなる。主としてにぶい黄褐色(10YR 5/4)や、やや軟質な黒褐色(10YR 3/2)粘質土が用いられている。

S X 1607 : 道路の西肩に並べられた 1 段の石列であり、S 104m から北へ 6m の範囲で原位置をとどめる石 6 個、西の S D 1608 内に転落した石 3 個、石の抜け穴 1 個を検出した。石は長径 30~60cm、短径 20cm ほどの自然石を用いて、長軸を南北に向け 1 段で設置されている。石の周囲に据穴がないことから、整地の工程の中で構築したものとみられる。北への延びは削平のため不明であるが、S 104m 以南では石を設置した痕跡がみられず、土羽となっている。この状況からみると、石列の性格は、政府南門近くの道路の意匠的な意味あいが強いものではないかと思われる。



番号	層位・遺構	種類	特徴など	口径	底径	高さ	器番号
1	整地層 II	平瓦 I C 類 b タイプ					7109
2	整地層 II 上面	須恵器环	底部回転ヘラ削り	11.4 cm	7.5 cm	3.3 cm	7109
3	炭化物壁上面	鉢口		全長 13.0 cm、径 6.5 cm、内径 2.4 cm			7110

第 11 図 整地層 II などの遺物

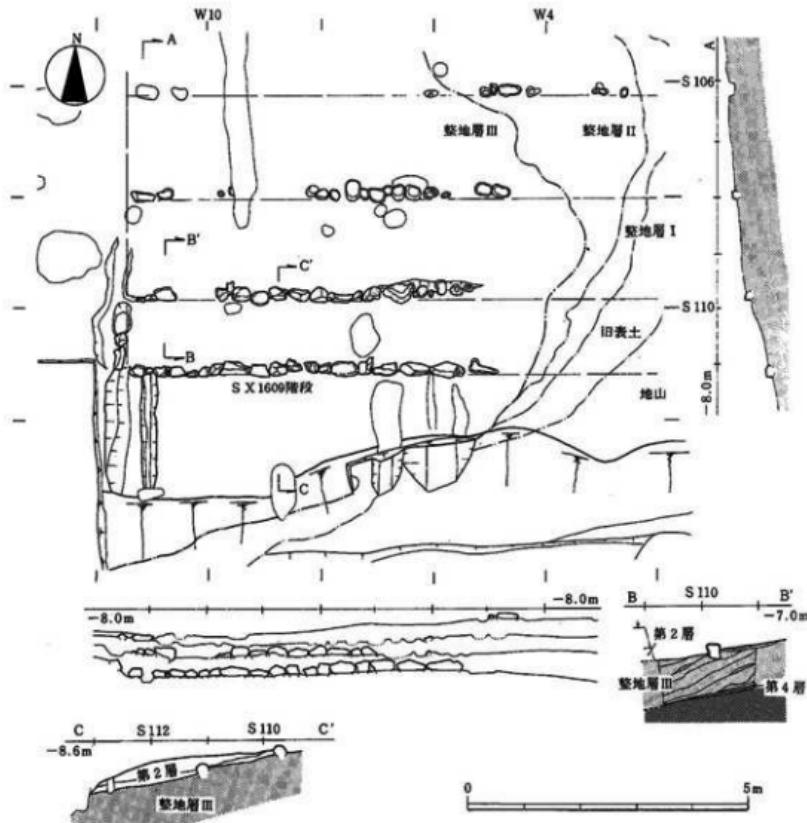
遺物は整地層 II から出土しており、平瓦と丸瓦各 2 点がある。平瓦は I A 類と I C 類 b タイプ(第 11 図 1)で、ともに第 I 期のものである。丸瓦も胎土からみて第 I 期のものとみ

られる。

S X1604B 2 道路跡（第 10 図、図版 5）

S X1607 石列の西に接して S D1608 側溝を設けたものである。方向と路幅は S X1604 B 1 と同一とみられる。S D1608 は S X1604 B 1 道路の西側に薄く堆積した第 4 層上面から掘り込まれており、整地層Ⅲに覆われていた。S K1610・S K1611 と重複し、これらより新しい。

S D1608：幅 0.3m、深さ 0.1m で、断面は浅いU字形をなす。溝内の堆積土は灰褐色(10 YR 6/2)砂質土である。



第 12 図 S X1604C 道路跡

堆積土から出土した遺物には平瓦3点と丸瓦1点がある。平瓦はIA類、IB類、II B類の各1点で、IA類とIB類は第I期、II B類は第II期のものである。

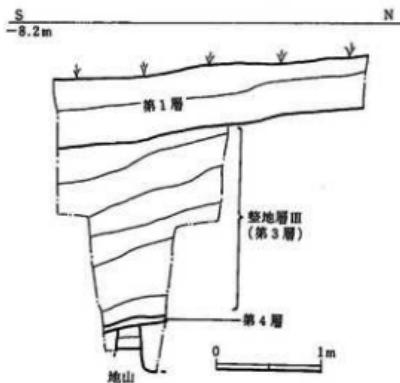
なお、S 103m付近では溝が埋まりきった段階で東西0.8m、南北1.0mの範囲に炭化物の層が分布しており、上面から羽口（第11図3）が出土した。

S X1604C 道路跡（第5・12図、図版5）

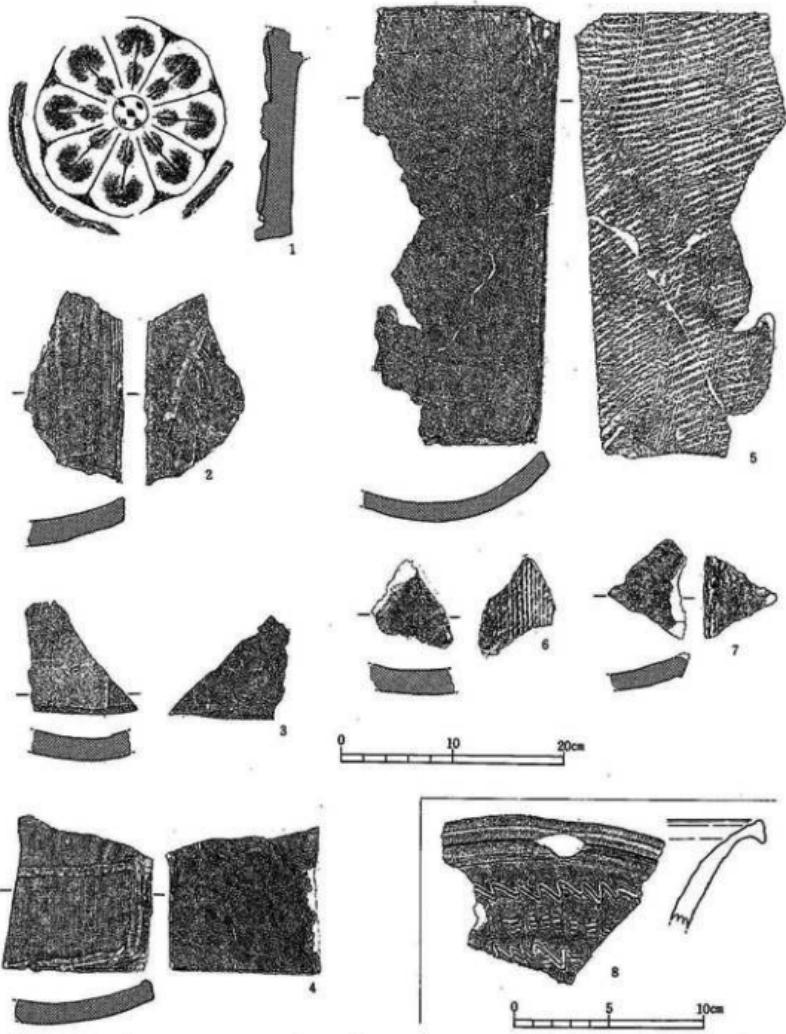
道路部分に限らず政府西南城の広範囲に整地（整地層III）した上でS X1609段階を設置したものである。方向は変化がないが、路幅は以前のほぼ倍の約23mに拡幅されている。整地層IIIは多数の遺構と重複しており、SD1608側溝・SK1610・SK1611土壤・整地層IIより新しく、SD1659～1661溝・SX1614平場より古い。また、SX1609は第2層に覆われていた。

整地層III：西方に設けた2箇所の小調査区でもみられ、これらを含めた分布範囲は南北32m（S 88～120）、東西36m（W 3～39）となる。南方は新しい削平によって不明であるが、西はさらにのびる。南西に向かって次第に厚くなり、最西の小調査区では1.8mの厚さをもつ（第13図）。以上によりこの整地は政府西南方のかなり広い地域に及ぶ大規模なものとみられる。盛土は黄褐色（10YR 5/6）砂質土を主体とし、岩盤ブロックを多量に含み、固くしまっている。

S X1609段階：円礫を用いて構築されており、4段分を検出した。踏み面が1.4～1.8m、蹴上げ0.2m弱のゆるやかなものである。踏み面は南北に若干の勾配をもっており、舗装の痕跡はない。南の2段は比較的保存が良く、階段部の石列が東西約6mにわたり遺存していたが、北の2段は石の抜け穴によって確認できた部分が多い。東側への延びは後世の削平のため不明であるが、西端については最南の段で確認できた。また、最南の段と2段目の西端ではこれらの間に石と石の抜け穴の各1個が南北に並んでおり、階段の西を限る南北方向の石列が据えられたものと推定される。階段に用いられた石は段部・西端部とも長径0.3～0.6m、短径0.2～0.3mであり、据穴がないことから整地の工程の中で設置されたとみられる。階段部の石列のレベルを東西方向でみると東に向かって高くなり、西端と石列東端までの6mの距離で0.2mの差がある。また、中軸線の東11.5m地点の地山面レベルは西端より0.9m高い。これによって階段は東西方向でもやや勾配をもって構築されたこ



第13図 西方小調査区の整地層III



番号	種類	特徴など	箱番号	番号	種類	特徴など	箱番号
1	軒丸瓦 222			7101	5	平瓦 Ⅲ B類	7108
2	平瓦 Ⅰ A類			7107	6	平瓦 Ⅲ B類	7107
3	平瓦 Ⅰ B類			7106	7	軒平瓦 660と組む 平瓦 Ⅲ B類	7106
4	平瓦 Ⅱ A類			7108	8	須恵器 壺の口縁	7107

第14図 整地層IIIの遺物

とが知られる。なお、西端のやや内側で第2層に覆われた幅0.25m、深さ0.1mの南北溝を検出したが、階段に関わるものとは考えられない。

この時期の路幅は、階段西端部がW11.5mの位置にあることからおよそ23mと推定される。方向は階段の石列が東西発掘基準線に一致することから、これと直交するもの、すなわち南北発掘基準線に一致するとみられる。

遺物は整地層Ⅲから比較的多量の瓦と微量の土器が出土した(第14図)。瓦には軒丸瓦222が1点(1)、平瓦のIA類15点(2)、IB類1点(3)、IC類bタイプ1点、IIA類1点(4)、IIB類34点(5~7)、丸瓦30点がある。IA~IC・IIA類はすべて第Ⅰ期のものである。IIB類には特徴的な叩き目から第Ⅰ期とみられるもの1点(6)、端部の特徴などから第Ⅲ期と見られるもの1点(7)が含まれるが、他はすべて第Ⅱ期のものとみられる。

土器は須恵器甕の口縁部1点(8)とロクロ土師器杯の小破片である。

S K1610・1611 土壙(第5・9・10図)

両者ともにSD1605側溝の西に接する位置で検出された方形の土壙で、ほぼ類似した形と規模をもつ。北のSK1610と南のSK1611の間隔は6.0mである。遺物はともに出土していない。

S K1610: 整地層Ⅲ下の旧表土面で検出した土壙で、SA1600塙跡・SD1608側溝と重複し、SA1600より新しく、SD1608より古い。規模は東西が2.5m、南北が2.7m、深さ0.7mで、壁はほぼ垂直に立つ。堆積土は褐色(10YR4/4)シルトを基調とし、岩盤粒や黒褐色(10YR2/3)シルトのブロックの入り方からみて人為的に埋め戻されたものとみられる。なお、北壁の北側0.8mまでの範囲では土壙の外にも堆積土と一連の土が及んでいた。

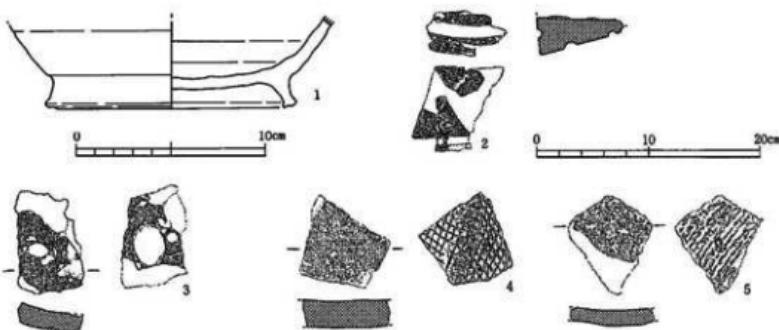
S K1611: 第4層下の旧表土面で検出した土壙で、全形を出していないがややゆがんだ方形とみられる。SD1605側溝、SD1608側溝と重複し、SD1608より古く、SD1605より新しい。規模は東西3.0m、南北2.8m、深さ0.6mで、壁は底部付近がやや外傾するが、上部はほぼ垂直である。堆積土は黒褐色(5YR4/6)砂質土で、人為的に埋められている。

(3) 道路より新しい遺構とその遺物

これには整地層Ⅲ上面で検出したSD1659・1661などの溝、多数のピットや小土壙、および第2層を切るSX1614平場などがある。このうちSD1659・1661とSX1614(南区の項で記載)は堆積土が第1b層に類似しており現代の遺構と考えられる。北区のこれらの遺構からは若干の瓦や土器が出土した。

(4) 堆積層の遺物

堆積層のうち整地層(第3・5・7層)の遺物については道路跡の項すでに述べた。また、第6層と第8層はそれぞれSD1606溝とSA1600塙の抜取溝の中にも堆積した層であり、前述したように遺物は両遺構内からのみ出土した。したがって以下では第4層と第2層の遺物について記載する。なお、第1層の遺物については南区も合わせ最後に述べることにする。



番号	種類	特徴など	指番号	番号	種類	特徴など	指番号
1	須恵器 高台杯	切り離し方不明	7109	4	平瓦 I C類-aタイプ		7109
2	軒平瓦 511		7101	5	平瓦 II B類		7109
3	平瓦 IA類		7109				

第15図 北区第4層の遺物

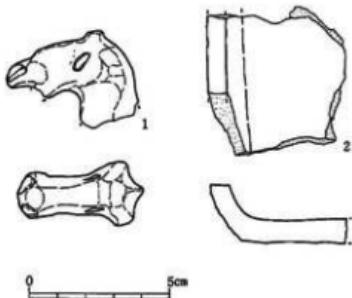
第4層の遺物(第15図)

第4層からは小量の瓦と微量の須恵器が出土した。瓦には軒平瓦511が1点(2)、平瓦IA類6点(3)、IC類aタイプ1点、同bタイプ2点(4)、II B類6点(5)、丸瓦5点がある。須恵器は高台杯の底部1点(1)と甕体部1点である。

第2層の遺物(第16図)

第2層からは須恵系土器・土師器・須恵器・土製品・硯・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している。

土器には須恵系土器は杯115点、高台杯47点、土師器は内黒杯部体9点と甕体部13点、須



番号	種類	特徴など	指番号
1	土製品(土器)	頭部から下欠損	7110
2	硯字鏡		7110

第16図 北区第2層の遺物

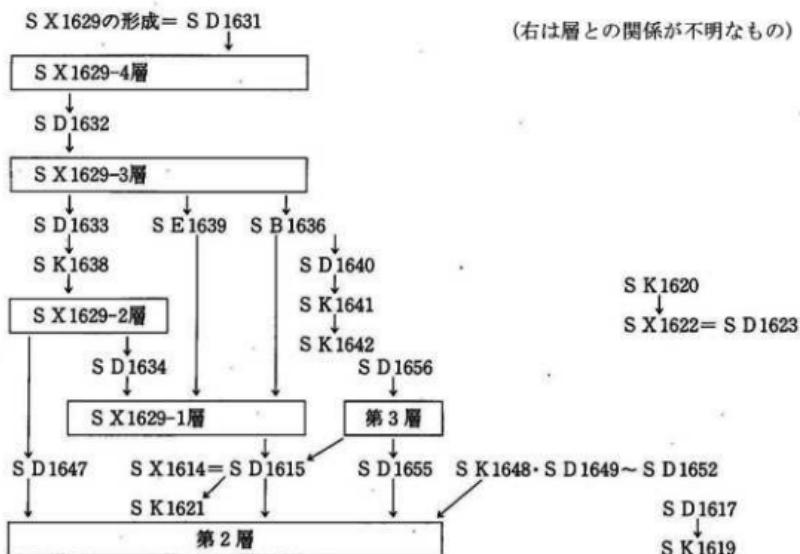
惠器は杯(糸切り無調整2点、ヘラ切り無調整1点、回転ヘラケズリ2点の破片)、甕体部13点、蓋1点があり、須恵系土器が主体を占める。いずれも小破片で図示できないが、須恵系土器には小型の杯が含まれている。

土製品は土馬とみられるもので、頸部から上の破片である(1・図版8-1)。ヘラ状の工具による沈線で目が表現されている。色調は浅黄橙色(10YR8/4)で、胎土・焼成は須恵系土器と類似する。硯は風字硯の側縁部の破片1点(2)である。

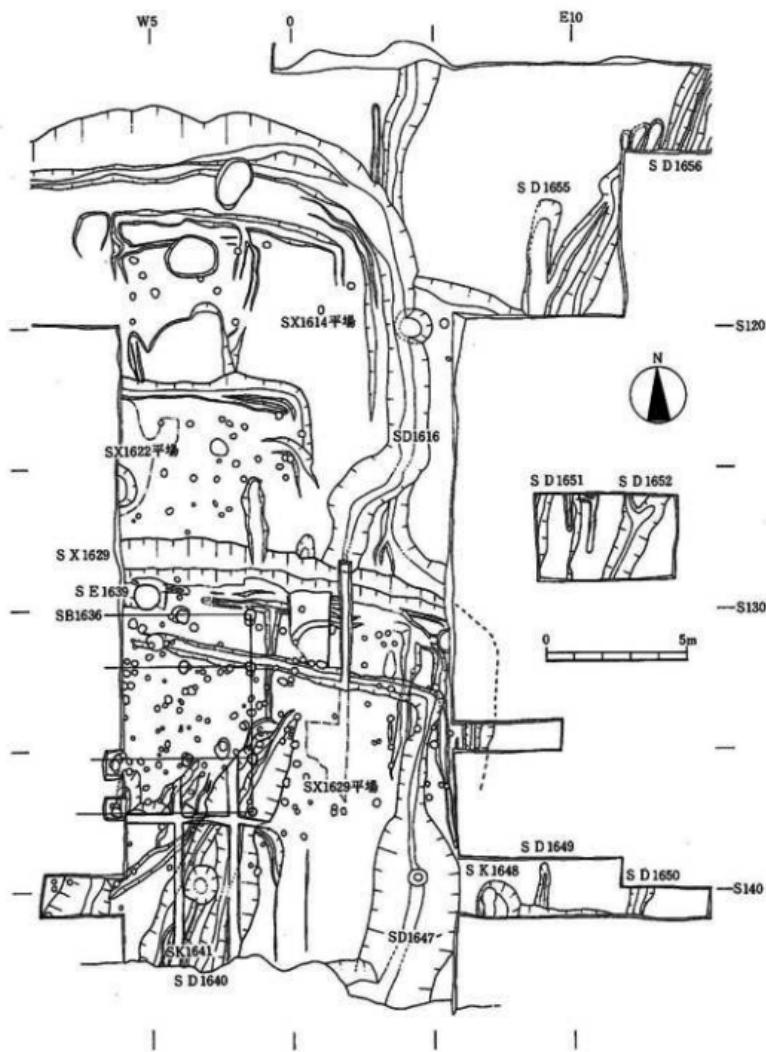
瓦には軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。軒丸瓦は130、221~228、423、427が各1点、431が3点であり、軒平瓦は511が1点、650が2点、721Aが2点である。平瓦にはIA類、IC類aタイプ、同bタイプ、IB類、IC類がみられる。

B. 南区(第17図、図版6)

南区では平場3のほか多数の土壌・溝などが検出され、これらには第18図のような重複関係がみられた。出土遺物には、瓦・かわらけ・土師器・須恵器などがある。以下では南区の北半部・南半部・東拡張北部に分けて順に記載する。なお、かわらけについてはIV考察で記す分類記号を用いることにするが、P24に概略をかかげておく。



第17図 南区の遺構・層の重複関係



第18図 南区の検出構造

〈かわらわけの分類記号〉

I A類	手づくねによる杯。	口径約 14~16 c m.
I B類	手づくねによる小皿。	口径約 9~10 c m.
II A類	ロクロ調整による杯。	口径約 14~15 c m.
II B類	ロクロ調整による小皿。	口径約 8~9 c m.
II C類	ロクロ調整によるもので、台ないし脚をもつ(器形不明)。	

(1) 北半部

S X1614 平場と S D1615 溝 (第 18 図)

S X1614 は S X1604C 道路跡を大きく破壊して形成された平場で、S D1615 はこの北と東の縁を巡る水切りの溝である。

S X1614 : 東西 12m 以上、南北 12m ほどの規模で、北端の段は約 1.4m の高さを持つ。この平場には直接表土が堆積していた。

S D1615 : 検出面は北東部が第 3 層、他は地山面であり、南半は第 2 層に覆われていた。S X1629 平場と重複し、これより新しい。北辺部分では幅 0.5m、深さ 0.1m と規模が小さいが、東縁では大きくなり幅が 1.5m、深さ 0.3m ほどになる。断面は全体に浅い U 字形をなす。S D1615 の出土遺物には平瓦 I A 類 1 点、II B 類 2 点、丸瓦 2 点がある。

S D1617 溝 (第 18 図)

S X1614 平場北部の地山面で検出した E 状の溝であり、東西は 8.0m、南北は 2.5m 以上。S K1619 と重複し、これより古い。幅は 0.5m 前後、深さ約 0.1m で、断面は浅い U 字形をなす。遺物は出土していない。

S K1619 土壙 (第 18 図)

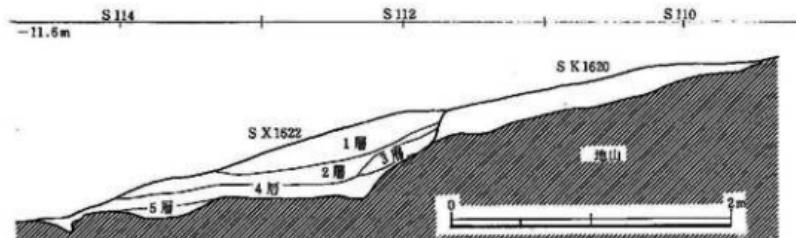
地山面で検出した梢円形の土壙である。長径 1.8m、短径 1.4m、深さ 1.4m 以上(ボーリングによると 1.8m)、断面は逆台形をなし、井戸の可能性もある。堆積土は暗褐色(10 YR 3/4) 砂質シルトなどである。出土遺物には平瓦 II B 類 4 点と丸瓦 3 点がある。

S K1620 土壙 (第 18 図)

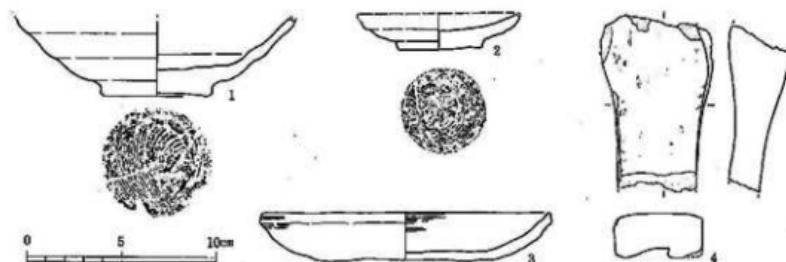
S X1614 の中央部地山面で検出した不整円形とみられる土壙で、南は S X1622 により破壊されている。東西は 3.0m、南北 2.9m 以上、深さ 0.3m である。底面はほぼ平坦であるが、レベルは南に向かって低くなる。出土遺物はかわらけ II B 類の底部 1 点のみである。

S X1622 平場・S D1623 溝・S A1624 ピット群 (第 17・19・20 図、図版 7)

S X1622 は S K1620 南の地山面で検出した平場で、S D1623 はその北と東縁を巡る水切りの溝である。また、S A1624 は平場で検出した小ピット群である。



第19図 S X 1622 平場跡・S K 1620 土壌の断面図



番号	層位・遺構	種類	特徴など	口径	底径	高さ	品番号
1	S X 1622-2層	かわらけⅡA類	ロクロ調整の环	>14.8 cm	5.7 cm	>4.2 cm	7116
2	S X 1622-2層	かわらけⅡB類	ロクロ調整の小皿	約8.6 cm	4.3 cm	約1.9 cm	7116
3	S X 1622-4層	手づくねの环		15.4 cm		2.6 cm	7116
4	S X 1622-4層	瓦石					7116

第20図 S X 1622 平場跡の遺物

S X 1622：東西7m以上、南北4m以上の規模で、調査区の西へ延びる。面は平場で、北の段の高さは0.6mである。この段部を中心として1層～4層の堆積がみられた。

遺物は3層を除く各層から微量の土器が、また4層を除く各層から小量の丸瓦と平瓦が出土した(第20図)。

1層出土の土器にはかわらけⅠA類の体部とⅡA類の底部、土師器高台杯底部、須恵器瓶底部、須恵系土器高台杯底部の各1点がある。平瓦にはⅠA類・ⅡB類・ⅡC類がある。

2層出土の土器にはかわらけⅡA類の口縁～底部1点(1)、底部2点、ⅡB類(2)、須恵系土器高台杯底部1点がある。平瓦にはⅠA類・ⅡB類・ⅡC類がある。

3層出土の平瓦にはⅠA類・ⅡB類・ⅡC類がある。

4層出土の土器にはかわらけⅠA類の口縁～底部1点(3)、底部2点、ⅡA類の口縁部1点、体部6点、底部2点、ⅡB類の底部2点、須恵器甕体部4点、須恵系土器高台杯と杯

底部の各 1 点、砥石 1 点がある。

S D 1623：幅がおよそ 0.4m、深さが 0.1m であり、断面は浅い U 字形をなす。遺物は出土していない。

S A 1624 ピット群：S X 1622 平場堆積層下の地山面で検出した径 0.2m ほどのピット群である。この中には平場にともなう小規模な建物の柱穴かと思われるものも含まれるが、判然としない。遺物は出土していない。

S K 1625 土壙

S A 1624 の西の整地層 III と地山面で検出した土壙で、西は調査区外へ延びる。径 1.4m の円形と推定され、深さ 0.15m である。遺物は出土していない。

(2) 南半部 (第 21~26 図)

S X 1629 平場 (第 21~23 図)

第 2 層下の地山面で検出した平場で、東西 12m 以上、南北 13m ほどの規模を持つ。S D 1615 と重複し、これより古い。東端は調査区の東にほぼ沿うが、西は調査区外に延びており、現地形を考慮すると東西の規模は 40m ほどかと思われる。北の段の高さは 0.8~1.0m であり、段際を中心に 4 層の堆積層がみられた。最上層の 1 層は自然堆積であるが、2 ~ 4 層は盛土整地層である。これらの堆積層と平場で検出した遺構の関係を整理すると以下のようになる。

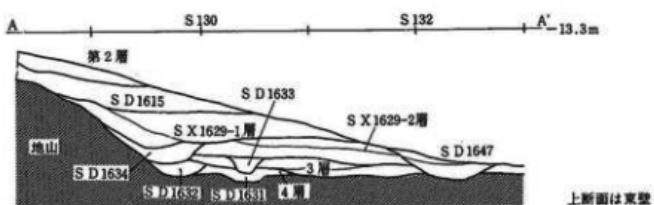
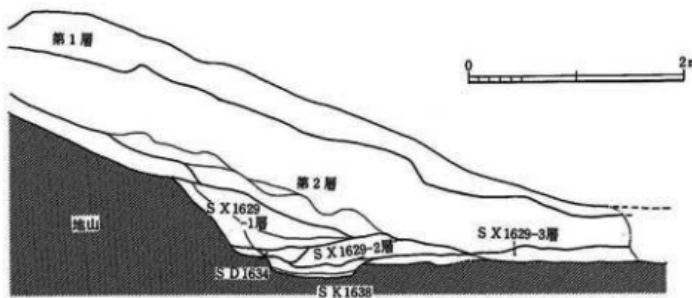
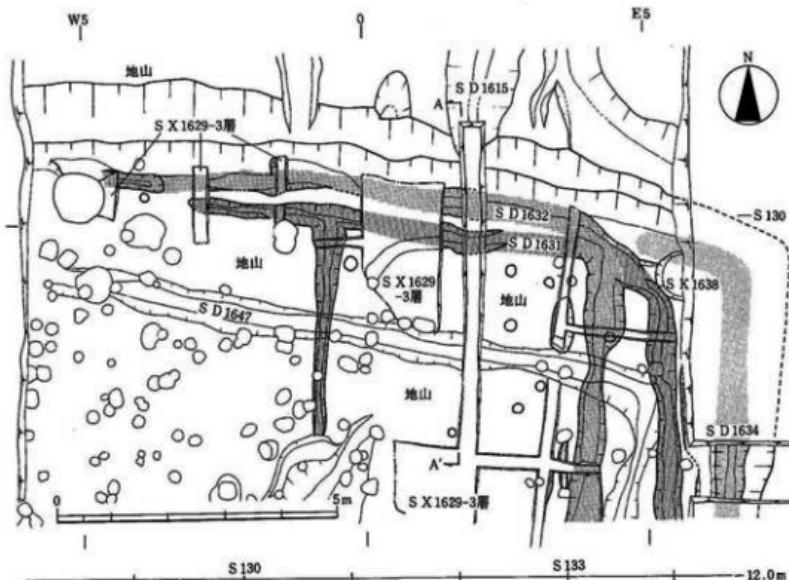
- a. 地山面で検出され、4 層に覆われるもの S D 1631
- b. 4 層を切り、3 層に覆われるもの S D 1632
- c. 3 層を切り、2 層に覆われるもの S D 1633, S K 1638
- d. 2 層を切り、1 層に覆われるもの S D 1634
- e. 3 層を切り、1 層に覆われるもの S B 1636, S E 1639
- f. 3 層を切るが、2・1 层との関係が不明なもの S D 1640, S K 1641
- g. 2 層を切るが、1 层との関係が不明なもの S D 1647

これによって 1 层に覆われる a ~ e が平場にともなうものであること、また、S X 1629 平場には、A : 平場の形成と a の遺構 → B : 整地 (4 層) と b の遺構 → C : 整地 (3 層) と c の遺構 → D : 整地 (2 層) と d の遺構 という変遷があったことが知られる。e の遺構については C ないし D の時期のものとなる。

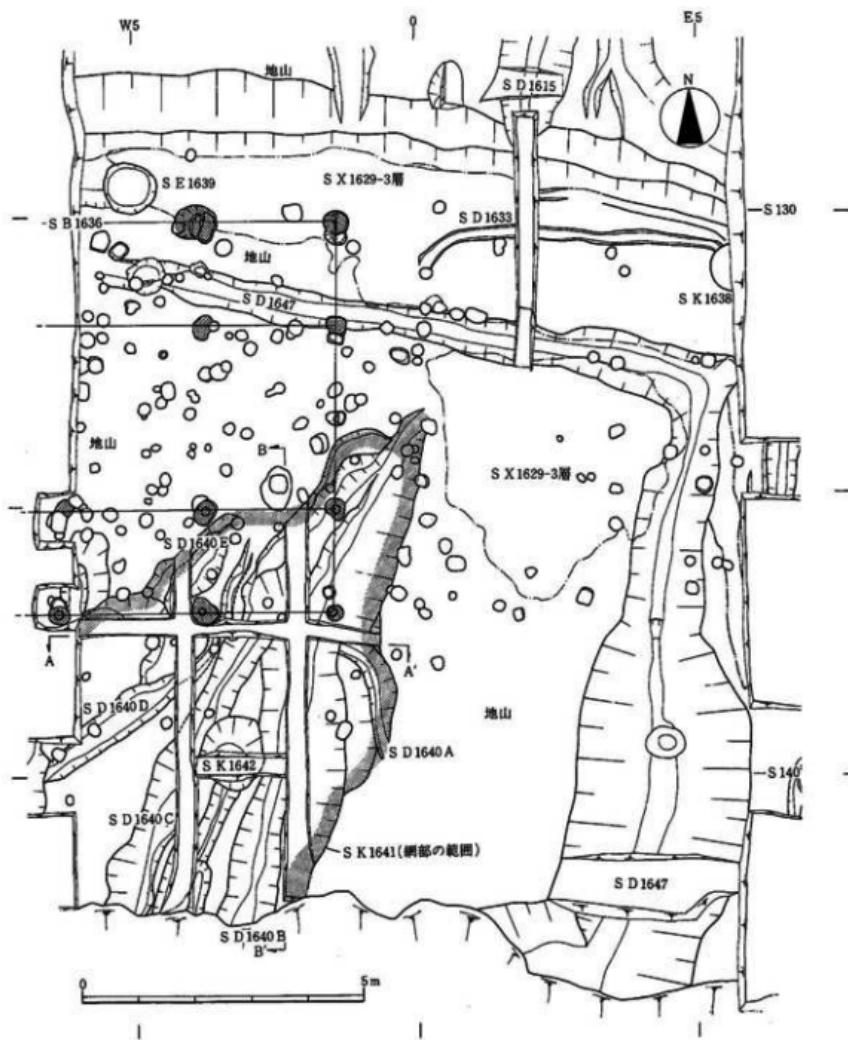
〈S X 1629 A の時期〉 (第 21 図)

斜面を削平して平場を造りだし、水切りのために S D 1631 溝を設けている。

S D 1631 溝：S X 1629—4 層下の地山面で検出した溝で、平場の北と東の縁に沿って L



第21図 S X 1629 平場跡 (その1)



第22図 SX1629平場跡（その2）

状に曲がる溝と北縁中央から南に延びる溝からなり、全体としてF状をなす。幅は0.3m前後、深さは0.1mほどで、断面はU字形をなす。遺物は出土していない。

〈S X1629Bの時期〉(第21図)

北の段付近に局部的に盛土整地(S X1629—4層)を行い、水切りのためにS D1632溝を設けている。

S X1629—4層：にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルトの整地層で、岩盤碎片を多量に含む。局部的に分布する。遺物は出土していない。

S D1632溝：平場の北・東の縁を巡るL字状の溝で、位置はS D1631よりもやや北側と西側へ移動している。幅は0.4mほど、深さは0.1mほどで、断面は浅いU字形をなす。遺物は出土していない。

〈S X1629Cの時期〉(第22図)

平場北半部を中心に盛土整地(S X1629—3層)を行い、当初にはS D1633溝を、その後S D1633を切ってSK1638土壤を設けている。

S X1629—3層：にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土の整地層で、東西10m、南北7mのやや広い範囲に厚さ0.1mほどで分布する。出土遺物にはかわらけのIA類口部2点とIB類の底部1点がある。

S D1633溝：平場の北寄りの位置で検出した長さ6mの東西溝で、両端部が南へ屈曲することからみて、S D1631・1632や後述するS D1634とは性格が異なるものとみられる。幅は0.3m弱、深さ20cm、断面U字形である。

溝内から三筋壺の体部1点が出土し、S X1629—2層・1層および南区第3層の体部資料と接合した(第23図1)。この詳細はS X1629—2層の項で述べる。

SK1638土壤：調査区東端で検出した円形とみられる小土壤で、径は0.8m、深さ0.2mである。遺物は出土していない。

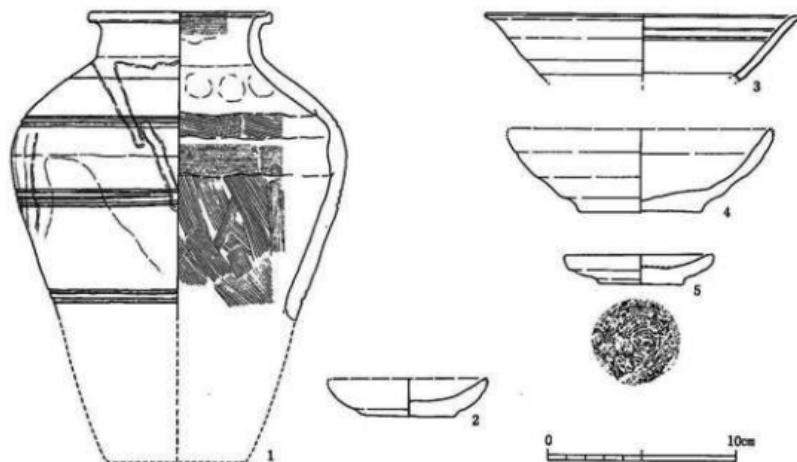
〈S X1629Dの時期〉(第22図)

平場北縁部を中心に盛土整地(S X1629—2層)を行い、水切りのためにS D1634溝を設けている。

S X1629—2層：褐色(10YR 4/4)砂質土の整地層で、東西約4m、南北3mの範囲に厚さ0.2mほどで分布する。

出土遺物には少量のかわらけ・三筋壺・須恵器・須恵系土器・平瓦・丸瓦がある。かわらけはIA類口部3点、底部2点、IB類の底部3点(第23図2)、IC類の底部1点である。

三筋壺は体部片およびこれと同一個体とみられる口縁部である(第23図1)。体部片はS



番号	層位・遺物	種類	特徴など	口径	底径	高さ	品番号
1	S X1629-2層	三底壺	S D1633, S X1629-1層、第3層と接合	9.5cm		>16.2cm	7110
2	S X1629-2層	かわらけⅢB類	ロクロ調整小皿	約8.5cm	4.8cm	約2.0cm	7112
3	S X1629-1層	白磁碗	S X1641の白磁碗底盤と同一個体か	約16.7cm			7110
4	S X1629-1層	かわらけⅢA類	ロクロ調整小皿	約14.2cm	6.4cm	約4.4cm	7113
5	S X1629-1層	かわらけⅢB類	ロクロ調整小皿	7.9cm	4.4cm	1.6cm	7112

第23図 S X1629 平場跡の遺物

X1629-1層・S D1633・南区第3層出土のものと接合した。第23図の1はこれらにもとづき復元的に示したものである。口縁部は肩から垂直に立ち上がり、その上半が外反し口縁端部が上に引き出されている。三筋文は2ないし3条の複線である。断面は灰白色、内面にはぶい赤褐色、外面は暗褐色で、口縁から肩部にかけてにぶい緑色の自然釉がかかる。製作技法の痕跡としては、内面の下半に粘土紐の合わせ目とナデ、上半にはオサエと軽いナデが、また、外面には軽いナデがみられる。この三筋壺の形態的特徴は横崎彰一氏の常滑窯系三筋文陶器の編年について第2段階のものと共通し、12世紀第2四半期と位置づけられている。⁽²⁾

須恵器は杯の口縁部1点と甕体部4点である。須恵系土器は高台杯の底部1点である。

S D1634溝：平場の北・東に沿って巡るとみられる溝であるが、断続的に検出したためやや不明な点が多い。幅は約0.3~0.5m、深さ0.2mで、断面はU字形をなす。遺物は出土していない。

〈S X1629 CないしDの時期の遺構〉（第22図）

S X1629 のCの時期かDの時期か決定できない遺構には、S B1636 建物跡とS E1639 井戸跡がある。

S B1636 建物跡：S X1629—3層上面と地山面で検出した桁行3間以上、梁行3間の東西棟掘立柱建物跡で、1間の身舎に南北両側に庇が付く。S D1647溝・S K1641凹みと重複し、両者より古い。柱穴は12個検出しており、径0.6mの円形をなす。深さは0.6mほどで、断面は上方が大きく開く形をなす。埋め土は岩盤ブロックを多量に含む褐色(10YR4/6)シルトを基調とするものが多い。柱痕跡は5箇所で確認しており径約15cmである。桁行の総長は4.7m以上で、柱間は東より2.3m・2.6mであり、梁行の総長は7.0mで、柱間は北より1.9m・3.3m・1.8mである。建物の方向は東妻で測ると発掘基準線に一致する。遺物は出土していない。

S E1639 井戸跡：S B1636のすぐ北側のS X1629—3層上面で検出した円形土壙で、素掘りの井戸跡とみられる。径は0.9m、深さ1.4mで、壁はほぼ垂直に立つ。出土遺物にはかわらけII B類体部破片2点と須恵器甕体部1点がある。

〈S X1629 平場廃絶後の堆積層〉

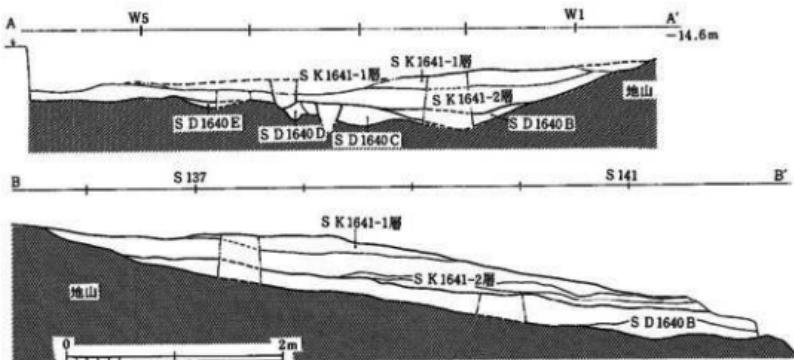
S X1629—1層：褐色(10YR4/4)シルトの自然堆積層で、東西7m、南北2.5mの範囲に最大の厚さ0.4mで分布する。

出土遺物には小量のかわらけ・三筋壺・白磁・土師器・平瓦・丸瓦がある(第23図)。かわらけはIA類の口縁部1点、IIA類の口縁～底部1点(4)と底部1点、IIB類の口縁～底部2点(5)と底部と口縁部各1点である。三筋壺は体部片でSD1633出土のものと接合した。白磁は口径17cmほどの椀である(3)。体部下半の内外にみられる軽い稜の上方は直線的に外傾し、口縁端部はわずかに外反する。内面の口縁付近には浅い沈線が2条認められる。また、内外全面ににごった灰白色の釉がかかる。なお、これと同一個体かと思われる底部が南区第3層から出土している。土師器は内黒の杯類体部1点である。

SD1640溝群(第22・24図)

南端部のSK1641凹み下層の地山面で検出した溝群(A～E)であり、A→B、A→Cという重複関係がみられた。このうちAは屈曲する小溝であるが、他は北が東に偏する南北溝で南に向かって次第に幅と深さを増す。いずれも人為的に埋められている。S B1636建物跡と重複し、これより新しい。

出土遺物には微量のかわらけと小量の丸瓦・平瓦があるが、採集時にA～Eの識別が不充分であったため一括して記載する。かわらけはII A類の底部とIIC類の底部の各1点である。平瓦はIA類1点、IC類1点、IIB類11点、IIC類4点である。



第24図 SK1641 凹み・SD1640 溝群（平面は第22図）

SK1641 凹み（第22・24・25図）

SD1640 溝群が埋まりきらなかつたため生じた凹みで、人為的な掘り込みの形跡は無い。SB1636 建物跡・SK1642 土壌と重複し、SB1636 より新しく、SK1642 より古い。堆積土は2層に分かれ、上層の1層はSD1640 溝群の周辺に広がり東西8m以上、南北8.5mの範囲に分布し、下層の2層はほぼSD1640 の範囲で分布する。

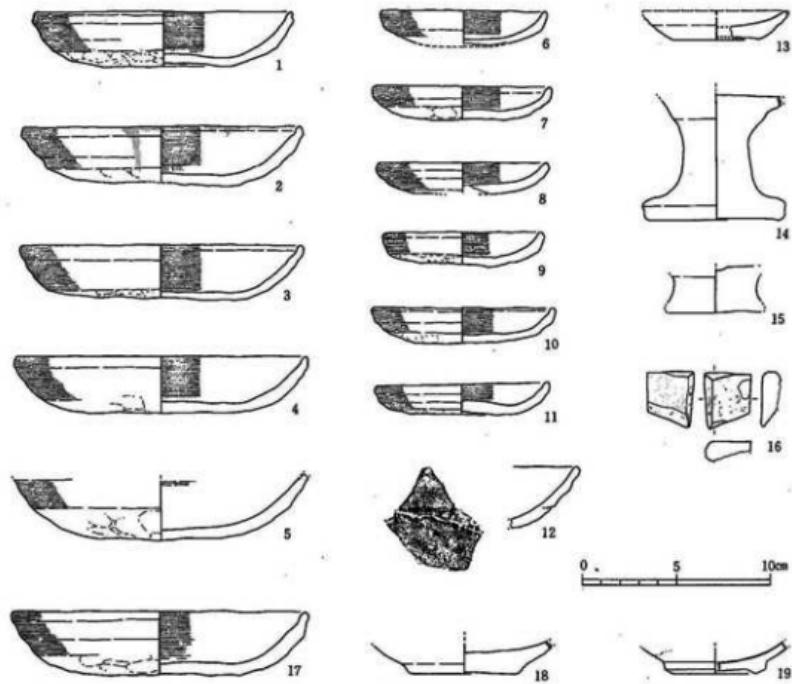
1層の遺物（第25図）：これには多量のかわらけ、微量の須恵器・砥石、多量の瓦がある。かわらけにはIA類（1～5）、IB類（6～11）、IIA類、IIB類（13）、IIC類（14・15）がある。図示した以外の破片資料としてはIA類の口縁部32点・体部28点・底部9点、IB類の口縁部14点・体部1点・底部7点、IIA類の口縁部1点・底部2点、IIB類の口縁部1点、底部2点がある。手づくねのI類が大部分を占め、ロクロ調整のものII類はきわめて少ない。

須恵器は甕体部1点である。砥石は灰白色の粘板岩の小型のもので、裏面と1側面が欠損しているが、他の面には擦痕が著しい（16）。

瓦は平瓦のIA類2点、IC類1点、IIB類10点、IIC類4点と丸瓦9点である。

2層の遺物：微量のかわらけ・白磁・須恵器・土師器・須恵系土器と多量の瓦がある。

かわらけにはIA類（17）、IB類、IIA類（18）がある。図示した以外の破片資料としてはIA類の口縁部3点・体部1点・底部1点、IB類の口縁部1点、IIA類の口縁部1点・体部1点・底部2点がある。白磁は碗の底部で、SX1629-1層の白磁碗と同一個体かと思われる（19）。釉の及ばない底部とその周辺には回転ヘラケズリの痕跡がみられる。土師



番号	遺物・遺構	種類	特徴的な部	口径	底径	器高	施番号
1	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环	13.8 cm		2.9 cm	7117
2	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环	14.9 cm		3.1 cm	7117
3	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环	15.1 cm		2.9 cm	7117
4	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环	15.6 cm		3.0 cm	7118
5	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环	>15.6 cm		>3.4 cm	7118
6	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	8.9 cm		約1.9 cm	7118
7	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	9.6 cm		1.8 cm	7117
8	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	9.1 cm		約1.8 cm	7118
9	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	9.8 cm		1.9 cm	7117
10	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	9.9 cm		1.9 cm	7117
11	SK 1641-1層	かわらけⅠB類	手づくね小瓶	9.4 cm		1.6 cm	7117
12	SK 1641-1層	かわらけⅠA類	手づくね环 線土の巻き上げ痕跡				7118
13	SK 1641-1層	かわらけⅡB類	ロクロ調節小瓶	約7.9 cm	8.6 cm	約1.5 cm	
14	SK 1641-1層	かわらけⅡC類	ロクロ調整		7.2 cm	>6.6 cm	7117
15	SK 1641-1層	かわらけⅢC類	ロクロ調整		約5.4 cm		7118
16	SK 1641-1層	砥石					7118
17	SK 1641-2層	かわらけⅠA類	手づくね环	15.7 cm		3.4 cm	7110
18	SK 1641-2層	かわらけⅡA類	ロクロ調節环				7118
19	SK 1641-2層	白細陶	SK 1629-1層の焼と同一個体か。		5.6 cm		7110

第25図 SK 1641 回みの遺物

器は内黒の高台杯の底部2点、須恵器は壺体部3点、須恵系土器は杯と高台杯の底部各1点である。

瓦は軒平瓦511の1点と、IA類13点、IB類1点、II B類48点、II C類12点、丸瓦16点である。

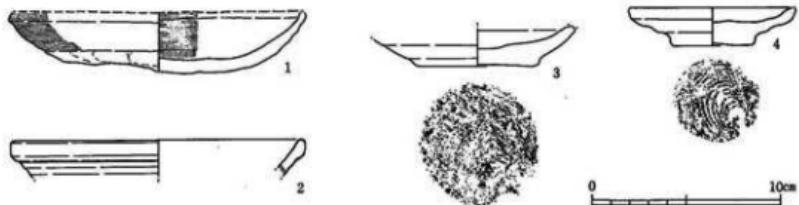
S K1642 土壙（第22図）

S K1641回みと重複し、これより新しい円形の土壙で、径1.2m、深さ0.7mで、断面は逆台形をなす。堆積土からかわらけIB類の口縁部1点と小量の平瓦が出土した。

S D1647溝（第22図）

南区第2層下のS X1629—2層上面で検出したU状の溝である。平場の北縁から2m前後南に離れており、東西部分での方向は東で南に約9度偏し平場北縁の方向と異なる。西端では幅0.7m、深さ0.1m、断面浅いU字形であるが、東に向かって次第に規模を増し、屈曲部をへてS 137m付近から急に大きくなり、幅3.0m、深さ1.2m、断面がV字形になる。

堆積土から寛永通宝1枚、少量のかわらけIA類（第26図1）や平瓦・丸瓦が出土した。



番号	層位・遺構	種類	特徴など	口径	底径	器高	器番号
1	SD1647	かわらけIA類	手づくね坪	約15.6cm		約3.2cm	7119
2	南区第2層	白磁塊	玉縁	約15.5cm			7110
3	南区第2層	かわらけⅡA類	ロクロ圓盤坪		6.2cm	>2.1cm	7113
4	南区第2層	かわらけⅡB類	ロクロ圓盤小盤	8.8cm	4.3cm	2.0cm	7113

第26図 SD1647溝、南区第2・3層の遺物

(3) 東拡張部の遺構（17図）

発掘基準線の東12m以東については、北、中央、南の3箇所に設定した拡張区ないし小調査区において多数の溝と土壙を検出した。

北端の拡張区では、第3層下の地山面でSD1656南北溝、第2層下の第3層上面でSD1655南北溝を検出し、中央の小調査区では第2層下の地山面でSD1651・1652溝南北溝、また、南端の拡張区では第2層下の地山面でSD1649・1650南北溝とSK1648土壙を検出した。これらの溝は方向が発掘基準線と大きく異なり道路跡とは関連しない遺構であるこ

とが判明した。S D1651 と S D1652 から少量の丸瓦と平瓦が出土した。

(4) 南区の堆積層の遺物 (第 26 図)

南区の第 2 層と第 3 層からは小量の瓦と土器が出土した。

第 3 層

土器には白磁 1 点のほか土師器杯、須恵器杯・甕、須恵系土器杯が各数片がある。白磁は玉縁椀の小破片で、にぶい灰白色の釉がかかっている(2)。胎土は混入物がきわめて少なく焼きしまっている。

瓦には軒丸瓦の 240B、427 が各 1 点、軒平瓦の 511 が 1 点、640 が 2 点、650、721、721B が各 1 点が含まれている。

第 2 層

土器にはかわらけ・須恵器がある。かわらけは IA 類の口縁部・体部の各 1 点、II A 類の口縁～底部 1 点(3)、底部 4 点、口縁部 1 点、体部 1 点、II B 類の口縁～底部(4)・底部の各 1 点である。須恵器は甕類の体部 11 点と瓶底部 1 点である。甕体部の中には内面に摩耗痕があり転用硯とみられるもの 1 点が含まれている。

瓦には軒丸瓦の 431 が 1 点、軒平瓦の 511・640・650・710・921 が各 1 点、刻印「丸」A の平瓦 II B 類が 1 点含まれている。

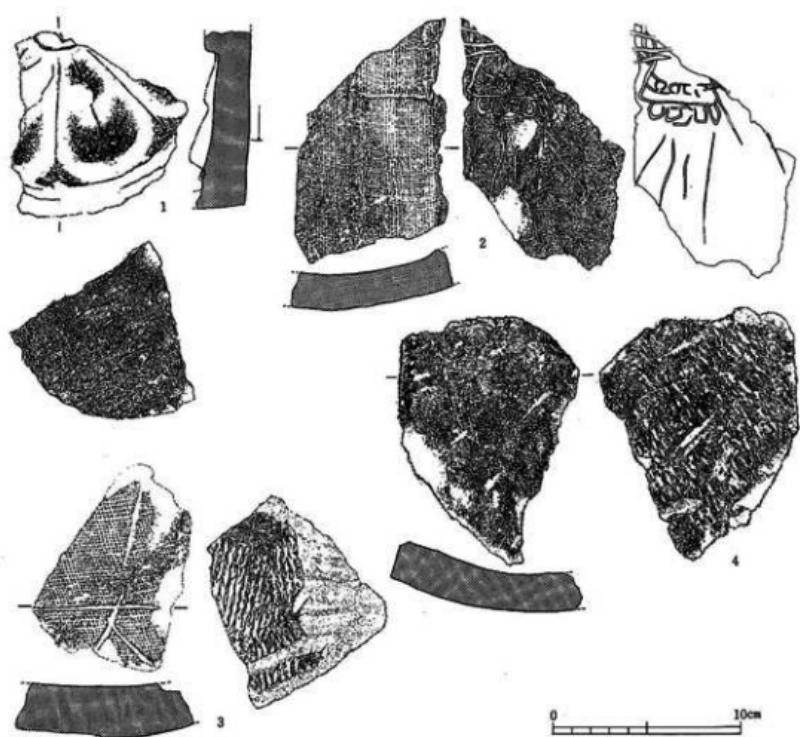
C. 第 1 層の遺物 (第 27 図)

南北両区の第 1 層からは比較的多量の瓦と小量の土器、壁が出土している。

瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦は 126 が 1 点、120～134 が 3 点、240 が 1 点、240～242 が 1 点、311 が 1 点、320 が 2 点、310B、420、423、427 が各 1 点、431 が 3 点であり、このうち 126 は瓦当裏面に摩耗痕がみられ転用硯かと思われる(1)。軒平瓦は 511 が 5 点、621 が 1 点、640 が 5 点、650 が 2 点、710 が 3 点、721A が 1 点、921 が 1 点である。丸瓦・平瓦は 50 箱分あり詳細な分析はできていないが、丸瓦の中には玉縁に「常」とヘラ書きされたもの 1 点、平瓦の中には凸面に内容不明の絵がヘラ書きされた IB 類 1 点(2、図版 8-4)と「大」とヘラ書きされた II C 類 1 点(3)がある。隅瓦は平瓦 II B 類を用いたもの(4)で、第 III 期の瓦とみられる。これまで多賀城跡から出土した隅瓦はすべて第 I 期のもので、今回の瓦は新資料である。

土器は須恵系土器杯・高台杯、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、かわらけ杯、近代の陶器があるが、いずれも小破片である。

壁材は現状の厚さ 5.8 cm で、スサを多量に含むものであり、焼けている(図版 8-2)。



番号	種類	特徴など	苗番号	番号	種類	特徴など	苗番号
1	軽瓦瓦 126	船形縫、裏面に摩耗痕	7104	3	平瓦 BC類	凹面にへラ巻きの「大」	7102
2	平瓦 IB類	凸面に内容不明の縫	7104	4	隅瓦	平瓦 BC類を用いる	7104

第27図 北区・南区第1層の遺物

4. 考察

今回検出した遺構には、門跡1、堀跡2、道路跡5、平場3、井戸跡1、建物跡1のほか多数の溝や土壌があり、すでに述べたように道路以前の遺構、道路存続期の遺構、道路より新しい遺構に大別される。出土遺物には瓦・須恵器・土師器・須恵系土器・白磁・かわらけ・土製品・壁などがある。以下では(1)道路以前の遺構、(2)政府南の道路跡、(3)道路以後の遺構と遺物、について若干の検討を加える。

(1) 道路前の遺構

これには政府南門の南約25m、西22mの位置にあるSB1599棟門とこれと接続する東西方向のSA1600・1601材木塀、およびこれらの塀の北側で平行して東西に延びるSD1602・1603溝がある。SB1599は間口約1.5mの小規模な棟門であり、塀は径15cm前後の細い丸太材を密接して立て並べたものである。塀は棟門から東へ27.5mまでと西へ0.8mまでの範囲で確認されたが、東端は削平のため、また西端は未調査のため不明である。

これらの年代については、これより新しい政府南の道路が後述するように第Ⅰ期のうちには構築されたと考えられることから、下限が第Ⅰ期以前となる。さらに、塀材の切取り溝から瓦が出土したことから多賀城に関わる遺構と考えられ、出土瓦が第Ⅰ期のものに限られる状況からみても、これらの門と塀は第Ⅰ期の期間中のものと推定される。

ところで、塀の南側の地域は現状ではゆるい斜面形となっているが、これは道路の最終期に大規模な盛土整地が行われた結果であり、塀の構築時には南に向かってかなり急に傾斜する地形であったことが知られた。一方塀の北側ではやはり南に向かって傾斜するもののそもそもその地形が比較的ゆるやかである。この地形的な状況からみると材木塀は北側の地域を画するものと推定して良いと思われる。

ここで問題になるのは第Ⅰ期政府との関係であり、まず想定されるのは、材木塀で囲まれた施設から築地で囲まれた本格的な政府へ変遷した可能性であろう。しかし、塀の北側すなわち政府地区については全面積の6割強が調査済みである^[3]が、これまで第Ⅰ期政府の建物や築地より古い遺構を全く検出していない。また、政府中軸線上の位置は材木塀で塞がれており、門がかなり西へ寄っていることから、これを第Ⅰ期から第Ⅳ期までほぼそのままの形が踏襲される政府の前身的な施設とみなすことは困難と思われる。したがって、この性格については門と塀が簡易な施設である点を重視し、第Ⅰ期の造営中の暫定的な施設と考えておきたい。ただし、創建時におけるこういった暫定的施設の機能については現段階では明確にしえないなどの問題が残る。

(2) 政府南の道路跡

従来の調査結果

政府南門と外郭南門を結ぶ地域については道路跡の検出を目的として、これまで今次調査北区の東側を対象とした第5次調査、外郭南門地区の第7・48次調査、この間の地区を対象とした第43・44次調査を実施している(第1図)。第5・7・48次調査では削平のため道路遺構は全く遺存していなかったが、第43・44次調査では道路の盛土整地や側溝・暗渠が検出され、政府と外郭南門を結ぶ道路跡にはa1期→a2期→a3期→b期→c期の5

時期の変遷があることを確認した⁽³⁾。この詳細および政庁や外郭南門の変遷との関係については年報 1983 の II~IV 章で述べたが、再度各期の概要をまとめておきたい。なお、上記年報では道路構築期の名称にアルファベット大文字を用いているが、今次調査の道路変遷との混乱を避けるため本稿では小文字に置き換えている。

a 1 期：丘陵寄りの東側では地山を削り、沢寄りの西側では盛土整地を行って路面を造成し、東側に素掘りの側溝を設けた時期である。また、政庁と外郭南門間で最も低い位置には道路東側の水を西側の沢に抜くための石組暗渠がある。路幅は 10m ほどと推定された。年代は暗渠から出土した木簡から 8 世紀前半と考えられた。

a 2 期：暗渠を改修した時期である。

a 3 期：再度暗渠を改修した時期であり、暗渠に瓦が用いられている。年代は暗渠の施設瓦から 8 世紀の後半頃と考えられた。

b 期：盛土整地を行って路面をかさ上げするとともに、路幅を約 18m に拡幅した時期である。a 期の暗渠があった位置では盛土の最下部に多量の石を突き込んでくら暗渠としている。構築年代は盛土整地出土の瓦から 8 世紀末から 9 世紀前半までの間と考えられた。

c 期：b 期道路の西側に盛土整地を継ぎ足した時期で、路幅は約 22m となる。このほか路面排水の暗渠が設けられている。構築年代は盛土から出土した瓦から 9 世紀後半頃と考えられた。

今回の調査結果

S X 1604 道路跡は政庁中軸線の西側を対象とした北区のみに遺存しており、A 1 → A 2 → B 1 → B 2 → C という 5 時期の変遷が認められた。各時期の概要は以下のとおりである。

A 1 期：西側を中心に盛土(整地層 I)して路面を造成し、西に素掘りの側溝 S D 1605 を設けた時期である。路幅は約 13m と推定され、方向は発掘基準線と一致する。整地層・側溝から遺物は出土していないが、これより古い材木辦の抜取り溝から第 I 期の瓦が出土したことから、8 世紀前半以降に構築されたことが知られる。

A 2 期：側溝の改修期で素掘りの S D 1606 を設けている。側溝の位置は A 1 期より 1.2 m 東へ寄っており、路幅は約 10.6m と推定される。方向に変化はない。側溝の堆積土から第 I 期の瓦が出土した。

B 1 期：整地層 I 上に整地層 II を盛土して路面を造成し、政庁近くでは西側の路肩に自然石を並べている。路幅は約 13m と推定される。方向に変化はない。整地層 II から第 I 期の瓦が出土した。

B 2 期：側溝 S D 1608 を付加した時期である。路幅・方向に変化はない。S D 1608 設置以前に堆積した第 4 層から第 II 期の平瓦 II B 類が出土したことから、構築年代は 8 世紀の

中頃より新しいことが知られる。なお、SD1608の堆積土にも第Ⅱ期の瓦が含まれる。

C期：政庁南西の地域に大規模な盛土（整地層Ⅲ）を行い、円礫を用いて緩やかな階段を設けている。路幅は約23mと推定される。方向に変化はない。整地層Ⅲ出土の瓦は大部分が第Ⅰ期と第Ⅱ期のものであるが、1点のみ第Ⅲ期のものが含まれる。これを重視すれば構築年代は8世紀末以降となる。廃絶年代については、階段が須恵系土器の小破片を多量に含む第2層に覆われていることから、10世紀のうちと考えられる。

なお、整地層Ⅲは道路部分に限らず政庁の西南前面の広い範囲（東西36m以上、南北32m以上）に分布し、厚さも調査区西端で1.8mに達するなど大規模なものである。この状況からC期に政庁西南方の地域の使われ方が大きく変化したことが推定される。整地層Ⅲの上面では若干の小柱穴やピットを検出したが、部分的な調査にとどまつたため、遺構の様相を把握するまで至らなかつた。

階段について：今回階段の痕跡を検出したのはC期のみで、政庁南門の南45m付近で4段分を検出した。この南については削平のため確認できないが、これより南へ約30mまでの地域は他よりも勾配がきつく（約200/1,000）、ほぼこの範囲に階段が設置されていたものと推定される。階段の踏面の幅は北から1.8m、1.8m、1.4mと一定ではなく、地形の勾配に合わせて調整したものと考えられる。なお、A1～B2期については、前述した地形からみてやはりC期と同様に傾斜が急な部分に階段を設けた可能性が高いものと思われる。

従来の調査結果との関係

今回と従来の成果と比較すると、路幅が当初10～13mであったものが最終的にはほぼ倍に拡幅されている点は共通しており、路幅の点から今回の11mないし13mのA1期～B2期は従来の10mほどのa1期～a3期に、また、23m幅のC期が22m幅のc期に対応するものと考えられる。しかし、従来の調査でb期とした18m幅の道路に対応する遺構が今回の調査ではまったく検出されなかつた。まずこの点から検討していく。

今回の調査区においては、路幅13mのB2期と路幅23mのC期の間の時期に道路を拡張した痕跡が全くなく、他の遺構の遺存状況からすれば、削平によって痕跡が全て消失した場合を想定することも不可能とみられる。つまり、政庁前の地域では路幅18mの時期はなかつたと言えよう。したがって、政庁前と南方地域で路幅が大きく異なる道路（政庁前が12m前後で南が18m、あるいは政庁前が23mで南が18m幅）といった不自然な状況を想定せざるをえなくなる。

そこで、従来の調査の資料を再検討した結果、第44次調査でb期とした18m道路は、道路造成の盛土の様相の違いによってc期の幅約22m道路と時期差があると解釈したことにより推定したもので、明確な時期差として把握したものではなかつた。また、第43次調査

の道路変遷についても、遺構の遺存状況が悪かったため第44次調査の変遷との対応関係から推定したものであった。すなわち、第43・44次調査のb期とc期の遺構は盛土の様相の違いを重視して時期の異なる幅18mと幅23mの2つの道路としたが、両者を幅22m道路造成の際の工程差とみなしても特に不都合が生じない状況であった。したがって、政庁のすぐ南では18m幅の道路が存在した可能性がないという今回の成果にもとづいて従来の見解を修正し、第43・44次調査でb期とc期に分離して理解した遺構を一括し、C期に対応する最終期の道路跡と理解することとし、以下これをb c期と表現する。

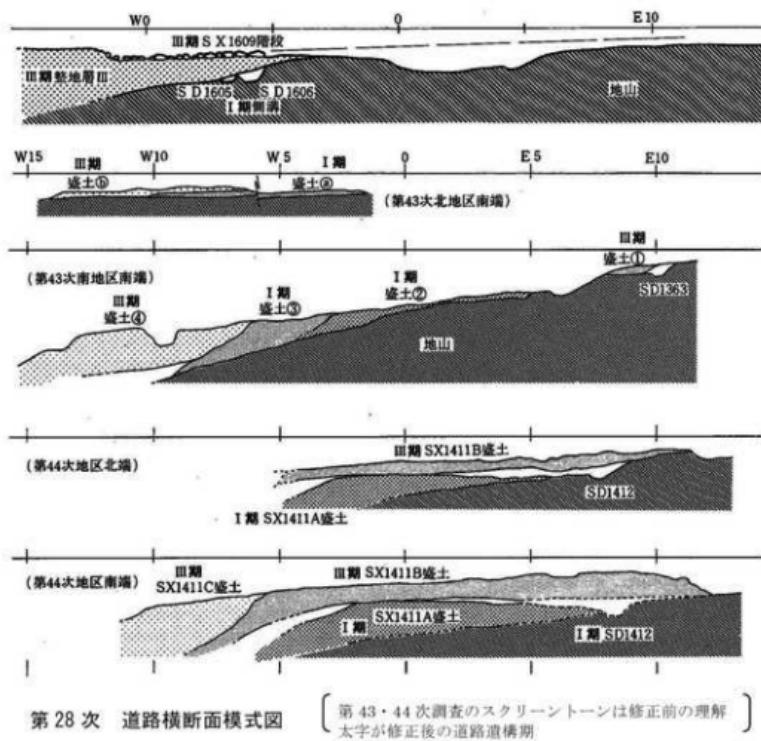
この理解に立って出土遺物を再検討すると、b c期の盛土整地出土の瓦は第I期が約3割、第II期のものが約7割でごく微量第III期のものが含まれることになる。これは今回のC期の整地層III出土の瓦の様相と共通しており、C期との対応関係に矛盾は生じない。

b c期およびC期の構築年代については第III期の瓦が作られる8世紀末頃以降であることが知られ、さらに第III期の瓦の占める割合がきわめて低いことから第III期の中でも当初に近い9世紀初頭を中心とする時期と思われる。

つぎに路幅が10~13mの時期の対応関係についてみると、まず今回の調査で最も古いA1期は従来の調査で出土木簡から8世紀前半の構築であることが知られている最古のa1期に対応するとみられる。ただし、今回のA1期より古い遺構であるSA1603の抜取り溝に第I期の瓦が含まれており、これら道路の構築は政庁第I期の造営よりやや遅れた時期のものと考えられる。また、B1期は構築時の整地層の瓦が第I期で、存続中に堆積した第4層の瓦が第I期と第II期のものに限られることから、第I期ないし第II期の期間中のものとみられ、さらに、路肩に自然石を用いている点が政庁第II期の溝や基壇に自然石を多用する状況と共通していることから、政庁第II期の造営と一連の構築である可能性が高いものと思われる。これは、道路に付設された暗渠の瓦から第II期の期間中と位置づけられたa3期と対応するものと考えられる。これによりA1期とB1期の間のA2期は、a1期とa3期の間のa2期に対応すると考えられ、構築年代は8世紀前半となる。B2期については路幅の拡幅以前であることからa3期存続中となり、8世紀後半頃の構築と考えられる。以上の関係を整理し、道路全体の変遷に名称を付すと次表のようになる。

全体	第43・44次調査	第50次調査	推定路幅	構築年代（政庁遺構期）
I A期	a1期	A1期	約13m	8世紀前半（I期）
I B期	a2期	A2期	約11m	8世紀前半（I期）
II A期	a3期	B1期	約13m	8世紀中頃（II期）
II B期		B2期	約13m	8世紀後半（II期）
III期	b c期	C期	約23m	9世紀初頭頃（III期）

なお、路幅については第43・44次調査と今回の調査結果で若干の違いが生じているが、政府南門のすぐ南側という位置を考慮すれば、政府中軸線に対し対称に折り返して得た今回の推定路幅は前回の調査結果よりも実態に近いものと思われる。



(3) 道路廃絶後の遺構と遺物

道路遺構がまったく痕跡をとどめない南区では、多数の平場・溝・土壌などが検出された(第18図)。これらのうちSX1622・1629平場、SX1641凹みはかわらけの出土状況から12世紀頃のものと考えられ(この点については後述)、他の遺構のほとんども、かわらけとの関係や遺構との重複関係から12世紀以降のものと考えられる。なお、SX1629平場と重複するSD1647溝から寛永通宝が出土しており、近世以降にもこの平坦部が使用されたことが知られる。北区では重複関係から道路より新しいことが知られる遺構としては、SD

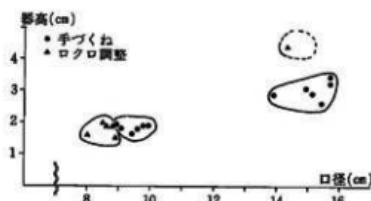
1659をはじめとした多数の溝があり(第5・18図)、これらは出土遺物や堆積土の様相などから近世～現代のものとみられる。

ここではかわらけの時期に焦点をあて、かわらけの分類と年代およびかわらけの時期の遺構について記すこととした。

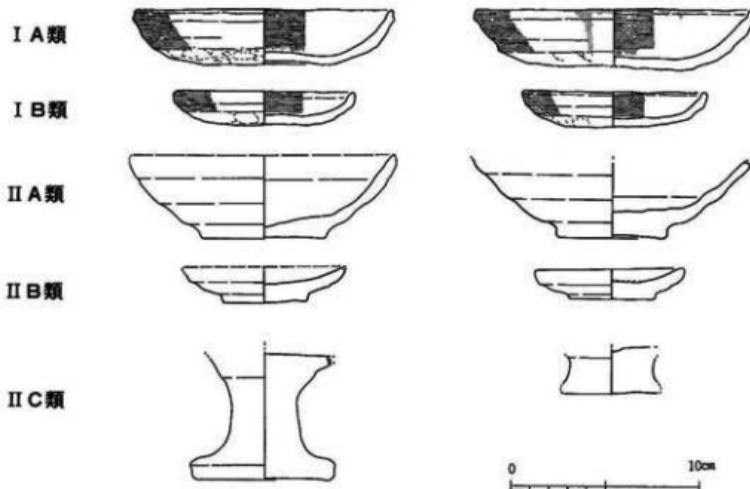
A かわらけ

かわらけの分類

今回南区南部を中心に出土したかわらけ⁽¹⁷⁾には、手づくりのもの(I類)とロクロ調整のものの(II類)があり、両者は器形・胎土の点で顕著な差がみられる。I類を法量と器形からみると、口径が14～16cm、器高3cm前後の杯(I A類)と口径が9～10cm、器高2cm未満の小皿(I B類)がある。II類には口径が14cm強で器高4cm強の杯(II A類)、口径が8～9cmで器高2cm未満の小皿(II B類)、高台ないし脚のつくもの(II C類)がある。



第29図 かわらけの法量



第30図 今回出土したかわらけの分類

I A類： 手づくりによる杯である。口径は13.8～15.7cmで、大部分は14.9cm以上である。

るが、1点のみ13.8cmと小さい。器高は2.6~3.4cmである。体部は内湾気味に外傾し、口縁端部はわずかに上方へ引き出されて三角形をなすものが多い。外面は口縁から体部中程にかけてヨコナデがみられ、その下方底部までは指頭による押えの後に軽いナデが施されている。内面は底部を1方向にナデ調整した後に体部・口縁部をヨコナデ調整している。このほかナデ調整より前の段階でついた痕跡として図版9-5のような性格不明の圧痕が内外面のほぼ全体にみられる資料があり、部分的にはかなり多数の資料にも認められる。また、1例ではあるが体部に粘土紐の接合痕とみられるものもある。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まない。色調は大部分が浅黄褐色(10YR 8/3)をなすが、1点のみ浅黄色(2.5YR 8/3)をなす。

I B類： 手づくねによる小皿で、口径は8.9~9.9cm、器高は1.6~1.9cmである。器形はI A類とほぼ共通するが、やや浅く口縁端部が明瞭な三角形をなさないものが多い。技法・胎土はI A類と共通し、性格不明な圧痕も同様に観察できるものがある。色調はすべて浅黄褐色(10YR 8/3)で、I A類の主体を占めるものと共通する。

II A類： ロクロ調整の杯で、完形品が1点のため明確ではないが、破片資料を参考にすると口径14~15cm、器高4~5cm、底径5.5~6.4cmとなり、I A類より器高が高い。体部は内湾気味に外傾する。底部は糸切り無調整である。胎土は砂粒を多量に含み、色調はにぶい褐色(7.5YR 5/4)ないしにぶい黄橙色(10YR 7/4)をなす。

II B類： ロクロ調整の小皿である。口径8.0~8.8cm、器高1.5~2.0cm、底径4.3~4.8cmで、I B類に較べ口径がやや小さ目である。体部は内湾気味に外傾するものが多い。底部は糸切り無調整である。胎土には砂粒を多量に含み、色調はにぶい褐色(7.5YR 5/4)、にぶい黄橙色(10YR 7/4)をなすものが多いが、明赤褐色(2.5YR 5/8)やにぶい赤褐色(5YR 5/4)をなすものもみられる。

II C類： 高い台ないし脚をもつもので、器面の遺存状況が悪く明確ではないがロクロ調整によるものと思われる。これには柱状高台杯と思われるものと高杯と思われるものとがあるが、上部が欠けており器形が不明のため一括した。柱状高台杯とみられるものは、底径が5.5cmほど、台部の高さは2.5cmほどである。また、高杯とみられるものは底径7.6cm、脚部の高さ6.6cmのものがある。胎土は砂粒を多量に含み、色調は赤褐色(2.5YR 5/8)である。

出土状況

ここではかわらけが出土した遺構・層のうち層位関係が把握できるものと、ある程度まとめて出土したものととりあげ、これらにおけるかわらけの組成と層位的な関係について検討する。



第31図 かわらけが出土した主な遺構の重複

まず、量的にまとまりのある S K1641 の堆積土 1 層・2 層のかわらけをとりあげる。1 層のかわらけには I A 類、I B 類、II A 類、II B 類、II C 類の全種類がみられ、手づくねの I 類が 9 割強と主体を占め、ロクロ調整の II 類は 1 割弱ときわめて少ない。I 類における杯(A)と小皿(B)の割合はおよそ同じかとみられる。2 層については量が少ないとみられ、II B 類・II C 類はみられないが、I 類と II 類の比率や A・B の割合は 1 层と大差がない。これらのかわらけは完形ないしそれに近いものが比較的多いことから、一括投棄されたものと考えられる。

他の遺構・層のかわらけについては、完形品がほとんどなくしかも量的に少ないとみられるが、かわらけが出土した遺構の中で最も古い S X1629—3 層をはじめとして S K1641 と同様に I 類と II 類が伴出したものが多い点が指摘できる。S K1641 と違う様相を示すものとしては、II 類のみの S X1629—2 層と、I 類と II 類がほぼ等量とみられる S X1622 がある。いずれも量的に少なすぎるため、これらが土器群の様相として把握できるのか、S K1641 の 2 層でみられる土器様相の欠損現象なのかは不明であるが、S X1641 のかわらけと器形的な違いは見いだせない。

なお、伴出した須恵器・土師器・須恵系土器以外の他の土器についてみると、S K1641 と S X1629—1 層の白磁碗、S X1629—2 層の三筋壺がある。

年代

今回出土したかわらけと類似する土器が出土しその年代が推定されている遺跡としては岩手県平泉町の奥州藤原氏関係の遺跡、平安京跡、神奈川県鎌倉市の源氏・北条氏関係の遺跡があげられる。

平泉出土のかわらけには、手づくねの I A・I B 類、ロクロ調整の II A～II C 類の全種

類ときわめて類似するものがみられ、すべて12世紀のものと考えられている⁽⁸⁾。平安京ではIA・IB類と技法・器形および杯・小皿がセット関係をなす点などときわめて類似した土器がみられ、12世紀段階の土師器として位置づけられている⁽⁹⁾。ただし、ロクロ調整の土師器はまったく伴わない。鎌倉では手づくねとロクロ調整のかわらけが出土している。その中でIA・IB類に最も近いものをあえてあげれば13世紀前半ないし中葉とされるII期の段階のものであるが、IA・B類とは杯の口径と器高の比および杯・小皿の体部の立ち上がり方など器形的な点で違いが認められ、同時期のものとは考えられない。一方ロクロ調整のものをみると、IIA類と類似する杯は12世紀末から13世紀初頭頃とされるI期でみられるが、伴う小皿の体部の立ち上がり方がIIB類と異なっており、これらとIIA・IIB類には時期差があるように思われる。

したがって、IA・B類の年代は平安京の土師器と平泉のかわらけとの類似から12世紀と考えられ、鎌倉で類例が出土していないことからみても13世紀までは降らないものと思われる。また、II類については今回の調査での出土状況および平泉・鎌倉のかわらけとの比較からI類と同じ時期のものと思われる。

ところで、今次調査区のすぐ南を対象とした第43次調査では平場(S X1364)や土括が検出され、かわらけが多量に出土している。かわらけには、手づくねの杯・小皿、ロクロ調整の杯・小皿・器形不明の台部がみられ、量的にはロクロ調整のものが圧倒的である。これらの年代は平泉のかわらけとの類似や13世紀後半とみられる常滑産の大甕と供伴したことから、概ね12~13世紀と考えた。これらと今回のかわらけの関係については、第43次のかわらけはロクロ調整の杯と小皿がセットをなして出土する場合がほとんどであることや、ロクロ調整のかわらけの器形が今回のかわらけ群と異なった様相を示しており、全体的にみれば今回のかわらけ群とは年代差があるものと思われる。鎌倉ではこれらに類似するかわらけが12世紀末から13世紀とされており、その頃の年代が考えられる。

B. かわらけの時期の遺構

この時期の遺構はSX1629・1623にみられるように緩斜面を削平して平場を形成して使用している点に特徴がある。SX1629の規模は南北13mほど、東西は残存地形からみて40m前後と思われ、内部の整地や水切りの溝の重複からA~D期の変遷がある。内部施設としてはC期ないしD期に伴うSB1636掘立柱建物跡や井戸跡を確認したが、部分的調査ということもあって各期の様相を明らかにするには至らなかった。

前述したように南方の第43次調査区においても12世紀末頃~13世紀の平場(S X1364)や土壙が設けられたことが知られており、これを合わせると、政庁の南の斜面裾を中心とし

た地域が 12~13 世紀にかけて利用され続けたことがうかがえる。S X 1623・1364 では建物を検出していないが、今回 S X 1629 で検出したような建物や井戸が設けられたものと推定され、これらの平場の規模からみると配置可能な建物の数は最大でも数棟程度と思われる。これらの性格については、12 世紀の平安京の土師器とまったく共通する技法・形態をもったかわらけが出土し、12 世紀段階においてこういった京都系の土器が平泉とその関連遺跡を除いて東国で出土していない⁽¹⁾⁽²⁾ 点が注目される。これまで 25 年におよぶ発掘調査ではこの時期の遺構や遺物がほとんど発見されていなかったため、『吾妻鏡』など 12 世紀以降の文献にみえる「多賀国府」と多賀城の遺跡との関係は全く不明としてきたが、今回出土した遺物の特殊な様相から見る限り「多賀国府」と関わる施設である可能性が生じてきたと言えよう。

- 注 1. 南北の発掘基準線は第Ⅲ期の正殿と南門の中心を通る線=第Ⅲ期の政庁中軸線をもって設定したものであるが、第Ⅰ期と第Ⅱ期では南門の位置が第Ⅲ期南門よりおよそ 0.2~0.3m 西にずれており、第Ⅰ・Ⅱ期の政庁中軸線とは若干異なることになる。
2. 檜崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集 L XX I V』1978. 3
3. 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡本文編』1982
4. 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡一昭和 44 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969~1970、同研究所年報 1970、同年報 1985
5. 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡一昭和 58 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983~1984
6. 第 43 次調査では 18m 幅の道路遺構として把握したものに第 28 図の盛土①③a があり、ここで以下のように修正しておくこととした。
- 盛土③についての従来の理解は、盛土②と積み方に違いがあることや、盛土②と組む SD1363 東側溝と盛土③の西肩までの距離が推定路幅の 10m をかなり越えることから、これらより新しい時期の遺構とみたものであった。しかし、今回路幅が 13m の時期があることが確認されたことから、時期差として捉える必要がなくなったと考えられる。また、盛土②と③は遺物が全く出土していない点でも共通性がある。したがって、今回の成果を重視し、盛土③を盛土②や SD1363 と一緒に理解することとした。また、盛土 a は土質の点で盛土③と一緒にみていたもので、盛土③に連動して解釈が変わること。
- 盛土①については解釈が難しいが、盛土中の瓦の様相の点で 23m 幅の道路のものとみて矛盾がなく、最終期の盛土④と一緒に考えておきたい。
7. 手づくねのかわらけは京都地方では土師器の変遷の中で位置づけられており、「かわらけ」の呼称については今後検討していく必要があると思われるが、手づくねのもの・ロクロ調整のものとも当地方における土器変遷の中での位置づけが不充分な土器群であるため、手づくねのものとロクロ調整のものの両者が出土している鎌倉や平泉の遺跡の報告で一般的に用いられている呼称に併せてお

くこととしたしい。

8. 平泉町教育委員会『柳之御所跡発掘調査報告書』1983 など
9. 横田洋三「土師器皿の分類と編年観」『平安京跡研究調査報告 第11輯 平安京左京四条三坊十三町』(財)古代学協会 1984 など。また、SK1641出土の資料の一部を京都市埋蔵文化財研究所に持参し、百瀬正恒氏に年代観などについて御教示を得た。
10. 服部実喜「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古 第19号』1984 など
11. 前出百瀬正恒氏の御教示による。

III 第52次調査

1. 調査経過

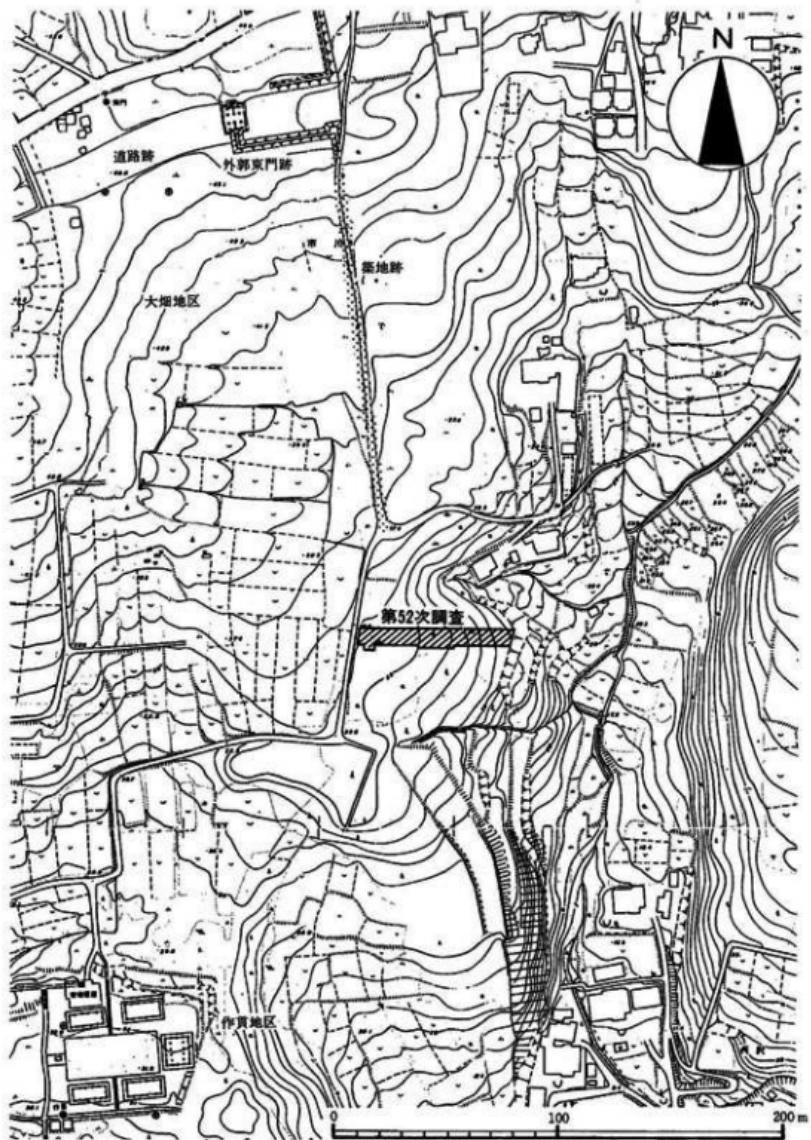
第52次調査は、多賀城市市川字伊保石2—2、3—4の計500m²を対象として実施した。調査地は、外郭東門より南へ約220mに位置し、多賀城の外郭東辺中央部付近にあたる（第1図）。周辺の地形は北西から南東にかけて降る緩斜面で、東側が南から入りこんで多賀城跡の東辺を画している大きな沢へ続く急斜面になっている（第32図）。なお調査区の南側は杉林となっており、そこでは丘陵東縁部に沿って続く土壠状の高まりが南北約50mにわたって認められる。

昨年の第51次調査の結果、多賀城の外郭東辺築地は東門地区の北方で、時期によってその位置を変えている可能性も考えられた。そこで第52次調査は、東門地区南方における外郭東辺区画施設の位置・構造および変遷の把握を目的に、昭和62年6月8日～同年10月19日まで実施した。

調査にさきだち外郭東門地区にある基準点より原点を移動し、調査区を設定した（6月4日～7日）。調査区は、外郭区画施設の存在位置の確認をまず考えて、外郭東門より南へ続く築地跡の延長線上にかかるように東西約70m、南北6mの調査区を丘陵東端部付近まで設定した。

6月8日より調査区の西側から表土剥ぎを開始し、6月16日にこれを終了した。その結果、調査区西半部で検出したSX1742整地層を境として調査区内の様相はかなり異なっていることが判明した。SX1742の東側ではそのすぐ東で東西幅5～6mの範囲に分布する堆積層（第2～4層）がみられ、またそれより東は直ちに地山であり、E360とE370付近には近世以降の削平によって形成された段がみられた。そして調査区中央部付近の地山面では多数の柱穴の存在を確認した。一方西側では、現代の水田の床土とみられる第1b層を除去すると、重複する遺構が多数検出され複雑な様相を示していることが判明した。そこで調査区をSX1742を境に東西にわけ、最初に西側から精査を進めることにした。SX1742の西側では、SD1749溝状遺構、SX1742・1748整地層やそれらの上面および地山面にかけて、SX1744整地層、SA1743柱穴群、SD1714・1715・1716・1717・1722・1723溝、SK1732・1739土壤などを検出し、遺構面が複数存在する可能性が予想された。そこでこれらの遺構の重複状況を確実に把握するために、調査区南壁に沿って試掘坑を設定して調査を進めることにした。

その結果、SD1749溝状遺構とSK1739土壤の堆積層に10世紀前半頃に降下したと推定



第32図 第52次調査区地形図

される灰白色火山灰の再堆積層がみられることから、これらの遺構は S D1749・S K1739 との重複関係より、10世紀前半頃以前の遺構である S X1742・1744・1748、S D1749、S K1739 と、それ以後の S D1715・1716・1717・1722・1723、S K1732・1738、および灰白色火山灰との関係が不明な S A1743・S D1714 に分けられることが判明した。そこで灰白色火山灰の降下堆積以後の遺構である S D1715・1716・1722・1723、S K1732 や、これらの遺構と重複して新しい S D1717・1718、S K1733・1734・1735 はすべて完掘した(6月30日)。

一方、S X1742 整地層の東側の堆積層は4層認められ、上層より第2層～第5層とした。第4層上面で S D1721 溝を、また第5層上面で S D1713 溝と S B1703 建物跡、また第5層を除去した段階で S D1709・1710 南北溝をそれぞれ検出した。このなかで S D1709・1710 両溝は重複しており、断ち割り調査の結果 S D1709 が新しく、その堆積層下部には灰白色火山灰の再堆積層が認められた。このことより S D1709・1710 は10世紀前半頃以前の遺構、そして S D1713、S B1703 および S D1713 より新しい S D1712 と S D1709 堆積層上面で検出されている S K1730 はともに10世紀前半頃以後の遺構であることが判明した。

以上のように、S X1742 整地層の東西で検出した各遺構は、灰白色火山灰の降下以前のものとそれ以後のものに分けられることが明らかになったことより、この時点で記録をとる必要性が生じたため、写真撮影を行った後に遺方を設定し(7月2日)、平面図の作成に取りかかりこれを7月10日に終了した。

翌11日より灰白色火山灰降下以前の各遺構の精査を S X1742 整地層の西側から開始した。まず S D1749 の堆積層の除去作業に取りかかったが、5層上面で S D1724 溝を検出した。この溝は堆積層が灰白色火山灰の再堆積層であり、上端幅が不規則で蛇行することより、自然の流水跡とみられた。次いで S K1739 土壌を掘り下げ、その後 S X1748 整地層を除去した。またこれと併行して S X1742 の東側では S D1709、次いで 1710 南北溝を堆積層の一部を除いて完掘した。

その結果、S X1749 と S D1709 は堆積層に灰白色火山灰がともに認められ、いずれも自然堆積によって埋没したことから、東西で対になる一連の遺構と考えられた。そして S D1709 と S D1749 の間には重複する S X1742・1748 整地層が存在し、これらは外郭東門より南へ続く築地の延長線上にあることから、この位置に築地の存在を想定した。そしてこの場合 S X1742・1748 は築地の基礎地業の整地層、S D1709・1749 は築地に伴う城内・外側の溝とみられ、S D1709 が S D1710 と重複し、S X1742・1748 整地層も重複していることより、想定された築地は少なくとも一度修復されていると考えられた(7月19日)。また S X1742・1748 整地層上面では S A1743 柱穴群を検出しており、これらは東西で対になり南北方向に続く柱列とみられることから、築地の寄柱穴あるいは築地構築時の添柱穴と推定さ

れた。

一方これと併行して、S X1742 整地層の東側で、第5層およびS D1709 堆積層上面から地山面にかけて検出している多数の柱穴について精査を開始した。その結果、地山面でS B 1704・1707・1708 建物跡を検出した(7月24日)。翌25日～27日にかけて遺方を設定し平面図の作成にとりかかり8月7日にこれを終了した。しかし多数の柱穴が存在しており、平面図の検討の結果、さらに数棟の建物跡の存在が予想されたため、調査区中央部を南へ拡張することにした。その結果第5層上面でS B 1703 建物跡、S D1709 堆積層上面でS B 1701・1706 建物跡、地山面でS B 1702・1705 建物跡、そしてこれらと重複し新しいS D1727 東西溝を検出した(8月10日)。

これらと前後して調査区西半部では、灰白色火山灰の堆積状況が良好であったS X1749部分を南へ、またS X1744 整地層の西方への広がりを追及するために調査区西端部を西へそれぞれ拡張した。その結果灰白色火山灰はかなり広範囲に広がっていることが予測され、またS X1744 整地層の広がりを把握しこれらを平面図に補足した(7月17日)。

その後調査を断続的に進め、8月31日より9月11日にかけてS X1742 整地層の断ち割り調査をおこないその断面図および拡張区の平面図を作成した。また10月5日より調査区南壁の断面図の作成と写真撮影をおこない、最後に土層の注記および各図面を点検し、10月19日に調査を終了した。

2. 層序

調査区内の基本的な層序は、調査区西半部の地山面上で検出したS X1742 整地層の東西で異なっている(第33図)。すなわちS X1742 の東側では、多くの堆積層(第1～5層)がみられ、一方西側では、多数の遺構が重複しているなど複雑な様相を呈している。したがって以下では仮に調査区をS X1742 の東西で二分し、東側から層序を説明してゆく。

1. S X1742 整地層東側の層序

S X1742 整地層の東側では5層の堆積層がみられる。このうち第2～5層は、いずれも東西幅3.5～6mほどの南北帶状に分布している堆積層である。

第1層：現在の表土で、厚さ20～30cmの褐色土である。

第2層：にぶい黄褐色粘質土ブロックや明褐色土細粒を含む褐色土。S X1742 の東側付近で東西幅約4mの南北帶状に分布する。厚さは25cm未満である。

第3層：明褐色土細粒を含む暗褐色土。S X1742 東端部付近より東へ6mほど分布している。厚さは10cm未満である。

第4層：明褐色細粒を含む褐色土で、ほぼ第3層と同様な広がりをもつ。厚さは20cm未満である。上面でSD1721溝を検出している。またSD1712・1713南北溝、SK1730土壌を覆う。

第5層：明褐色土細粒を含む暗褐色土で、直接SD1709南北溝を覆う。東西幅約3.5mの南北帶状に分布するが、北壁付近までは広がらない。厚さは15cm未満である。上面でSB1703建物跡、SD1713溝を検出している。

第6層：地山。上部は明褐色土・明褐色砂質土・黄褐色土・にぶい黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土などであるが、下部は淡黄色の岩盤（凝灰岩）である。上面でSB1702・1704・1705・1707・1708建物跡、SD1727東西溝、SK1729土壌を検出している。

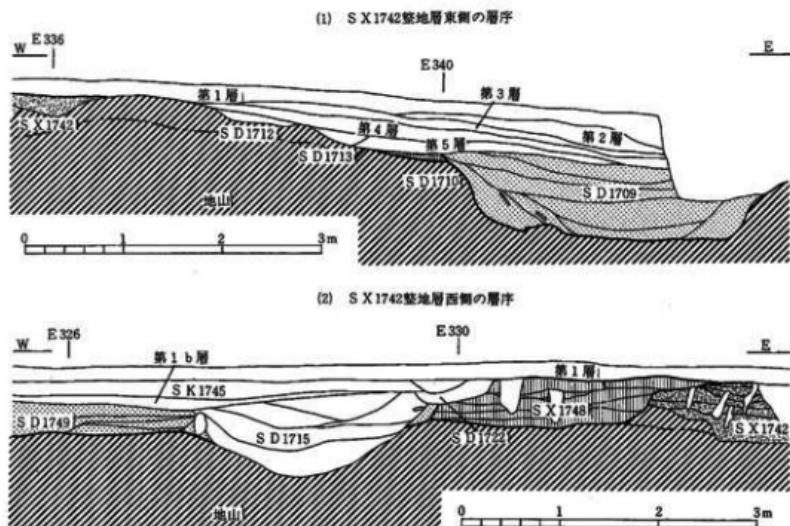
2. SX1742整地層西側の層序

第1層：現在の表土。

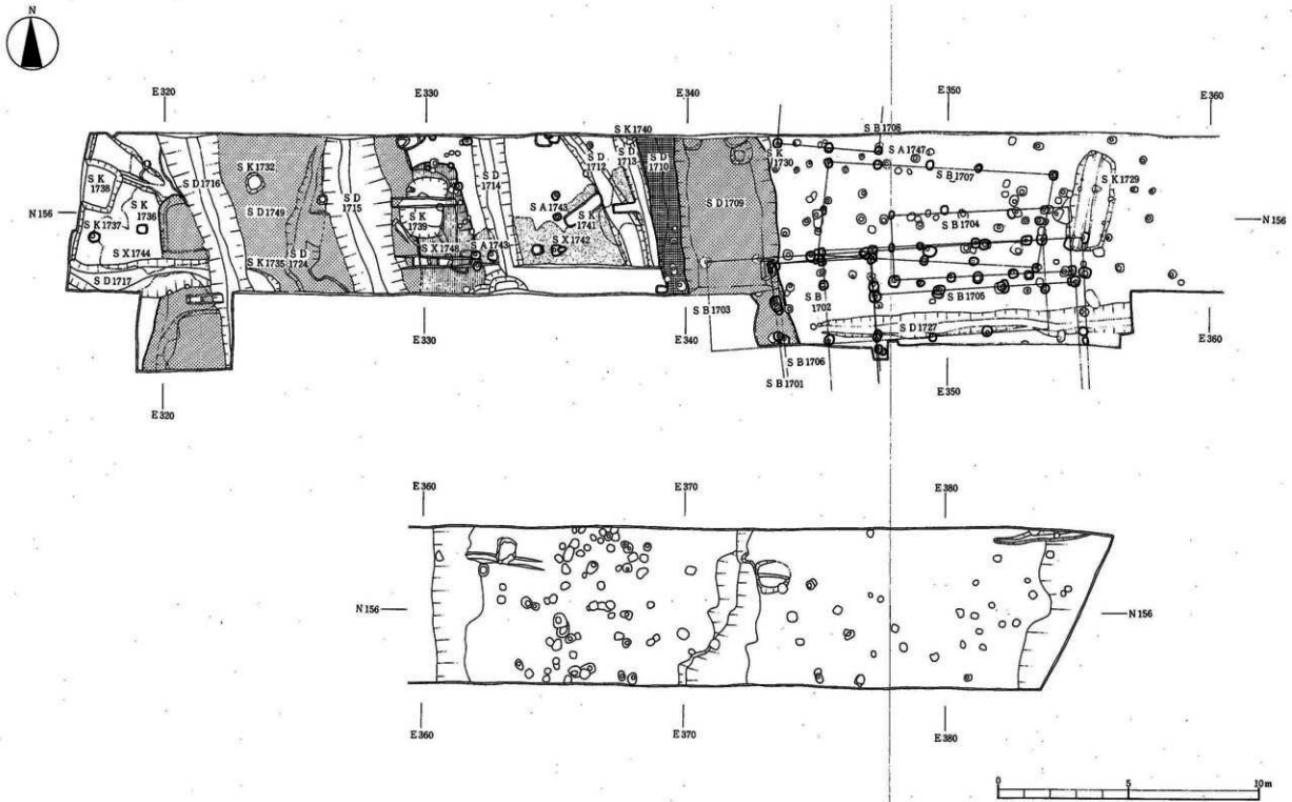
第1b層：灰黄褐色粘質土で、下部に酸化鉄が付着している。現代の水田の床土とみられる。厚さは10cm未満である。

第6層：地山。

なおSX1742の東西でそれぞれ検出したSD1709・1749、SK1739の堆積層中には灰白色火山灰の再堆積層がみられ、灰白色火山灰の降下時期は第5層の堆積より古い。



第33図 調査区内の層序



第34図 第52次調査検出構造配置図

3. 発見した遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構には、建物跡 8、整地層 3、溝 15 の他多数の柱穴および土壙などがある。そしてこれらの遺構や各堆積層より、比較的多量の瓦と少量の土器が出土している。

ところで第 52 次調査は外郭東辺中央部付近において区画施設の位置を確定し、その構造・変遷の把握を目的に実施したものである。そして現在は道路として利用されている外郭東門より南へ続く築地跡とみられる高まりは、約 200m 直線的に延びて今回の調査区の北側約 40m まで続いていることが確認できる(第 32 図)。

調査の結果、本体の積土は確認できなかったが、想定した築地位置に S X1742・1748 整地層を、その東側で S D1710・1709 南北溝、西側で S D1749 溝状遺構をそれぞれ検出した。このなかで S D1709 南北溝と S D1749 溝状遺構は、ともに自然堆積によって埋没し、堆積層中に灰白色火山灰の再堆積層が認められることより、東西で対になる同時期の遺構であることが判明した。また S X1742・1748 整地層の分布する幅約 10m の地域の東西両端部は、S D1709・S D1749 によって犬走り状の段を形成しており、その段の方向が想定した築地の方向と平行している。以上のことから、S X1742・1748 整地層、S D1709 南北溝、S D1749 溝状遺構は、いずれも築地に伴う遺構と考えられ、S X1742・1748 が築地構築時の基礎地業による整地層、S D1709 が城外側の南北溝、S D1749 が城内側の溝状遺構とみられる。

この他 S D1710 は、西側で対になる遺構を検出していないが、S D1710 と同位置で重複し、方向もほぼ一致することから、S D1709 に先行する同じ性格の南北溝と考えられる。また S A1743 は、表土直下の S X1742・1748 整地層上面および地山面で検出した柱穴群である。これらは東西に 3 m 前後離れて対になり、南北方向に続く複数の組合せからなる柱列とみられ、その方向が築地の方向とほぼ一致していることより、築地の寄柱穴あるいは築地構築時の添柱穴と考えられる。

このように S X1742・1748 整地層、S D1709・1710 南北溝、S D1749 溝状遺構、S A1743 柱穴群は、いずれも想定された築地に関連する遺構として考えることができるため、以下では、(1). 築地に関連する遺構と遺物、(2). その他の遺構と遺物、(3). 堆積層出土の遺物の順にその概要を記述してゆくことにする。

(1). 築地に関連する遺構と遺物

S X1742 整地層 (第 35・36 図)

調査区西半部の地山面で検出した築地の基礎地業とみられる整地層である。S X1748、

S D1712～1714、S A1743、S K1739と重複し、いずれよりも古い。S X1742は、東西約6.5m、南北約5mの範囲で検出しているが、さらに調査区の南へ続いている。残存状況は南側ほど良好で、厚さは南壁で約30cmある。整地層は、岩盤まで掘削した後に盛土されており、色調・土質によって次の8層に細分される。

A層：明褐色土細粒を含む褐色土

B層：にぶい黄褐色粘質土ブロック・明褐色土細粒を含む黄褐色土

C層：灰黄褐色粘質土ブロック・明褐色土細粒を含む褐色土

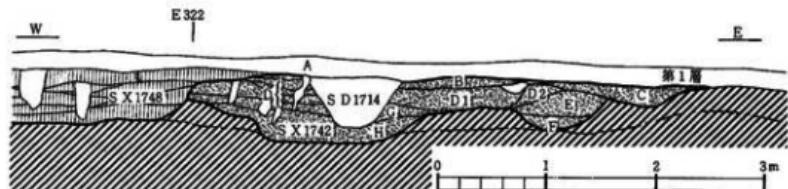
D層：灰黄褐色土ブロック・明黄褐色土細粒を含む黄褐色土で、明褐色土細粒の含まれる量で細分される(D₁・D₂)

E層：暗褐色土ブロック・明褐色土細粒を含むにぶい黄褐色土

F層：明褐色土ブロック・細粒を多量に含むにぶい黄褐色粘土

G層：にぶい黄褐色粘質土ブロック・明褐色土細粒を多量に含む黄褐色粘質土

H層：にぶい黄橙色砂質土ブロック・明褐色土細粒を含むにぶい黄褐色粘質土
一部整地層の断ち割り調査を実施したが、遺物は出土していない。



第35図 S X1742 整地層断面図

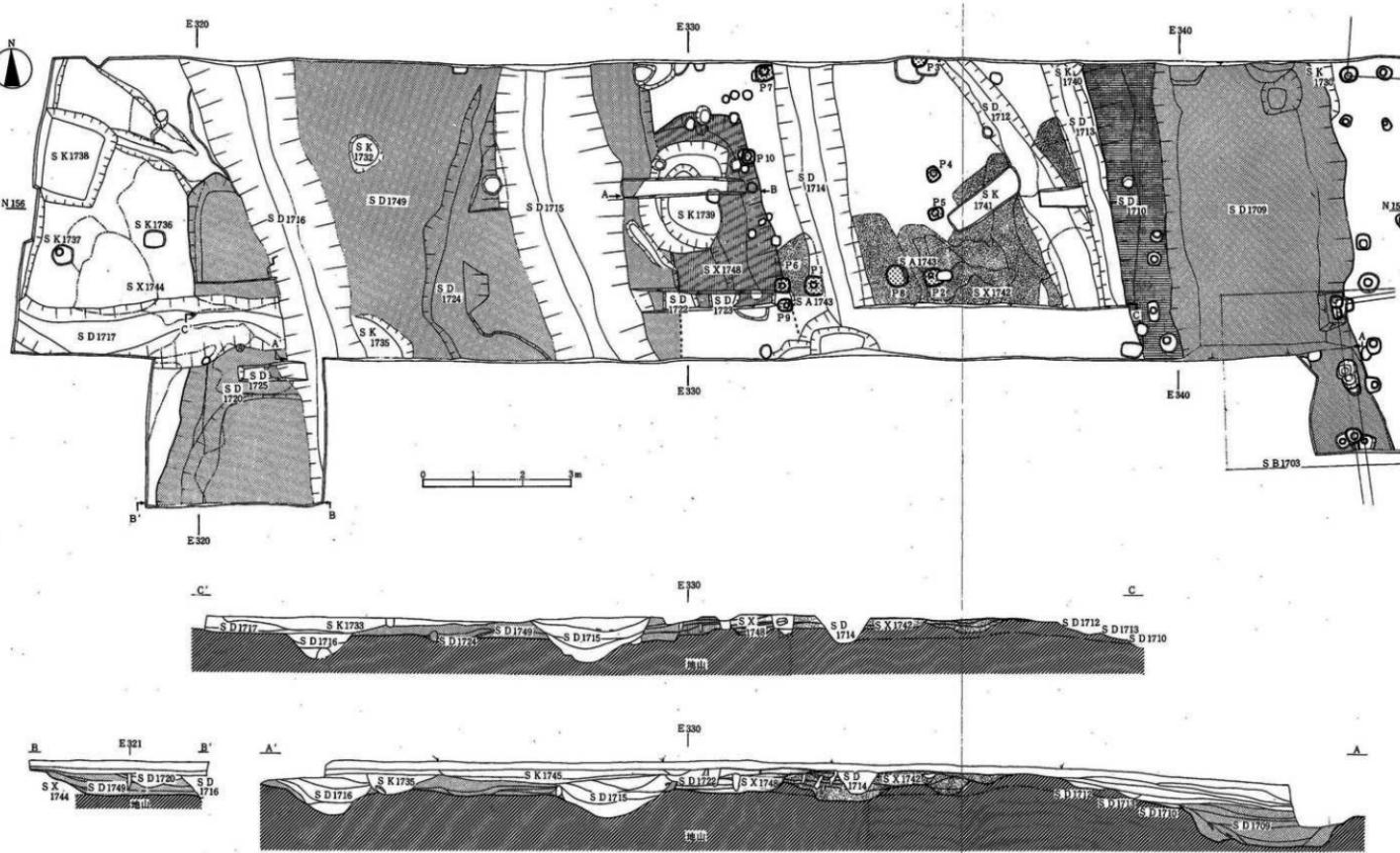
S X1748 整地層（第36・37・38図）

S X1742 整地層の西側で検出した築地の基礎地業とみられる整地層である。S X1742、S A1743、S D1749、S K1739と重複し、S X1742より新しいが、その他の遺構よりは古い。

S X1748は東西約2.5m、南北約5mの範囲で検出しており、さらに調査区の南へ続いている。整地層は地山を掘削しその後に盛土されており、残存状況が良好である南壁でみると、この掘削の規模は上端幅2.5m以上、底面幅1.7m以上で、整地層の厚さは約45cmである(第37図)。また整地層の西端部はS D1749が掘り込まれているため南北方向に続く犬走り状の段を形成している。この段の方向は、北で約8度西へ偏している。

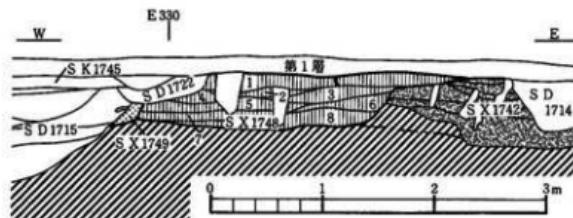
整地層は色調・土質によって8層に分けられる。

1層：明褐色土細粒、にぶい黄橙色土ブロックを多量に含む褐色土



第36図 調査区西半部検出構造

- 2層：1層と極めて類似するが、にぶい黄橙色土ブロックをより多量に含む
 3層：褐色土ブロック、明褐色土細粒をふくむ灰黄褐色土
 4層：3層と類似するが褐色土ブロック・明褐色土細粒をより多量に含む
 5層：明褐色土細粒を多量、灰黄褐色土ブロックを少量含む黄褐色土
 6層：明褐色土細粒、灰黄褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土
 7層：明褐色土ブロック・細粒、灰黄褐色土ブロックを多量に含むにぶい黄褐色土
 8層：7層に類似するが明褐色土細粒・ブロックをより多量に含む



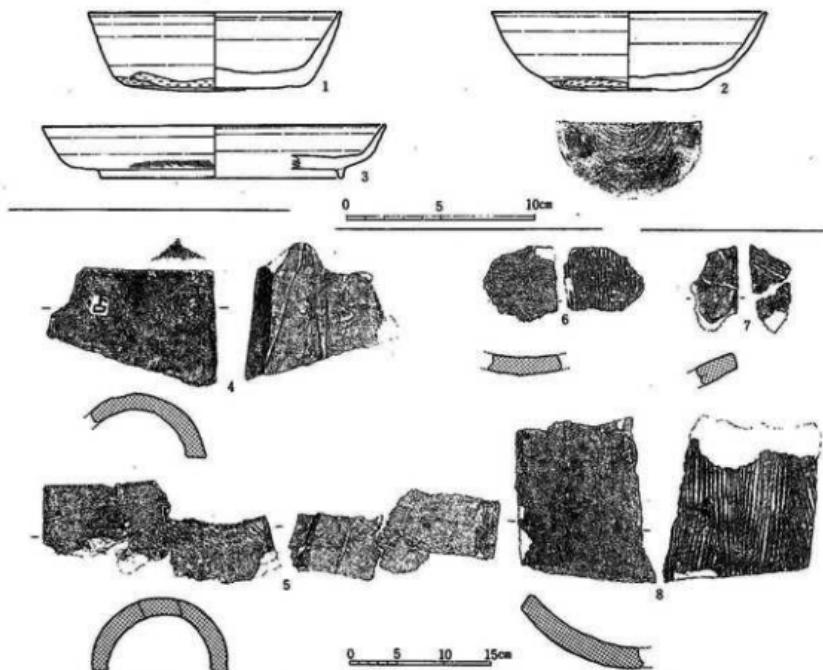
第37図 S X1748 整地層断面図

遺物は主に1～2層より瓦と土器が出土している。土器には須恵器と土師器が、瓦には丸瓦と平瓦がある。

須恵器では図示できるものとして、1層より出土した杯(第38図1・2)と高台杯(3)がある。このうち(1)は底部の切り離し技法が不明で底部周辺から底部全面手持ちヘラ削り調整された杯、(2)は底部の切り離し技法が回転糸切りで、底部周辺手持ちヘラ削り調整された杯である。この他1～2層より杯・瓶類・甕の体部資料が各1点、3～4層より高台杯の底部資料が1点出土している。

土師器にはロクロ調整でないもの(以下非ロクロ調整という)、ロクロ・非ロクロ調整不明のものがあり、いずれも小破片である。1～2層より非ロクロ調整の内面黒色処理された(以下内黒といふ)杯口縁部・底部資料が各1点、甕体部資料3点・底部資料1点、ロクロ・非ロクロ調整不明のものでは内黒の杯体部～底部資料10点、甕体部資料1点が、また3～4層より非ロクロ調整の内黒の杯体部資料1点、両面黒色処理された杯体部資料1点、甕体部資料3点が出土している。

瓦には丸瓦と平瓦がある。丸瓦は、確認できたものはすべて粘土紐巻き作り(II類)で有段のもの(II B類)で、凸面には繩叩き目(aタイプ)を残すものである。1～2層よりII類28点、II B類3点、II B類aタイプ7点、不明1点が、3～4層よりII類2点が出土している。このうち1～2層出土のII B類aタイプのなかには凸面に刻印「占」・「田」・A(4・5)を



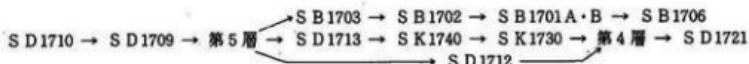
番号	層位	種類	器種	備考	番号	層位	種類	器種	備考	番号	
1	1層	須恵器	环	手打ちラフ削り調節	7288	5	1~2層	瓦	丸瓦	刻印「四」A	7291
2	1層	須恵器	环	同上表面に手持 ちへう削り調節	7288	6	1~2層	瓦	平瓦	II B類 凸面に横 長の凹孔	7291
3	1層	須恵器	高台环	焼行引土裏銀模 型出土上部合	7288	7	1~2層	瓦	平瓦	I C類aタイプ	7346
4	1~2 層	瓦	丸瓦	刻印「古」	7291	8	1~2層	瓦	平瓦	II B類 凸面に方形彫出	7291

第38図 S X 1748 整地層出土の遺物

もつものが各1点ある。平瓦は1~2層よりI A類・I C類aタイプ(7)が各1点、II B類(6・8)48点、II C類5点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの2点、3~4層よりII B類1点が出土している。

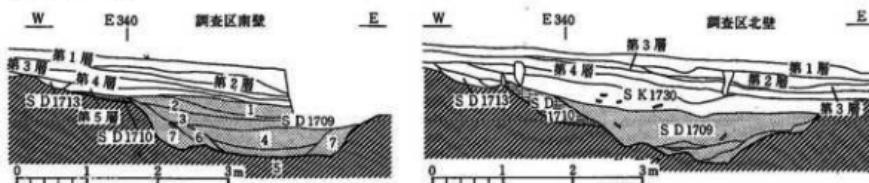
S D 1709・1710 南北溝（第36・39~41図）

築地の基礎地業とみられるS X 1742 整地層東側の地山面で検出した重複する南北溝である。これらは、S X 1742・1748 整地層、S D 1749 溝状遺構との位置関係などから、いずれも築地に伴う城外(東)側の南北溝と考えられる。両南北溝およびその他の遺構などの重複関係は次のようになる。



S D 1710

S D 1710は長さ約6m検出しており、さらに調査区の南北へ続いている。東半部をS D 1709に、西端部南半をS D 1713に壊されているため全体の規模は把握できない。南壁付近では深さ数cmであるのに対して、残存状況は北側ほど良好であり、北壁で上端幅1.5m以上、底面幅0.6m以上、深さ0.6mで、断面形は緩やかなU字形をなすとみられる（第39図）。底面は平坦で北へ傾斜している。溝の方向は底面西端部でみると、北で約5度西へ偏している。



第39図 S D 1710・1709 南北溝断面図

堆積層は1層だけ確認されており、岩盤小粒・明褐色土細粒を多量に含むにぶい黄褐色土で、自然堆積とみられる。

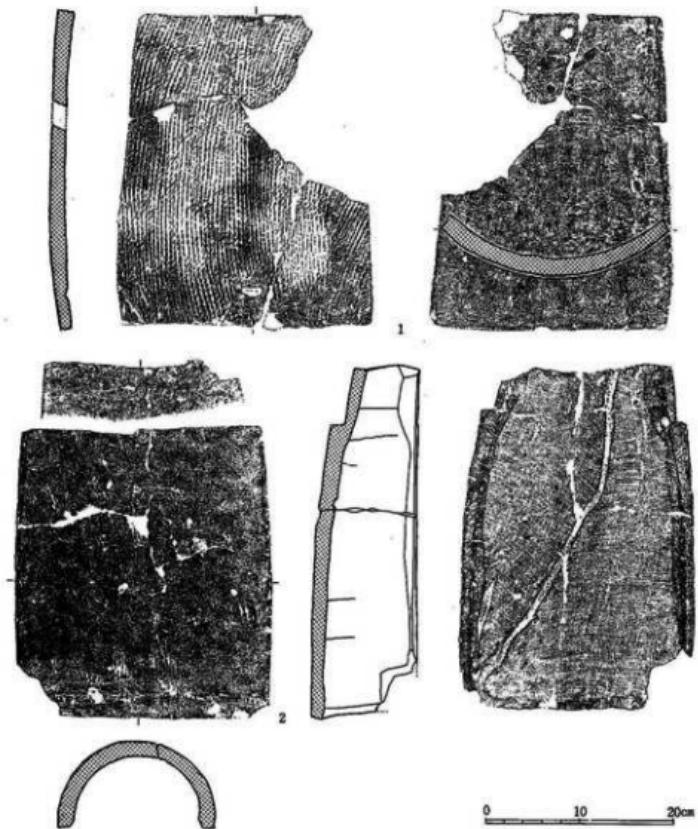
遺物は丸瓦・平瓦が少量出土している。丸瓦はほぼ完形のII B類aタイプ(第40図2)1点の他II類8点、II B類1点、II B類aタイプ9点が出土している。平瓦はII B類(1)30点、II C類1点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの1点が出土している。

S D 1709

S D 1709は長さ約8m検出しており、さらに調査区の南北へ続いている。上端幅約3.5m、底面幅2.2~2.5m、深さ約0.9mで断面形はほぼ逆台形をなす(第39図)。底面は比較的平坦であるが、地山岩盤中の大礫を掘り残したり、あるいは抜き取ったりしている部分もある。また底面は調査区中央部付近が最も高く、南北両壁部分が低くなっている。溝の方向は北で約7度西へ偏している。

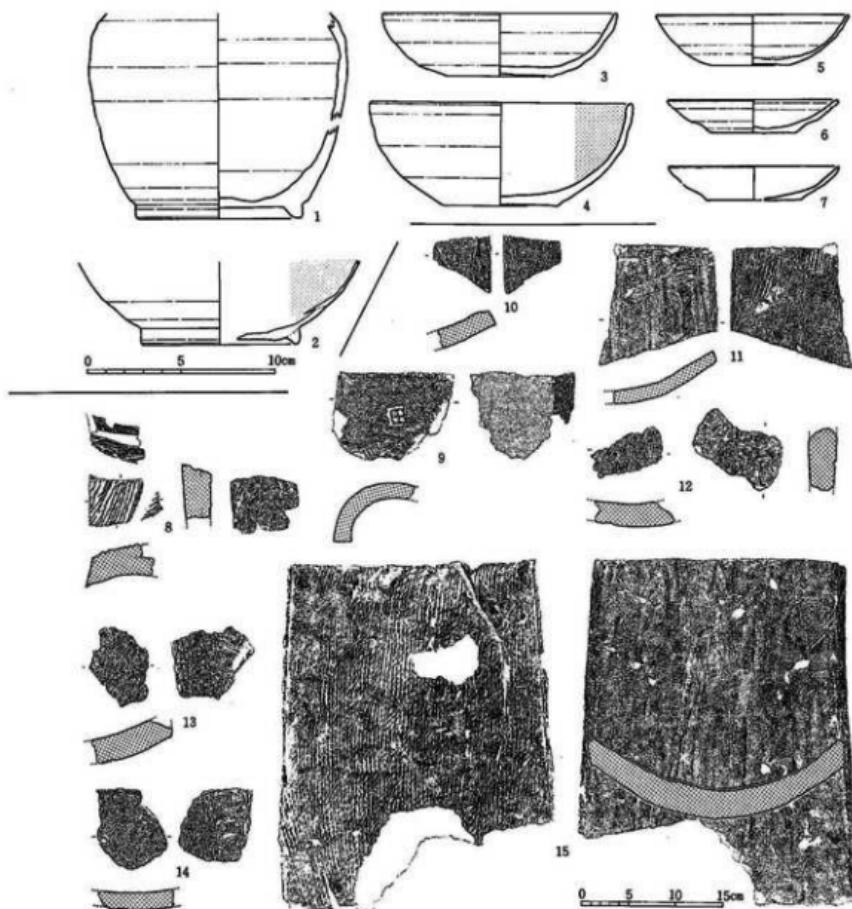
堆積層は色調・土質より次の7層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。

- 1層：明褐色土細粒を多量に含む黄褐色土
- 2層：1層に類似するが明褐色土細粒をより多量に含む
- 3層：明褐色土細粒を多量・灰白色火山灰ブロックを少量含むにぶい黄褐色土
- 4層：黄褐色土ブロック・明褐色土細粒を含む灰白色火山灰層
- 5層：明褐色土細粒を少量含む暗灰黄褐色土粘質土
- 6層：明褐色土細粒・褐色土ブロックを多量に含む暗灰黄褐色粘質土
- 7層：明褐色土細粒・岩盤ブロックを多量に含む褐色土



第40図 SD 1710南北溝出土の遺物

遺物は各堆積層から少量の土器と多量の瓦が出土している(第41図)。土器には須恵器・土師器・須恵系土器・灰釉陶器があり、瓦には軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。土器はほとんどが破片資料(第2表)であり、器壁の保存状況の悪いものが多い。なかでも土師器の出土量が最も多く、次いで須恵系土器、須恵器の順になり、灰釉陶器は1点出土しているだけである。また土師器と須恵器は各堆積層から出土しているが、須恵系土器は5~7層からは出土せず4層から出現し、特に4層に集中している。



番号	層位	種類	器種	備考	番号	層位	種類	器種	備考	番号	
1	4層	須恵器	長頸瓶		7289	9	4層	瓦	丸瓦	側面「出」A	7291
2	4層	土師器	高台环	ロクロ調整、内側	7289	10	4層	瓦	平瓦	I Ⅱ類	7290
3	1~3層	須恵系土器	坪		7289	11	4層	瓦	平瓦	I Ⅱ類のタイプ	7346
4	4層	土師器	环	ロクロ調整、内側	7289	12	5~7層	瓦	平瓦	丁鉢作りで凹凸両面チ ゲ調整	7346
5	4層	須恵系土器	坪		7289	13	4層	瓦	平瓦	丁鉢作りで凹凸両面チ ゲ調整	7346
6	4層	須恵系土器	小型坪		7289	14	4層	瓦	平瓦	II Ⅱ類	7291
7	4層	須恵系土器	小型坪		7289	15	4層	瓦	平瓦	II Ⅱ類bタイプ	7293
8	4層	瓦	軒平瓦		7291						

第41図 SD 1709 南北溝出土の遺物

須恵器は1～3層より甕、4層より杯・長頸瓶の底部～体部資料(1)・甕、5～7層より甕が出土している。

土師器にはロクロ調整のものと非ロクロ調整の両者がみられる。ロクロ調整のものは4層より内黒の杯(4)・高台杯(2)が出土しており、このうち杯は糸切り無調整のものである。非ロクロ調整のものは1～4層より内黒の杯、甕が出土している。

須恵系土器は1～3層より杯(3)、4層より杯(5)・高台杯・小型杯(6・7)が出土している。

灰釉陶器は、4層より平瓶の体部資料(図版3)が1点出土している。

瓦では軒平瓦が1点出土している以外はすべて平瓦と丸瓦である。平瓦・丸瓦は各堆積層より出土しており、特に4層からの出土量が多い。

軒平瓦は640単弧文軒平瓦の瓦当部小破片(8)で、4層より出土している。

丸瓦は1～3層よりII類3点、II B類1点、4層よりII類89点、II B類5点、II B類aタイプ19点、不明3点、5～7層よりII類22点、II B類1点、II B類aタイプ5点、不明3点がそれぞれ出土している。このうち4層出土のII B類aタイプのなかには、凸面に刻印「田」-A(9)をもつものが1点ある。

平瓦は1～3層よりII B類7点、II B類bタイプ(凸面に凹型台側端部圧痕が残るもの)2点、II C類1点、不明1点、4層よりIA類aタイプ(11)1点、IA類2点、IB類(10)1点、II B類152点、II B類bタイプ(15)6点、II C類33点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの(13)1点、不明21点、5～7層よりIA類1点、II B類29点、II B類bタイプ3点、II C類6点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの(12)1点、不明2点がそれぞれ出土している。このなかで4層出土のII B類のなかには、凸面に方形突出(14)のみられるものが1点ある。

	須 恵 器	土 瓶 資			須恵系土器	そ の 他	不 明
		ロクロ調整	非ロクロ調整	不 明			
1～3層	甕 体 外平行印目 1		坪(内黒) 体 外ミガキ 2 甕 体 外ケズリ 1 甕 底 1	坪(内黒) 底 1 高台坪(内黒) 底 1			3
4 層	坪 底 糸切り無調整 1 坪 底 手持ちヘラ ケズリ 1 坪 体 3 甕 体 外平行印目 4 甕 体 外ロクロナデ 1	高台坪 0.5坪 底 1	坪(内黒) 口 外ナデ 1 甕 体 外ケズリ 1 甕 体 外-ケズリ 1	坪(内黒) 底 6 坪(内黒) 底 1 高台坪(内黒) 底 1 甕 体 2	小型坪 口 5 小型坪 体 5 小型坪 底 6 小型高台坪 底 2	灰釉陶器 平瓶 体 1	
5 層	甕 体-底 外ケズリ 1 甕 体 外平行印目 2			坪(内黒) 底 1			

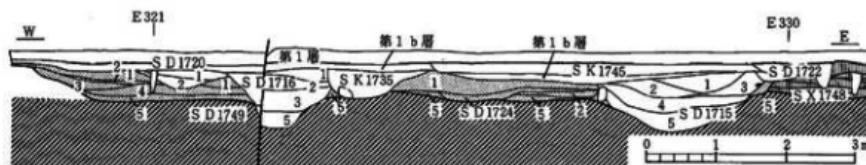
第2表 SD1709 出土土器破片集計表

(口=口縁部 体=体部 底=底部 外=外面)

S D 1749 溝状遺構（第 36・42 図）

東側を S X 1748 整地層上面で、西側を S X 1744 整地層上面で検出した南北方向に続く溝状遺構である。長さ(南北)約 8 m 検出しているが、さらに調査区の南北へ続いている。S X 1744・1748、S D 1715・1716・1720・1724、S K 1732・1735・1739 と重複し、S X 1744・1748 より新しいが、その他の遺構よりは古い。南壁でみると、上端幅約 10 m、底面幅 9~9.5 m ほど、深さ約 0.5 m の大規模なものであるが(第 42 図)、北側は残存状況が悪く、深さ数 cm ある。底面は東半部が比較的平坦であるが、西半部では凹凸が認められる。堆積層は色調・土質より 5 層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。

- 1 層：地山細粒・灰白色火山灰小粒を多量に含む灰黄褐色粘質土
- 2 層：地山細粒を少量含む灰白色火山灰層
- 3 層：明褐色土細粒を含む灰黄褐色粘質土
- 4 層：明褐色土細粒・木炭粒を含む灰黄褐色粘土
- 5 層：地山細粒を少量含む暗灰黄色粘土



第 42 図 S D 1749 溝状遺構、S D 1715・1716・1724 溝断面図

遺物は各堆積層より土器・瓦・馬齒が出土している。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、須恵器と土師器は各堆積層より出土しているが、須恵系土器は 4 層から出現

	須 恵 器		土 師 器			須 恵 系 土 器	不 明
		不 明	ロクロ調整	非ロクロ調整	不 明		
1 ~ 3 層	环 口 1 环 体 5 环 底 素切無 1 高环 脚部 1 粗胎 体 1 甕 口 1 甕 体 平行印目 8 甕 体 ロクヨ 3 甕 底 1	3	环(内墨) 1 环(内墨) 返 同軸ケズリ 1 环(内墨) 道 素切無 1 甕口 3 甕体 4	甕 体 12	环(内墨) 口 1 环(内墨) 体 6 环(内墨) 底 3	小型环 口 4 小型环 体 10 小型环 底 14 高台环 底 1	8
4 层					环(内墨) 体 1	小型环 口 1 小型环 底 1 高台环 底 1	2
5 层	环 口 1 环 底 手持ちヘラ 1 粗胎 体 1 甕 体 平行印目 2			甕 体 1	环(内墨) 底 1		

第 3 表 S X 1748 出土土器破片集計表

する。土器の出土状況については第3表に示してある。

須恵器は1～3層より杯・高杯・瓶類・甕が、5層より杯・瓶類・甕が出土している。このうち1～3層出土の杯では、底部の切り離し技法が糸切り無調整のものが、また5層出土のものでは、底部の切り離し技法が不明で手持ちヘラ削り調整のものが各1点ある。

土師器にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものの両者があり、ロクロ調整のものでは1～3層より内黒の杯、甕が出土しており、このうち杯では糸切り無調整のものと回転ヘラ削り調整のものが各1点みられる。非ロクロ調整のものでは1～3層と5層より甕が出土している。

須恵系土器は1～4層より小型杯・高台杯が出土している。

瓦には丸瓦と平瓦があり、各堆積層より出土している。丸瓦は1～3層よりⅡ類45点、ⅡB類13点、ⅡB類aタイプ5点、不明2点、4～5層よりⅡ類5点、ⅡB類aタイプ2点が出土している。平瓦は1～3層よりⅠA類2点、ⅡB類77点、ⅡB類aタイプ1点、ⅡC類6点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの1点、不明11点、5層よりⅠA類1点、ⅡB類6点、ⅡC類2点、不明2点が出土している。

S A1743 柱穴群（第36図）

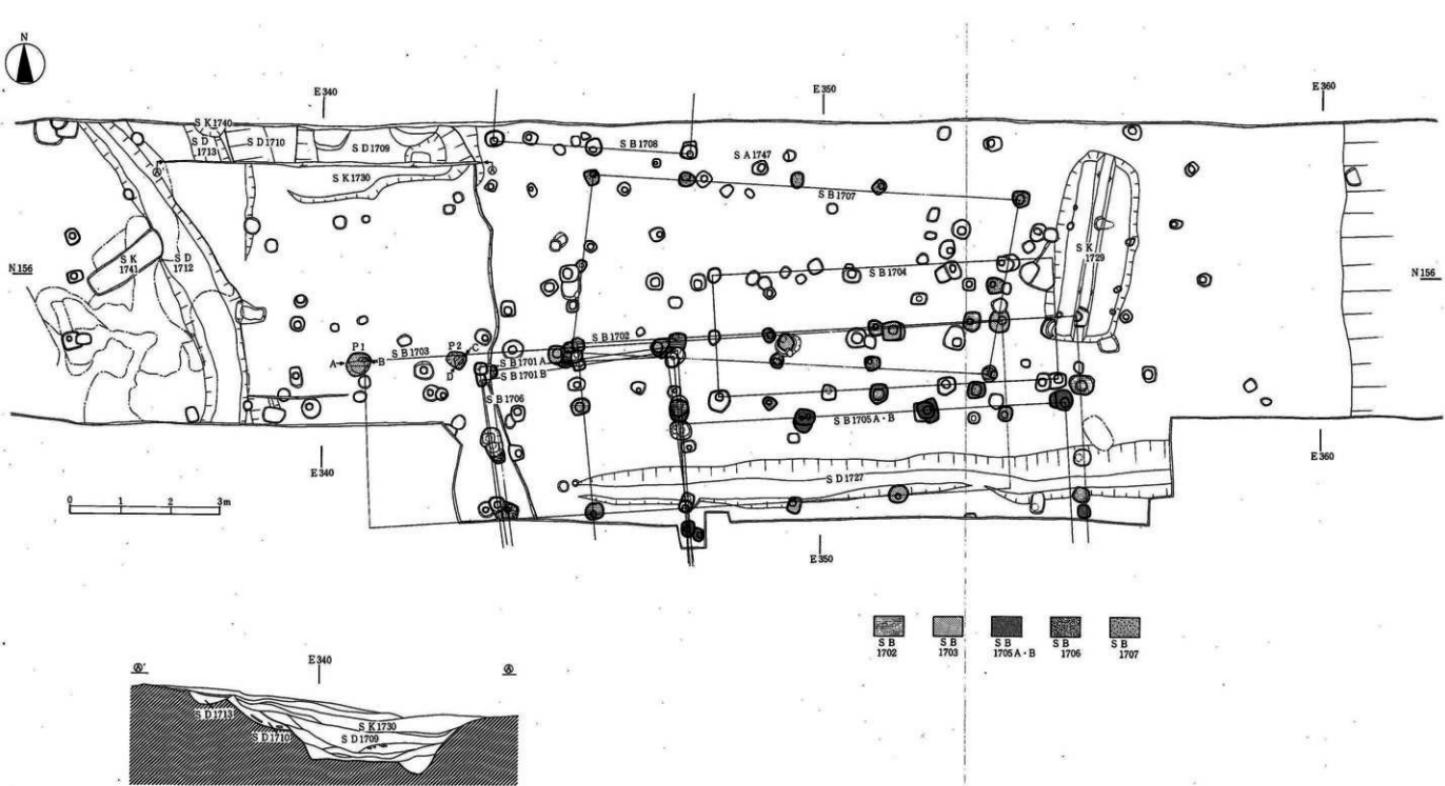
S A1743は、築地の寄柱穴あるいは添柱穴と考えられる柱列群を一括した10個の柱穴群である。P_{1·2·8}がS X1742整地層上面で、P_{6·9·10}が1748整地層上面で、またP_{3·4·5·7}が地山面でそれぞれ検出されている。このうちP_{1·7}がSD1714と重複しており、SD1714より古い。

これらは、本来的には東西で3m前後離れて対になる2条の柱列が重複しているとみられるが、柱列の組合せは明確にできなかった。

柱穴はいずれも小規模なもので、一辺0.3～0.4mほどの方形（P_{1·2·5·10}）のものと、径0.3mほどの円形（P_{3·4}）のものがある。埋土は上面での観察であるが、明褐色土ブロック・細粒を含む暗褐色土や灰黄褐色土である。断ち割り調査を実施していないため埋土の状況や深さについては不明であるが、P_{2·3·8}では15cmほど平面的に掘り下げると底面となることからみれば、概して残存状況は良くないとみられる。柱痕跡はP_{1·2·4·7·9·10}で確認しており、径10～15cmの円形である。これら柱穴群より遺物は出土していない。

（2）その他の遺構

築地に関連する遺構の他には、建物跡8（S B1701～S B1708）、整地層1（S X1744）、溝11（S D1712・1713・1715～1720・1724・1727・1728）、土壤7（S K1730・1732・1734・1735・1738・1739・1740）などがあり、このなかでは建物跡が注目される。以下建物跡から順に主な遺構とその遺物について概要を説明する。



第43図 調査区中央部～東半部検出遺構

① 建 物 跡

S B 1701 建物跡（第 43 図）

調査区中央部付近の S D1709 堆積土上面で検出した南北 3 間以上、東西 2 間の南北棟掘立柱建物跡であり、一度建て替えられている(S B1701A → S B1701B)。S B1702・1703・1705・1706・1707、S D1709・1727 と重複し、S D1727 より古いがその他のいずれよりも新しい。

S B 1701 A

S B1701A は柱穴を 7 カ所で検出しているが、いずれも S B1701B の柱穴に大きく壊されている。このため全体形を把握できる柱穴はないが、その平面形・規模・深さは S B1701B の柱穴の特徴とほぼ同様であったとみられる。埋土は上面の観察によれば明褐色土細粒を含む暗褐色土である。柱痕跡は 6 カ所で検出しており、径 10~15 cm の円形をなす。

柱間は、桁行が東側柱列で北より 1.53・1.43・? m、梁行が北妻で 1.97 m 等間で総長 3.94 m となる。建物の方向は東側柱列でみると北で約 4 度西へ偏している。

遺物は出土していない。

S B 1701 B

1701B では柱穴を 7 個検出している。柱穴は径約 0.3 m の円形、一辺 0.2~0.4 m ほどの方形をなし、深さは約 0.3 m で底面となり残存状況は良くない。埋土は上面の観察によれば明褐色土ブロック・細粒を多量に含む暗褐色土である。柱痕跡はすべての柱穴で検出しており、径 10~15 cm の円形をなす。

柱間は、桁行が東側柱列で北より 1.50・1.55 m、梁行が北妻で西より 1.98・1.92 m、総長 3.89 m となる。建物の方向は東側柱列でみると、北で約 4 度西へ偏している。

遺物は出土していない。

S B 1702 建物跡（第 43 図）

調査区中央部付近の地山面で検出した東西 5 間、南北 3 間以上の東西棟北廂付き掘立柱建物跡である。S B1701A・B、S B1703・1706・1707、S K1729、S D1727 と重複し、

S B1701A・B、S D1727 より古いが、その他の遺構よりは新しい。また S B1704・S B1705A・B とも重複するが、直接の切り合い関係はない。

柱穴は 14 カ所で検出しており、0.2~0.5 m ほどの円形・楕円形・方形である。断ち割り調査を実施していないため深さ・埋土の状況は不明である。埋土は上面の観察によれば明褐色土ブロック・細粒を多量に含む黒褐色土および褐灰色土である。柱痕跡は 12 カ所で検出しており径 10~20 cm の円形をなす。

柱間は、身舎の桁行が北入側柱列で西より 2.00・1.78・2.23・1.96・2.13 m で総長 10.10

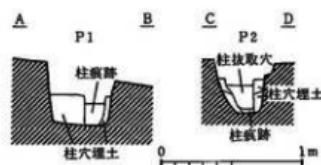
m、廻の桁行が北側柱列で西より 1.95・1.88・2.14・1.90・2.14m で総長 10.01m となる。梁行は西妻で北より 1.27(廻部分)・2.16m・? となる。建物の方向は北入側柱列でみると東で約 3 度北へ偏している。

遺物は出土していない。

S B1703 建物跡 (第 43・44 図)

調査区中央部付近の第 5 層上面で検出した東西 6 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。S B1701A・B、S B1702・1706・1707、S D1709・1727 と重複し S B1706・1707、S D1709 より新しいが、その他の遺構より古い。また S B1705A・B・1704 と重複するが、直接の切り合い関係はない。

柱穴は 10 個検出しており 0.3~0.4m ほどの方形・楕円形・円形である。埋土はにぶい黄褐色粘質土ブロックを多量に含む褐灰色土と黄褐色土ブロックを多量に含む褐灰色土の互層であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは 0.3~0.4m である。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており径 15cm ほどの円形である(第 44 図)。



第 44 図 S B1703 柱穴断面図

柱間は、桁行が北側柱列で西より 1.91・1.96・2.03・2.51・2.20・2.23m で総長 12.84m、梁行が東妻で北より 1.88m・? で、総長は東妻より西へ 1 間目で 3.34m となる。建物の方向は北側柱列でみると東で約 4 度北へ偏している。

遺物は柱穴埋土より須恵器杯体部資料 1 点と不明破片 1 点、須恵系土器小型杯の体部破片資料と高台杯底部資料が各 1 点、丸瓦 II 類 7 点、平瓦 II B 類 6 点が出土している。また柱痕跡埋土より須恵器甕口縁部資料 1 点、丸瓦 II 類 1 点、平瓦不明 1 点が出土している。

S B1704 建物跡 (第 43 図)

調査区中央部付近の地山面で検出した東西 3 間、南北 2 間の東西棟掘立柱建物跡である。SK1729 と重複しこれより新しい。また S B1702・1703・1707 とも重複するが、直接の切り合い関係はない。さらに S B1701・1705・1706 とは位置関係よりみて同時に存在し得ないとみられる。

柱穴は、北東隅の柱穴が搅乱で壊されている以外すべて検出しており、0.3~0.4m ほどの方形・楕円形をなす。断ち割り調査を実施していないため埋土の状況や深さは不明であるが、埋土上面の観察によれば明褐色土ブロック・細粒、暗褐色土ブロックを含む褐色土である。柱痕跡は南側柱列で検出しており、径 20~25cm ほどの円形である。

柱間は柱痕跡を検出していない柱穴では中央に柱位置を想定すると、桁行が南側柱列で

西より 2.18・2.36・2.29m で総長 6.84m、梁行が西妻で北より約 1.2・1.18m で総長 2.4m となる。建物の方向は南側柱列でみると、東で約 3 度北へ偏している。

遺物は出土していない。

S B 1705 建物跡（第 43 図）

調査区中央部付近の地山面で検出した東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟とみられる掘立柱建物跡で、同位置で 1 度建て替えられている（S B 1705 A → S B 1705 B）。S B 1701 A・B、S D 1727 と重複しいずれよりも古い。また S B 1702・1703・1706 とも重複するが、直接の切り合い関係はない。さらに S B 1704・1707 とは位置関係より同時には存在し得ない。古い方の S B 1705 A の柱穴は、ほとんど新しい S B 1705 B の柱穴によって壊されているため、S B 1705 A については不明な部分が多い。

新しい方の S B 1705 B は、柱穴を北側柱列で 3 個、東西両妻で各 1 個の計 5 個を検出している。柱穴は 0.3~0.4m の方形・円形である。断ち割り調査を実施していないため埋土の状況や深さは不明であるが、埋土上面の観察によれば明褐色土ブロック・細粒を多量に含む暗褐色土である。柱痕跡は 4 カ所で確認しており、いずれも径約 20 cm の円形をなす。

柱間は、柱痕跡を検出していない柱穴では中央に柱位置を想定すると、桁行が北側柱列で西より ?・2.50・2.79m、梁行が東妻で北より約 2.2m・? である。建物の方向は北側柱列でみると、東で約 3 度北へ偏している。

古い方の S B 1705 A は柱穴がほとんど新しい S B 1705 B の柱穴によって壊されているため、柱穴・埋土の特徴や柱間寸法などは不明であるが、建物の規模は S B 1705 B とほぼ同様であったと考えられる。

S B 1705 A・B から遺物は出土していない。

S B 1706 建物跡（第 43 図）

調査区中央部付近の S D 1709 堆積土上面で検出した南北 3 間以上、東西 2 間の南北棟掘立柱建物跡である。S B 1701 A・B、S B 1702・1703・1707、S D 1709・1727 と重複し S B 1707・S D 1709 より新しいが、その他の遺構より古い。また S B 1705 A・B とも重複するが、直接の切り合い関係はなく、さらに S B 1704 とは位置関係から同時には存在し得ない。

柱穴は 5 個検出しているが、重複する他の柱穴によってほとんどが壊されているため、全体の形・規模は捉え難い。断ち割り調査を実施していないため柱穴の深さや埋土の状況は不明である。埋土は上面の観察によれば明褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土である。柱痕跡は 2 カ所で確認しており径約 12 cm ある。

柱間は、柱穴の柱位置を決められ得ないものも多く不明確であるが、桁行方向はおよそ 1.3~1.4m、梁行総長が約 3.5m とみられる。建物の方向も正確には決定し得ないが、西

側柱列でみると北で約10度西へ偏している。

遺物は柱穴埋土より平瓦小破片（不明）が1点出土している。

S B 1707 建物跡（第43図）

調査区中央部付近の地山面で検出した東西4間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡であり、全体形を検出している。S B 1701・1702・1703・1706と重複しいずれよりも古い。またS B 1704とも重複するが直接の切り合い関係はなく、S B 1705・1708とは位置関係より同時には存在し得ない。

柱穴は南側柱列で1個未検出であるがそれ以外はすべて検出しており、0.2～0.4mほどの円形・方形である。断ち割り調査を実施していないため埋土の状況・深さは不明であるが、埋土上面の観察によれば明黄褐色土ブロック・細粒を含む暗褐色土である。柱痕跡は8カ所で確認しており径10～15cmほどの円形である。

柱間は、柱痕跡を検出していない柱穴では中央に柱位置を想定すると、桁行が北側柱列で西より1.84・約2.1・約1.9・2.85mで総長8.65m、南側柱列で西より約4.1（2間分）・1.86・2.45mで総長約8.4mとなり、平面形が多少歪んでいる。梁行は東妻で北より1.84・1.73mで総長3.55mである。建物の方向は北側柱列でみると、東で約3度南へ偏している。

遺物は出土していない。

S B 1708 建物跡（第43図）

調査区中央部の地山面で検出した3個の東西に並ぶ柱列を南妻として想定した南北棟掘立柱建物跡である。他の遺構とは直接重複しないが、S B 1707とは位置関係より同時に存在し得ない。

柱穴は0.3～0.4mの円形をなす。断ち割り調査を実施していないため埋土の状況や深さは不明であるが、埋土上面の観察によれば明黄褐色土ブロック・細粒を含む暗褐色土である。柱痕跡は3カ所で確認しており、径約15cmの円形である。

柱間は西より1.99・1.92mで総長3.91mである。建物の方向は東で約4度南へ偏している。

遺物は出土していない。

② 整 地 層

S X 1744 整地層（第36図）

調査区西端部の地山面で検出した整地層である。S D 1749・1717、S K 1736・1737と重複し、いずれよりも古い。東西約4.5m、南北約8mの範囲に分布しており、さらに調査区

の南へ広がっている。

整地層は地山を掘り込んだ後に盛土されており、南側ほど残存状況は良好で、南壁でみると厚さ約45cmである。色調・土質で7層に細分されるが、いずれも地山である明黄褐色粘質土・黄灰色粘質土を多量に含む黄褐色土で、上面は水分による酸化鉄が付着して赤味を帯びている。

遺物は出土していない。

③ 溝

S D1724 溝（第36・45図）

S D1724 溝状遺構の堆積層5層上面で検出した溝である。上端幅0.7~1.5m、底面幅0.2~0.7m、深さ5~25cmで、断面形は浅い皿状をなす。堆積土は明褐色土細粒・岩盤小粒を含む灰白色火山灰の再堆積層の1層である。

遺物は土器と瓦が少量出土している。

土器には須恵器と土師器がある。須恵器では杯・長頸瓶・甕が出土しており、杯にはヘラ切り無調整のもの（第45図1）1点の他、口縁部資料・底部資料が各1点、長頸瓶では口縁部資料1点、甕では体部資料9点がある。このうち杯の底部資料は手持ちヘラ削り調整のものである。

土師器にはロクロ調整のもの、非ロクロ調整のもの、ロクロ・非ロクロ調整不明のものがある。ロクロ調整のものには内黒の杯の体部資料と甕の体部資料が各2点、非ロクロ調整のものには甕の口縁・体部資料が4点と底部資料が2点、ロクロ・非ロクロ調整不明のものには杯の底部資料が1点ある。

瓦は丸瓦と平瓦が出土している。丸瓦にはII類16点、II B類4点、II B類aタイプ2点があり、このうちII B類aタイプのなかには凸面に刻印「田」-Aをもつものが1点（2）ある。平瓦にはIA類2点、IC類（3）1点、II B類15点、II C類1点、不明5点がある。



番号	層位	種類	器種	備考	番号	番号	層位	種類	器種	備考	番号
1	堆積層	須恵器	杯	ヘラ切り無調整	7288	3	堆積層	瓦	平瓦	IC類	7291
2	堆積層	瓦	II B	刻印「田」-A	7291						

第45図 S D1724 溝出土の遺物

なおこの S D1724 は、溝の上端幅・底面幅・深さがともに一定せず、また方向も蛇行することから自然の流水跡と考えられる。

S D1712 溝（第 36 図）

S X1742 整地層上面で検出した南北溝である。さらに調査区の南北へ続いている。S D1713、S K1741 と重複し、S D1713 より新しく S K1741 より古い。上端幅 0.5~0.7m、底面幅 0.2~0.7m、深さ約 10 cm で、断面形は浅い皿状をなす。底面は平坦で南へ傾斜している。堆積層は明褐色土細粒を含む褐色土 1 層で自然堆積とみられる。溝の方向は北で約 30 度西へ偏している。

遺物は丸瓦 II 類 5 点が出土している。

S D1713 溝（第 36・47 図）

調査区中央部付近の第 5 層上面で検出した南北溝であり、さらに調査区の南北へ続いている。S D1710・1712、S K1730・1740 と重複し、S D1710 より新しいがその他の遺構より古い。上端幅 0.7~0.5m、底面幅 0.2~0.3m、深さ約 20 cm で断面形は浅い皿状をなす。底面は平坦で南へ傾斜している。堆積層は 2 層認められ、1 層は地山岩盤小粒を含むにぶい黄褐色土、2 層は地盤岩盤小粒を多量に含むにぶい黄褐色土である。溝の方向は北で約 13 度西へ偏している。

遺物は丸瓦 II 類 1 点、平瓦 II B 類 6 点、不明 1 点が出土している。このうち平瓦 II B 類の 1 点は、凸面に方形突出（第 47 図 9）がみられるものである。

S D1715 南北溝（第 36・47 図）

調査区西半部の S D1749 溝状遺構の堆積層上面で検出した南北溝であり、さらに調査区の南北へ続いている。S X1749、S K1739 と重複し、いずれよりも新しい。上端幅 2.8~2.4m、底面幅 0.4~0.5m、深さ約 0.9m で、断面形は緩やかな U 字形をなす。堆積層は 5 層でいずれも自然堆積とみられる。1~4 層はいずれも明褐色土細粒と灰黃褐色粘質土ブロックを多量に含む暗褐色土であるが、特に 2・4 層が黒味を帯びて見える。5 層は灰白色火山灰細粒と暗褐色土ブロックを少量含む褐灰色粘土である。溝の方向は北で約 14 度西へ偏している。

遺物は各堆積層より少量の土器と多量の瓦が出土している。

土器は須恵器・土師器・須恵系土器が出土しており、いずれも破片資料である。須恵器には杯口縁・体部資料 8 点、底部資料 2 点、瓶類体部資料 2 点、甕口縁・体部資料 30 点、底部資料 1 点があり、このうち杯の底部資料は 2 点とも手持ちヘラ削り調整のものである。土師器にはロクロ調整のものとロクロ・非ロクロ調整不明のものがある。ロクロ調整のものには内黒の杯口縁部資料 1 点、甕体部資料 7 点、ロクロ・非ロクロ調整不明のものには

内黒の杯体部資料 8 点・高台杯底部資料 1 点、甕体部資料 6 点がある。須恵系土器には杯底部資料 3 点、小型杯口縁・体部資料 11 点、底部資料 7 点、小型高台杯底部資料 1 点がある。

瓦は丸瓦と平瓦が各堆積層より出土している。丸瓦には II 類 50 点、II B 類 2 点、II B 類 a タイプ 9 点があり、このうち II B 類 a タイプのなかには、凸面に刻印「占」のみられるものが 1 点(第 47 図 8)ある。平瓦には IA 類 5 点、IC 類 b タイプ(11) 1 点、II B 類 74 点、II B 類 b タイプ 3 点、II C 類 20 点、1 枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの 4 点、不明 9 点がある。このうち II B 類のなかには凸面に方形突出のみられるもの(10)が 1 点ある。

S D 1716 南北溝 (第 36・47 図)

S D 1749 溝状遺構の堆積層上面で検出した南北溝であり、さらに調査区の南北へ続いている。S D 1717・1720、S K 1733・1735 と重複し、S D 1717・1720 より新しく、S K 1733・1735 より古い。上端幅 1.8~2.2m、底面幅約 0.5m、深さ約 0.9m で、断面形は緩やかな U 字形をなす。堆積層は 5 層でいずれも自然堆積とみられる。

1 層：明褐色土細粒・灰黄褐色土ブロックを少量含む褐色土

2 層：明褐色土細粒・褐色土ブロックを含む褐灰色砂質土

3 層：明褐色土細粒を少量含む褐灰色粘質土

4 層：3 層に似るが明褐色土細粒がより少ないため 3 層よりやや黒味を帯びる

5 層：明褐色土細粒を多量に含む褐灰色粘土

溝の方向は北で約 13 度西へ偏している。

遺物は各堆積層より多量の土器と少量の瓦が出土している。土器には須恵器・土師器・須恵系土器・灰釉陶器がある。須恵器では杯口縁部～体部資料・底部資料各 6 点、長頸瓶(第 47 図 1)の他瓶類体部資料 4 点、甕体部資料 16 点があり、このうち杯の底部資料は糸切り無調整のもの 2 点、ヘラ切り無調整のもの 1 点、手持ちヘラ削り調整のもの 3 点である。土師器にはロクロ調整のもの、非ロクロ調整のもの、ロクロ・非ロクロ調整不明のものがある。ロクロ調整のものには、内黒の杯底部資料・高台杯各 1 点、甕体部資料 2 点、非ロクロ調整のものには両黒の杯底部資料 1 点、甕体部資料 9 点、ロクロ・非ロクロ調整不明のものには内黒の杯・高台杯、甕がある。須恵系土器は最も多量に出土しているが、図示できるものは小型杯 1 点(5)だけであり、その他すべて破片資料である。破片資料には、杯底部資料 1 点、小型杯口縁～体部資料 51 点・底部資料 16 点がある。灰釉陶器は瓶類の体部資料(図版 3)が 1 点出土している。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦は II 類 25 点、II B 類 3 点、II B 類 a タイプ 7 点、不明 2 点、平瓦は IA 類 3 点、ID 類(12) 1 点、II B 類 18 点、II C 類 3 点、不明 9 点が出土している。

S D 1717 溝（第 36・47 図）

S X 1744 整地層上面で検出した長さ約 6.5m の L 字状の溝であり、調査区西端部付近で北へ曲がりさらに調査区の北へ続いている。S X 1744、S D 1716・1720・1728、S K 1733 と重複し、S X 1744 より新しいが S D 1716・1720・1728、S K 1733 より古い。

上端幅 0.9~1.5m、底面幅 0.2~0.7m、深さ 0.2~0.3m で、断面形は緩やかな U 字形をなす。堆積層は 2 層でいずれも自然堆積とみられる。

1 層：明褐色土細粒を少量含む黒褐色土

2 層：明褐色土細粒を多量に含む褐灰色砂層

溝の方向（東西溝の部分）は東で約 7 度北へ偏している。

遺物は比較的多量の土器と少量の瓦が出土している。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、ほとんどが破片資料である。須恵器には杯口縁部～体部資料 3 点・底部資料 5 点、高台杯 1 点、瓶類体部資料 1 点、甕体部資料 19 点・底部資料 3 点があり、このうち杯の底部資料では糸切り無調整のもの 3 点、ヘラ切り無調整のもの 1 点、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のもの 1 点がある。土師器にはロクロ調整のもの、非ロクロ調整のもの、ロクロ・非ロクロ調整不明のものがある。ロクロ調整のものには甕体部資料 1 点・非ロクロ調整のものには内黒の杯底部資料 1 点、甕体部資料 4 点、ロクロ・非ロクロ調整不明のものには内黒の杯・高台杯、甕がある。須恵系土器には図示できるものとして小型杯が 1 点（第 47 図 4）あり、この他に杯底部資料 1 点、小型杯口縁～体部資料 16 点・底部資料 5 点、小型高台杯 1 点がある。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦は II 類 20 点、II B 類 a タイプ 2 点、不明 1 点、平瓦は I A 類 1 点、I C 類 a タイプで凹面ナデ調整のもの（13）1 点、II B 類 10 点、II B 類 b タイプ 1 点、II C 類 3 点、1 枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの 2 点、不明 3 点がある。

S D 1720 南北溝（第 36・47 図）

S D 1749 溝状遺構の堆積層上面で検出した南北溝で、北端部は S D 1717 東西溝に壊されているが、南端部は調査区外へ続いている。S D 1716・1717 と重複しいずれよりも古い。上端幅約 1.4m、底面幅 0.3~0.7m、深さ約 0.3m で断面形は緩やかな U 字形をなす。堆積土は 2 層でいずれも自然堆積とみられる。

1 層：木炭粒を少量、明褐色土細粒を含む黒褐色土

2 層：灰白色火山灰細粒・木炭粒を少量、明褐色土細粒を含む黒褐色粘質土

溝の方向は北で約 10 度西へ偏している。

遺物は多量の土器と少量の瓦が出土している。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、大部分が須恵系土器の破片資料である。須恵器には杯口縁～体部資料 5 点・底部資

料 1 点、甕体部資料 14 点があり、このうち杯の底部資料は手持ちヘラ削り調整のものである。土師器にはロクロ調整の甕体部資料 7 点、非ロクロ調整の甕口縁部・体部資料 22 点、ロクロ・非ロクロ調整不明の内黒の杯・高台杯、甕がある。須恵系土器には図示できるものとして杯(第 47 図 2)、小型杯(6・7)があり、このほかに杯・小型杯・高台杯の破片資料が 148 点ある。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦は II 類 22 点、II B 類 1 点、II B 類 a タイプ 1 点、不明 2 点、平瓦は IA 類 1 点、II B 類 31 点、II C 類 3 点、不明 14 点がある。このうち平瓦 II B 類のなかには、凸面に回型台の圧痕のみられるもの(14)が 1 点ある。

S D 1714 南北溝 (第 36 図)

S X 1742 整地層上面で検出した南北溝である。S A 1743 柱穴群と重複し、これより新しい。長さ約 6 m 検出しているが、さらに調査区の南北へ続いている。上端幅 1.1~1.3m、底面幅 0.4~0.5m、深さ約 0.6m で断面形はほぼ逆台形をなす。底面はほぼ平坦で、南側へ傾斜している。堆積層は明褐色土ブロック・細粒を含む灰黄褐色土の 1 層で、人為的な埋土とみられる。溝の方向は北で約 11 度西へ偏している。

遺物はごく少量の土器と比較的多量の瓦が出土しており、いずれも破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器がある。須恵器では杯底部資料 1 点、長頸瓶頸部資料 1 点、瓶類体部・底部資料各 1 点、甕体部資料 4 点が出土しており、このうち杯の底部資料は回転ヘラケズリ調整のものである。土師器ではロクロ調整の甕体部資料 1 点、ロクロ・非ロクロ調整不明の甕体部資料 1 点が出土している。須恵系土器では小型杯底部資料 1 点が出土している。

瓦は丸瓦と平瓦が出土しており、丸瓦には II 類 20 点、II B 類 a タイプ 4 点が、平瓦には IA 類 1 点、II B 類 38 点、II C 類 9 点、不明 6 点がある。

④ 土 壤

S K 1739 土壌 (第 36・46 図)

S D 1749 溝状遺構の堆積層上面で検出した土壤である。S X 1748・1749 と重複し、いずれよりも新しい。平面形は多少歪んだ椭円形を呈する。長径(南北)約 2.3m、短径(東西)約 1.9m、深さ約 0.4m で断面形は皿状をなす。

堆積層は 3 層に細分される、いずれも自然堆積と考えられる。

1 層：灰黄褐色粘質土ブロック・細粒を含む褐色土

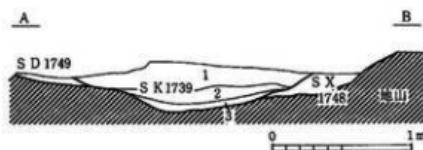
2 層：明褐色土細粒を含む灰白色火山灰層

3 層：褐灰色土ブロック・明褐色土細粒を含む褐色土

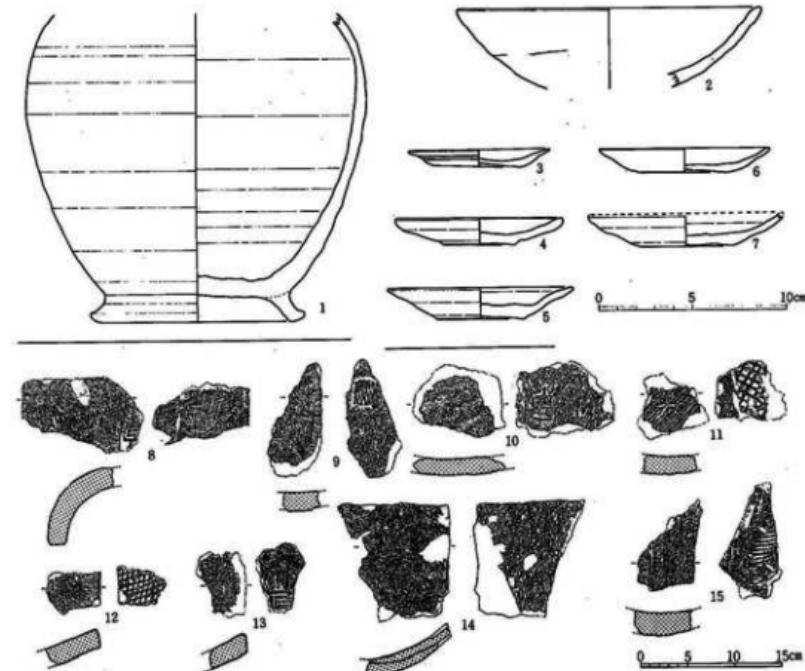
遺物は、須恵器では高台杯・甕の体部破片が各1点、瓦では丸瓦II B類が1点出土している。このうち須恵器の高台杯の体部破片は、S X1748 整地層出土のもの(第38図3)と接合する。

S K1730 土壌 (第43・47図)

S D1709 南北溝の堆積層上面で検出した土壌である。S D1710・1713、S K1740と重複しないずれよりも新しい。調査区の関係で、東西6m、南北1.5m、深さ0.4~0.5mほどの南



第46図 SK1739 土壌断面図



番号	層位	種類	記述	備考	器番号	番号	層位	種類	記述	備考	器番号
1	S D1716 堆積層下部	須恵器	長頸瓶		T288	9	S D1713	瓦	平瓦	II B類	7291
2	S D1720 堆積層	須恵系土器	甕		7290	10	S D1715	瓦	平瓦	II B類	7291
3	S K1730 堆積層	須恵系土器	小型甕		7289	11	S D1716	瓦	平瓦	凸面に方形突出	7346
4	S D1717 堆積層	須恵系土器	小型甕		7290	12	S D1717	瓦	平瓦	II C類	7346
5	S D1718 堆積層下部	須恵系土器	小型甕		7290	13	S D1717	瓦	平瓦	II C類aタイプ	7346
6	S D1720 堆積層	須恵系土器	小型甕		7290	14	S D1720	瓦	平瓦	II B類	7346
7	S D1720 堆積層	須恵系土器	小型甕		7290	15	S K1730	瓦	平瓦	II C類aタイプ	7346
8	S D1715 堆積層	瓦	丸瓦	縫合古	7291						

第47図 S D1713・1715~1717・1720 溝、SK1730 土壌出土の遺物

半部だけの検出にとどまった。堆積層は3層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

1層：木炭粒を少量、地山岩盤細粒を含む褐色土

2層：木炭粒・灰黄褐色土ブロックを多量に含む褐色土

3層：木炭粒・地山岩盤細粒を含む褐灰色粘質土

遺物は土器と瓦が各堆積層より出土している。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、このなかでは須恵系土器の出土量が最も多い。須恵器では甕の体部資料6点がある。土師器にはロクロ調整と非ロクロ調整の甕体部資料が各1点、ロクロ・非ロクロ調整不明の内黒の杯口縁部資料1点、高台杯底部資料1点、甕体部資料4点がある。須恵系土器には図示できるものとして小型杯(第47図3)1点があり、そのほかに杯口縁部資料1点、小型杯口縁～体部資料30点・底部資料12点がある。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦はII類29点、II B類2点、II B類aタイプ6点、平瓦はIA類2点、IC類cタイプで凹面ナデ調整のもの(15)1点、II B類42点、II C類4点、不明6点がある。

(3). 堆積層出土の遺物(第48図)

〔第5層出土の遺物〕

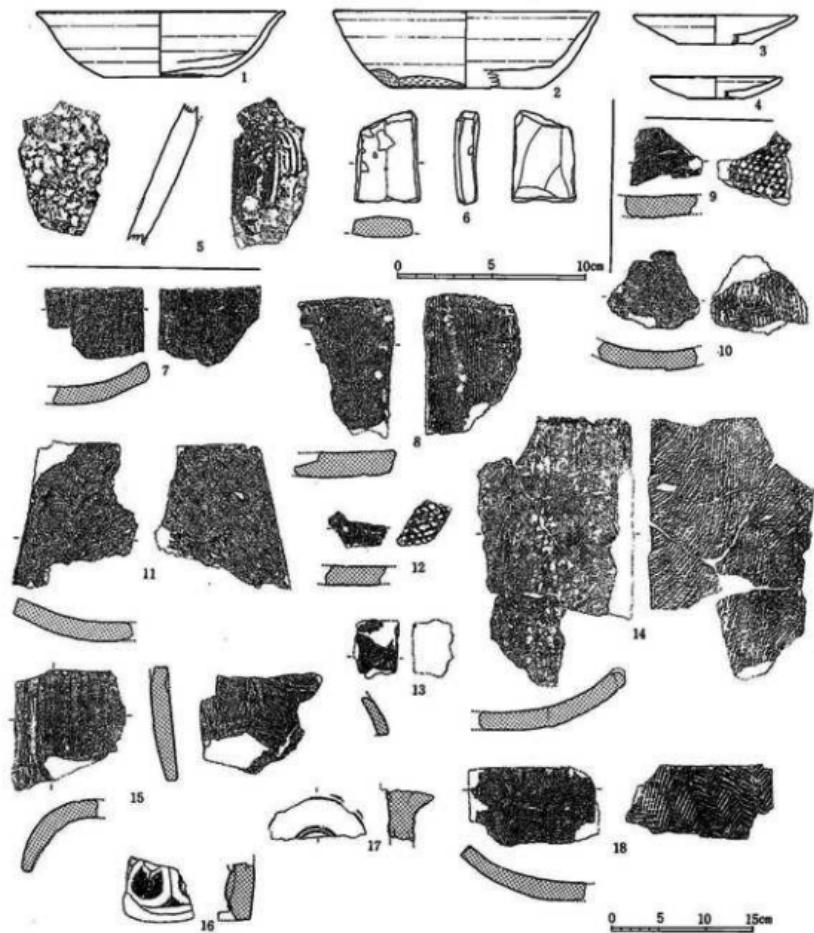
第5層からは少量の土器と比較的多量の瓦が出土しているが、すべて破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、このなかでは特に須恵系土器の出土量が多いが、図示できるものはない。須恵器では瓶類・甕、土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ・非ロクロ調整不明の内黒の杯、須恵系土器では小型杯がみられる。

瓦には丸瓦と平瓦がある。丸瓦ではII類40点、II B類4点、II B類aタイプ7点、不明5点、平瓦ではIA類1点、II B類53点、II B類bタイプ1点、II C類6点、1枚作りで凹凸両面ナデ調整のもの1点、不明18点がみられる。

〔第4層出土の遺物〕

第4層からは少量の土器と比較的多量の瓦が出土しており、いずれも破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器があり、このなかでは特に須恵系土器の出土量が多い。須恵器では杯・甕があり、杯には底部糸切り無調整のものが2点みられる。土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ・非ロクロ調整不明の内黒の杯・高台杯が、須恵系土器では内面に漆の付着した杯(図版4)と小型杯・高台杯がある。

瓦には軒丸瓦・丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦(第48図17)は瓦当部の小破片であるが242重圓文軒丸瓦とみられる。丸瓦ではII類22点、II B類4点、II B類aタイプ5点、不明2点が、また平瓦ではIC類bタイプ(9・12)2点、II B類42点、II C類6点、不明9点がある。



番号	層位	種類	器種	備考	通番号	番号	層位	種類	器種	備考	通番号
1	第1層	須恵器	环	系切り無調整	7288	10	第1層	瓦	平瓦	II 月輪 凸面に横長の凹窓	7291
2	第1層	須恵器	环		7288	11	第1層	瓦	平瓦	一枚作りで凹凸両面 ツブ溝窓	7346
3	第1層	須恵系土器	小型环	手持らヘラケズリ調整	7290	12	第4層	瓦	平瓦	I C 無 b タイプ	7346
4	第1層	須恵系土器	小型环		7290	13	第1層	瓦	丸瓦	I A 無	7291
5	第3層	中世陶器	桶鉢		7291	14	第1層	瓦	平瓦	II 月輪 凹面に凸型瓦窓	7346
6	第1層	灰釉陶器	平瓶	把手の破片	7291	15	第1層	瓦	丸瓦	中空から近縁に282 この頃の瓦の	7291
7	第1層	瓦	平瓦	I A 無 b タイプ	7346	16	第1層	瓦	斜丸瓦	120	7291
8	第1層	瓦	平瓦	II 月輪 凸面に調切瓦	7346	17	第4層	瓦	斜丸瓦	242	7291
9	第4層	瓦	平瓦	I C 無 b タイプ	7346	18	第1層	瓦	平瓦	I C 無 a タイプで凹 出ナギ溝窓	7396

第48図 各堆積層出土の遺物

〔第3層出土の遺物〕

第3層からは少量の土器と瓦が出土しており、いずれも破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器のほか、中世陶器の擂鉢の体部破片が1点ある。須恵器では杯・瓶類・甕があり、杯には底部糸切り無調整のものが1点みられる。土師器ではロクロ調整の内黒の杯、非ロクロ調整の甕があり、須恵系土器では小型杯がある。中世陶器の擂鉢(第48図5)は内外面とも黒色を呈する軟質なもので、器壁の外面全体と内面の一部には焼けハゼと考えられる小剥離痕が多数みられる。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦ではII類11点、II B類aタイプ1点、不明1点、平瓦ではII B類16点、II B類bタイプ1点、不明6点がみられる。

〔第2層出土の遺物〕

第2層からは少量の土器と瓦が出土しており、いずれも破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器がある。須恵器には杯・甕、土師器にはロクロ調整の内黒の杯、非ロクロ調整の甕、ロクロ・非ロクロ調整不明の内黒の杯、須恵系土器には小型杯がある。

瓦には丸瓦と平瓦があり、丸瓦ではII類10点、II B類2点、平瓦ではIA類1点、II B類3点、II C類1点、不明4点がみられる。

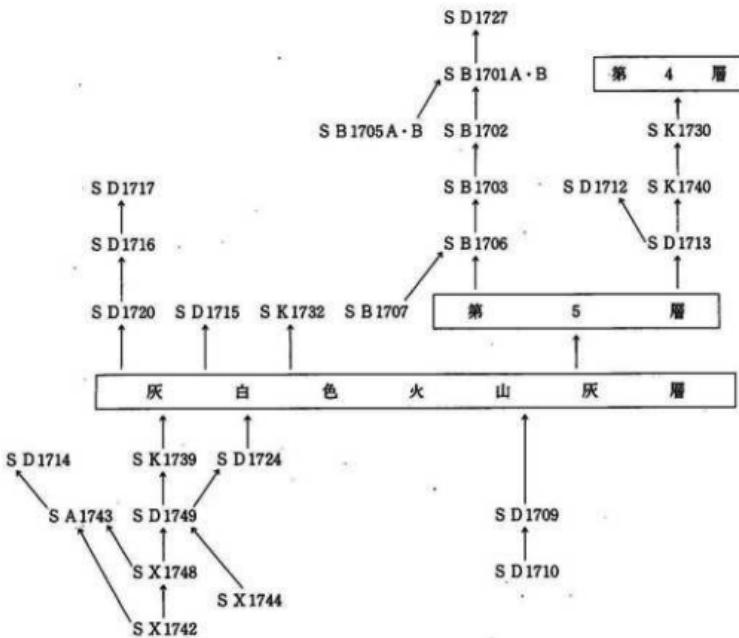
〔第1層出土の遺物〕

第1層からは多量の土器と瓦の他に砥石が1点出土しており、土器・瓦は大部分が破片資料である。土器には須恵器・土師器・須恵系土器のほかに、微量の灰釉陶器・綠釉陶器、近世以降の陶磁器がある。図示できるものとして須恵器では底部が糸切り無調整の杯(第48図1)・底部が手持ちヘラ削り調整の杯(2)、須恵系土器では小型杯(3・4)がある。灰釉陶器は平瓶の把手の破片(6)と皿の口縁部破片(図版3)が各1点、また綠釉陶器は皿の口縁部資料と不明小破片(図版3)が各1点出土している。

瓦には軒丸瓦・丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦は瓦当部の小破片であるが、范キズなどの特徴より120軒丸瓦(16)とみられる。また(13)は凹面が大部分剥落しているが凸面に平行叩き目がみられる丸瓦IA類、(7)は凸面に微かに格子叩き目が残る平瓦IA類bタイプ、(18)は凹面がナデ調整された平瓦IC類aタイプである。(8・10・11・14)はいずれも平瓦II B類とみられるが、このうち(8)は凹面にも繩叩き目が若干みられ、(14)では凹面に凸型台の痕跡と考えられる木目状の圧痕が、(10)では凸面に横に細長い凹がそれぞれみられる。そして(11)は粘土板1枚作りで凹凸両面ナデ調整された平瓦である。(15)は凹面の布目が非常に細かく、凸面が繩叩きの後に縱方向に削り調整されている丸瓦の狭端部資料で、1点だけ出土している。全体的に多少光沢をもつ黒味を帯びていることより、中世～近世にかけての頃の丸瓦と考えられる。

4. 考 察

第52次調査は、外郭東門北方を対象にした昨年度の第51次調査の結果(註1)、多賀城の外郭東辺築地が時期によって位置を変えている可能性が生じたため、これまで未調査でその位置が不明確であった外郭東辺中央部付近を対象に、区画施設の位置を確定しその構造・変遷の把握を目的としたものである。その結果、築地に関連するS X1742・1748 整地層、S D1710・1709 南北溝、S D1749 溝状遺構、S A1743 柱穴群をはじめとして、S B1701～1708 建物跡、S X1744 整地層、および多くの柱穴、溝、土壌などを検出した。これらのなかで、主な遺構を重複状況と堆積層との関係から整理すると下表のようになる。



この他にこれらと重複しない主な遺構として S B1704・1708 建物跡、S K1729 土壌などがある。

このなかで、築地に関連する遺構以外で注目されるものとしては、築地廃絶後の建物跡がある。したがって以下では、(1)：築地に関連する各遺構、(2)：建物跡の順に検討していくこととする。

(1) 築地に関連する遺構について

今回の調査では、前章で記述したように築地本体の積土を検出できなかったが、築地に関連する S X1742・1748 整地層、S D1709・1710 南北溝、S D1749 溝状遺構、S A1743 柱穴群を検出している。S X1742・1748 整地層は、外郭東門より南へ続く築地の延長線上に位置し、その東西両端部が犬走り状の段を形成していることから築地構築時の基礎地業による整地層と考えられる。また S D1709・1710 南北溝は城外(東)側の南北溝、S D1749 は城内(西)側の溝状遺構、そして S A1743 は築地の寄柱穴あるいは築地構築時の添柱穴の可能性が高いと考えられた。

これらのなかで、S X1742・1748 整地層には S X1742→S X1748、また S D1709・1710 南北溝にも S D1710→S D1709 という 2 時期の変遷がそれぞれみられる。そして城外側の S D1709 南北溝と城内側の S D1749 溝状遺構は、いずれも自然堆積によって埋没し、その堆積層中に共通して灰白色火山灰層が認められることから、東西で対になる同時期の遺構であることが知れる。

次にこの S D1749 溝状遺構および S D1709 南北溝と整地層の関係をみると、S D1749 は新旧関係から、S X1748 より古い S X1742 整地層とは同時に存在し得ず、S X1742 整地層より新しい S X1748 整地層と同時期の遺構と考えられる。また S D1709 南北溝・S D1749 溝状遺構より古い S D1710 南北溝は、古い時期の S X1742 整地と同時期の遺構とみられる。

以上を整理すれば、A群：S X1742・S D1710→B群：S X1748・S D1709・S D1749 となり、想定した築地には少なくとも 2 時期 (A 期→B 期) の変遷のあることが考えられる。なお S X1748 と S D1749 には切り合い関係がみられるが、これは築地構築時の工程差とみられる。また S A1743 柱穴群は、築地の寄柱穴あるいは築地構築時の添柱穴と考えられるが、柱列の組合せが複数想定できることから、少なくとも 2 時期以上の変遷をもつと考えられる。

次に A・B 両時期の年代について検討する。まず最初に B 期の年代についてみると、築地の基礎地業とみられる S X1748 整地層より土器と瓦が出土している。土器には須恵器と土師器があり、このうち土師器はすべて破片資料で器面の保存状況が悪く、確認できるものはすべてロクロを使用しないものである。須恵器では、杯に底部が手持ちヘラ削り調整されたものの他に、底部の切り離し技法が回転糸切りで底部周辺を手持ちヘラ削り調整されたものがあり、年代は 8 世紀末～9 世紀にかけての頃と考えられている(註 2)。瓦は確実なところでは政府第Ⅱ期までのものがみられる。したがって B 期の S X1748 整地層の年代は、8 世紀末頃～9 世紀にかけての頃以降とみられる。

一方、築地に伴う S D1709 南北溝・S D1749 溝状遺構からは比較的多量の瓦と少量の土器が出土している。瓦はすべて丸瓦と平瓦であり、このうち平瓦は多賀城跡政府遺構期第Ⅰ～Ⅳ期までのものが認められる。また S D1709・S D1749 の底面に近い堆積層下部には灰白色火山灰層がみられ、灰白色火山灰の降下は 10 世紀前半頃と推定されている（註3）。以上より B 期の築地は、10 世紀前半頃には存続していたことは確実であり、その構築もこの時期をさほど遡らないと考えられる。

A 期では S X1742 整地層より遺物は出土していないが、築地に伴う S D1710 から瓦が少量出土している。瓦はすべて丸瓦と平瓦の破片資料であり、このうち平瓦では確実なものとしては、第Ⅱ期までのものがみられる。以上より A 期の築地に伴う S D1710 の埋没年代は、8 世紀中頃以降と考えられる。一方、A 期と B 期が連続していたことは間違いないとみられるため、A 期の年代は B 期の年代を大幅に遡るとは思われず、ここでは 9 世紀以降と考えておきたい。

なお第 51 次調査の結果、多賀城の外郭東辺築地は 2 条存在することが確認され、外郭区画施設が時期によって位置を変えている可能性が生じた。今回の調査で検出した築地に関連する遺構は、その内側のものである。外側の区画施設については調査区東半部が中世以降に大規模な削平を受けていたため不明であった。

（2）建物跡について

今回の調査では調査区中央部付近で 8 棟の建物跡（S B1701～1708）を検出している。S B1704・1707 を除きいずれも部分的な検出にとどまったが、これらのなかには S B1702 のように北側に廂をもつ建物も含まれている。これらの建物跡は層位・重複関係より、灰白色火山灰の降下以後の S B1701～1703・1706 と、地山面で検出したため灰白色火山灰との関係を把握できない S B1704・1705・1707・1708 に分けられる。

一方、柱穴はいずれも平面形が不整円形で、大きさが 0.5m 以内の小規模なものである。埋土は、ほとんどの柱穴で地山細粒を含む暗褐色土か褐灰色土を基調としている。また柱間寸法は同じ建物跡でもバラツキが認められるが、2.5m を超える場合がほとんどなく、桁行方向では 1.5m と 2 m 前後のものが、梁行では 2 m 前後のものが多い。このように柱穴の特徴や柱間寸法に明瞭な違いが認められず、むしろ共通性が窺えるため、これらの建物跡のあいだにはさほど大きな時期の隔たりはないようすに推測される。

また、これらの建物跡は調査区中央部付近の限られた範囲のなかで検出されており、ほとんどが重複している。これは各建物跡が同時に存在したものではないことを示す一方、同じような機能をもつ建物跡が、この地区を中心として連続的に建て替えられたことをも

推定させる。

以上より、これらの建物跡は大きく隔たった時期のものとはみられず、その広がりを把握することはできなかったが、一定の地区で連続して建て替えられた建物跡と推定される。なお建物跡はその方向を南北棟でみると、北で東へ4度前後偏るSB1707・1708と、北で西へ3～5度偏るSB1701～1706の2群に分けられる。また重複状況をみると、SB1707→SB1706→SB1703→SB1702→SB1701となる。したがって建物跡は、変遷の途中で方向が北で東に偏るものから西へ偏るものへ変化したと考えられる。

建物の年代は、検出面が灰白色火山灰降下以後の堆積層である第5層上面であることより10世紀前半頃以降である。また周辺の堆積層から、中世陶器の擂鉢の破片と中世～近世にかけての頃とみられる丸瓦の破片が、また建物としてはまとまらなかつたが、これらの建物跡の柱穴と特徴が類似する柱穴(SA1747)の柱痕跡より永楽鉢の破片が各1点出土している。以上のような状況と古代末頃の土器であるかわらけが全く出土していないことから考えれば、これらの建物の年代はおよそ中世～近世にかけての頃と推定される。

註1 宮城県多賀城跡調査研究所「第51次調査」『多賀城跡一宮城県多賀城調査研究所年報1986』

1987 P. P34～60

2 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要I』 宮城県多賀城跡調査研究所 1974 P. P65～92

3 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』 宮城県多賀城跡調査研究所 1980
P. P1～38

IV 第53次調査

1. はじめに

多賀城跡第53次調査は多賀城市市川字奏社43・44・48-1のうち外郭東門地区の約800m²を対象として、昭和62年7月27日から12月22日まで実施した。外郭東門地区については昭和63年度の第54次調査で調査区を拡張して、さらに精査を継続する予定である。したがって、ここでは第53次調査の目的と調査成果の概要を述べるに留めたい。

2. 調査の目的

多賀城の外郭東辺築地(SF300)の東側約40mに存在する南北方向の築地(SF380)は、これまで多賀城に隣接する古代の施設を区画するものと考えてきた。しかし、昨年度の第51次調査によって、SF380築地は西側に平坦面を確保していること、現存する築地状高まりが東門のさらに南へ続いていることなどが明らかになり、多賀城の東側を区画する施設である可能性が高いことを指摘した。

このため、今年度の第53次調査は、SF380築地の南側に続く築地状高まりが築地であることの確認と門の検出を目的として発掘調査を実施することにした。発掘調査に先立ち調査の対象とした東門地区周辺の約10,000m²について縮尺1/200の詳細測量を行い、その成果に基づいてSB307東門の東側に発掘調査区を設定した。SF380築地はSB307東門の真東にあたる部分で約20mにわたって途切れていることから、その部分を中区、その北側を北区、南側を南区と呼ぶことにした。

3. 調査の成果

(1) 遺構の変遷

発掘調査の結果、北区においてSB1762礎石式八脚門・SF380築地・築地に沿う東側の大溝・城内道路の一部などの遺構を検出した。門・築地とそれに関連する主要な遺構を基準にすると、次のようにA～Dの四時期に大別され、C期はC₁・C₂期に細別される。

A期 SF380A築地。

B期 SF380B築地。

C₁期 SB1762礎石式八脚門とSF380C築地。

C₂期 SB1762礎石式八脚門の雨落ち溝北側に土留め石列を設ける。

C期終末……………礎石式八脚門の焼失……………

D期 S F 380D 築地。

今年度の調査は S B 1762 磐石式八脚門の火災による焼失までとし、それ以前の遺構については来年度の第 54 次調査において精査を実施することにした。

(2) S B 1762 磐石式八脚門 (図版 15・16)

【門の構造・規模】 南北 3 間・東西 2 間の磐石式八脚門 (4 個の磐石と 6 ヶ所の磐石抜取穴・根固め石から推定) である。桁行総長 10.5m で、柱間は中央間が 3.9m、両脇間が 3.3m である。梁行総長 5.4m で、柱間は 2.7m の等間である。

【基壇・雨落ち溝】 基壇上面はほぼ平坦で、城内の道路面より 20~30 cm 高い。基壇の西辺に沿って石組みの雨落ち溝が設けられている。この雨落ち溝は平坦面を内側に向けた自然石を溝の両側に捉え、底に平瓦を組み敷いたものである。雨落ち溝下部は C 2 期に埋められ、北側に土留め石列が設けられる。

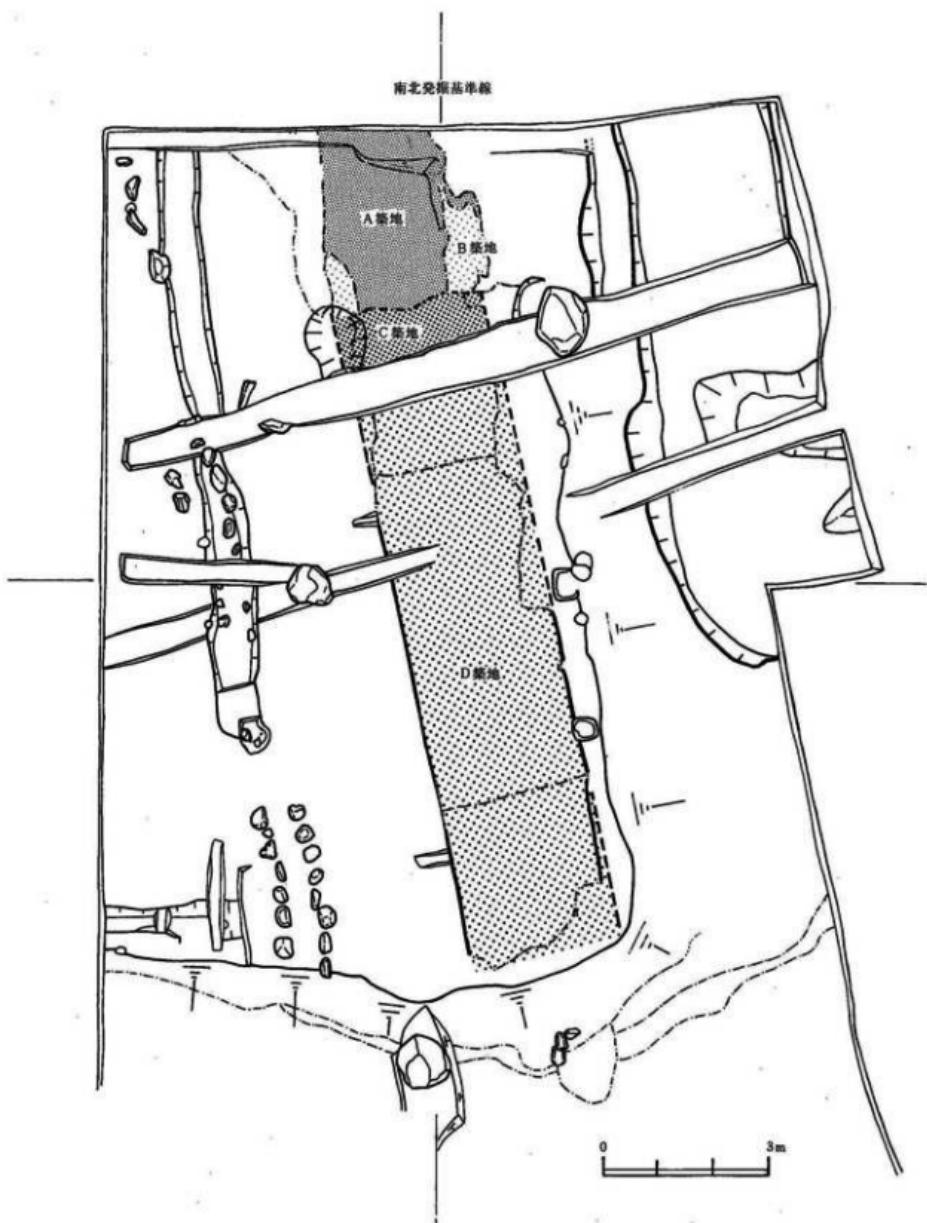
【門の焼失】 磐石式八脚門は火災によって焼失しているが、その痕跡として 1. 基壇面が焼け焦げていること、2. 基壇およびその周辺に炭化材・瓦・鉄釘などを含む焼土が堆積していることなどがあげられる。軒瓦としては重圈文軒丸瓦・単弧文軒平瓦がある。門に葺かれていた瓦が第 II 期のものであることから、その焼失は宝亀 11 年 (780) の伊治公皆麻呂の乱によるものと推定される。

(3) S F 380 築地

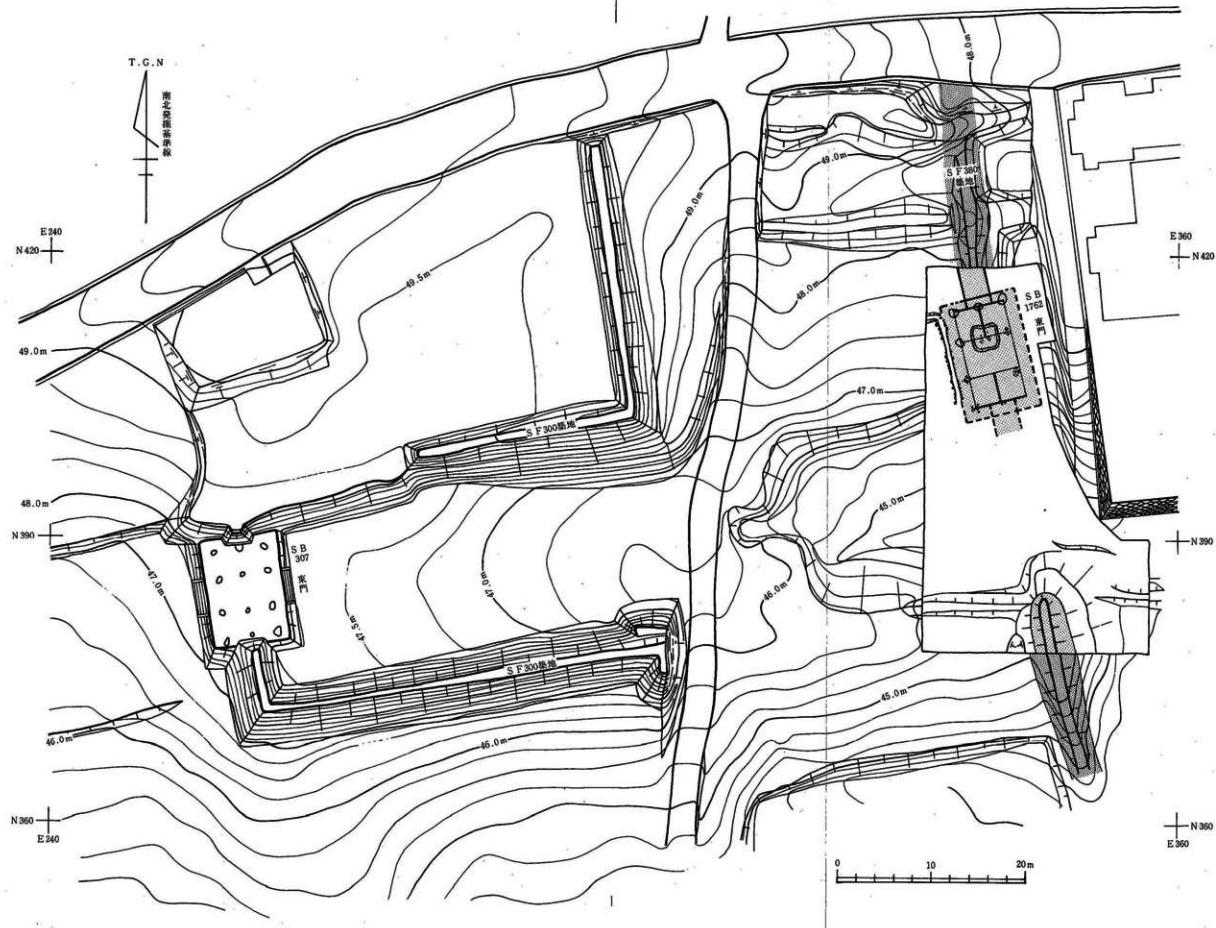
築地には A ~ D の 4 時期の変遷があり、C が磐石式八脚門段階で、A・B がそれ以前、D がそれ以後のものである。これらの築地の基底幅は C・D が 2.7m である。A・B については第 54 次調査で検討する予定である。

4.まとめ

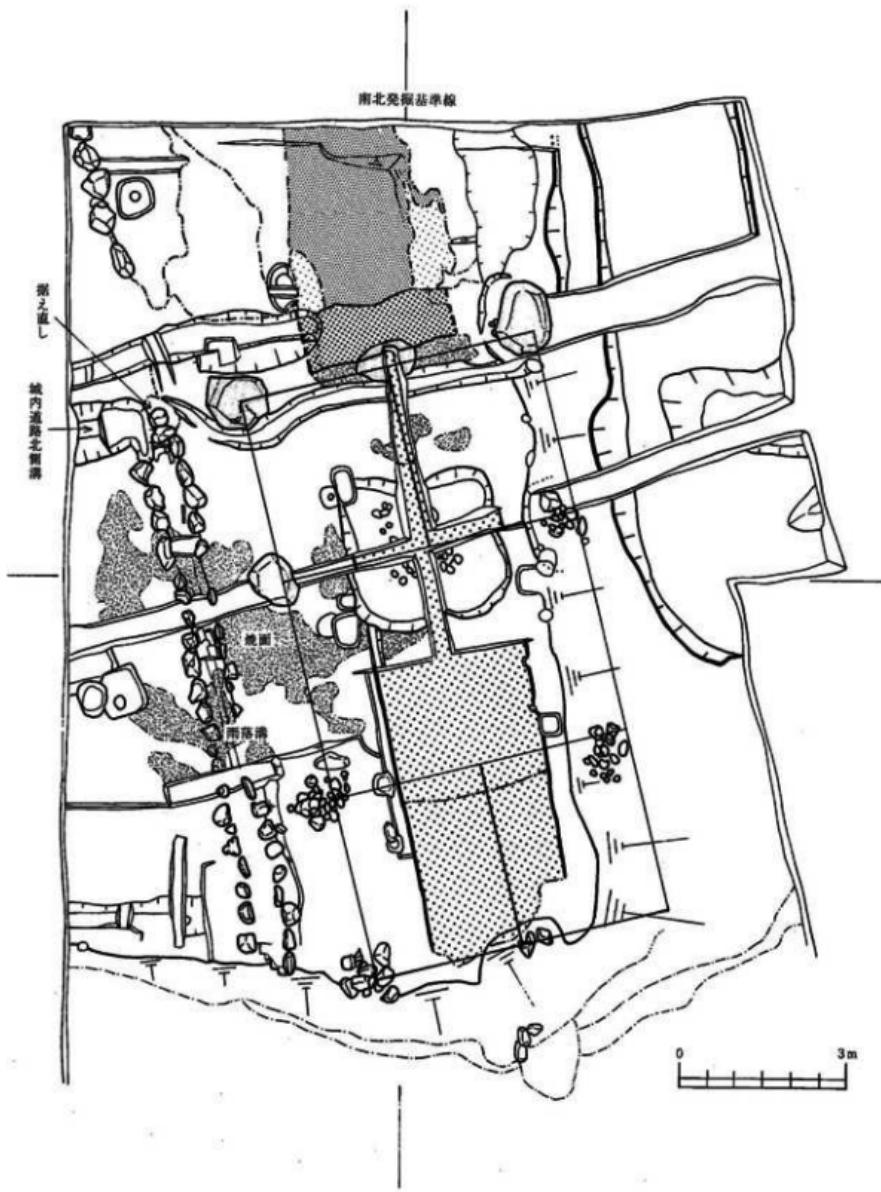
1. 今回の調査によって S B 1762 磐石式八脚門が発見され、門北妻に接続する築地状高まりは築地であることが確認された。この S B 1762 磐石式八脚門と S F 380 築地は多賀城の外郭東門と外郭東辺の区画施設と考えられる。
2. 今回発見された磐石式八脚門は宝亀 11 年 (780) の伊治公皆麻呂の乱によって焼失したとみられることから、磐石式八脚門および C 築地は第 II 期、門焼失後の D 築地は第 III 期、C 築地以前の A・B 築地は第 I 期もしくは第 II 期に築かれたものとみられる。
3. S B 1762 東門は第 13 次調査で検出した S B 307 東門より東に約 80m、北に約 12m の位置にある。城内の道路が S B 1762 東門から西へ直線的に伸びた場合、S F 300 築地に突当り、外側の S B 1762 東門・S F 380 築地が内側の S B 307 東門・S F 300 築地よりも古いことになる。この点は来年度の第 54 次調査で解明したい。



第49図 S F 380 築地跡 (A・B・C・D)



第50図 第53次調査区と周辺の地形



第51図 SB1762 外郭東門跡

V 付 章

1. 関連研究・普及活動

昭和 62 年度は多賀城跡の発掘調査のほかに、以下のような関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関する古代遺跡について計画的な調査研究を実施している。本年度は多賀城関連遺跡第 3 次 5 か年計画の第 3 年次にあたり、昭和 62 年 8 月 19 日から 11 月 7 日まで宮崎町東山遺跡の第 2 次発掘調査を行った。事業費は 7,000 千円(うち 50% 国庫補助)である。その成果は多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊『東山遺跡 II』として刊行する。

(2) 多賀城跡の環境整備

昭和 62 年度環境整備事業は、第 4 次 5 か年計画の第 3 年次にあたり総事業費 27,000 千円(国庫補助 50%)で実施した。主な対象地区は作貫一外郭東門間の南半部で面積は約 6,000 m²である。この他に当地区と政庁地区および作貫地区を含めた地域で、便益施設を設置した。

作貫一外郭東門間南半部については、連絡園路(幅員 1.5m、延長約 200m)などの設置、および既存緑地の修景を行った。また便益施設については、昭和 61 年度に実施した復原道路の説明板(1 基)、これに連続する政庁地区的総合説明板(3 基)、および各表示構造の小説明板(3 基)を政庁理解の便を考慮して設置した。また、これらの他に連絡園路沿いの必要箇所に誘導標識を設置した。

(3) 遺構調査研究事業

本年度の事業は東北古代城柵遺跡の区画施設に関する総合研究 5 か年計画の 5 年次にあたる。事業内容は主として検出遺構のデータ収集に主眼を置いている。本年度は宮城県桃生城跡(河北町)・伊治城跡(築館町)・宮沢遺跡(古川市)、秋田県秋田城跡(秋田市)などを対象とし、外郭線についての写真・実測図などの収集を行った。

(4) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するため下記の現地説明会を実施した。

「多賀城跡第 53 次調査について」	昭和 62 年 11 月 21 日	丹羽茂
「東山遺跡第 2 次調査について」	昭和 62 年 10 月 4 日	高野芳宏

(5) 他機関の発掘調査などへの協力

赤井遺跡 矢本町教育委員会 62. 7 ~ 8 桑原・白鳥・高野・丹羽・古川・後藤・村田

伊治城跡	築館町教育委員会	62. 7	白鳥・高野・丹羽・村田
秋田城跡	秋田市教育委員会	62. 7	桑原・古川
名生館遺跡	古川市教育委員会	62. 9	桑原・白鳥・丹羽・古川・後藤・村田
稻荷森古墳	南陽市教育委員会	62. 10・11	丹羽茂

(6) 講演会などへの協力

白鳥良一	62. 6. 26 「伊治城跡について」	築館町公民館
丹羽 茂	62. 8. 8 「古墳文化の成立」	東北歴史資料館開放講座
桑原滋郎	62. 8. 22 「多賀城跡めぐり」	東北歴史資料館開放講座
白鳥良一	62. 8. 22 「多賀城発掘調査最近の成果」	東北歴史資料館開放講座
古川雅清	62. 8. 27 「遺跡保存整備課程」埋蔵文化財技術者研修	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
高野芳宏	62. 9. 05 「伊達家の墓」	東北歴史資料館開放講座
丹羽 茂	62. 10. 14 「古墳文化の成立と展開」	宮城県文化財保護地区指導員等研修講座 宮城県文化財保護課
桑原滋郎	62. 10. 28 「古代のムラ」	古川市市民郷土史講座
白鳥良一	63. 2. 13 「伊治城と古代の栗原」	栗原文化会館

(7) 研究発表・執筆など

白鳥良一	日本歴史地名大系4『宮城県の地名』分担執筆(考古)	平凡社 1987. 7
丹羽 茂	日本歴史地名大系4『宮城県の地名』分担執筆(考古)	平凡社 1987. 7
丹羽 茂	「多賀城跡第53次調査」	第14回古代城柵官衙遺跡検討会 1988. 2
村田晃一	「東山遺跡第2次調査」	第14回古代城柵官衙遺跡検討会 1988. 2
丹羽 茂	「多賀城跡第53次調査」	宮城県内発掘調査成果発表会 1987. 12
村田晃一	「東山遺跡第2次調査」	宮城県内発掘調査成果発表会 1987. 12
桑原滋郎	「東北の城柵について」	『明日香風』25 1988. 1
白鳥良一	「郡山遺跡と名生館遺跡」	『明日香風』25 1988. 1
高野芳宏	「多賀城と官寺」	『明日香風』25 1988. 1
丹羽 茂	「遠見塚古墳・雷神山古墳と東北地方の古式古墳」	『明日香風』25 1988. 1

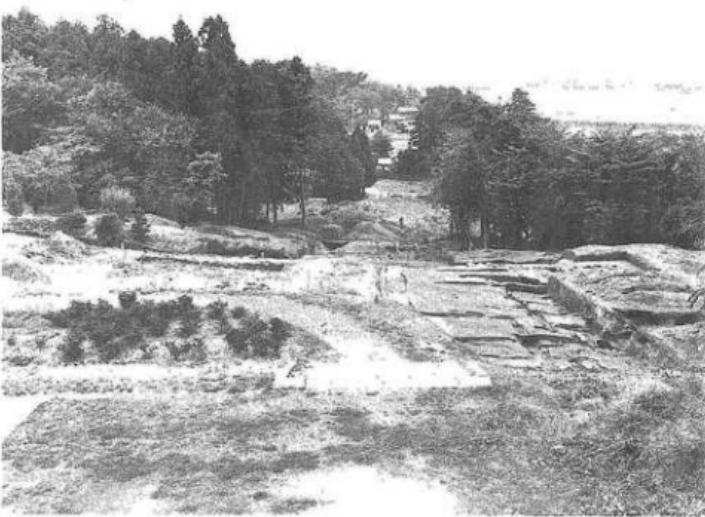
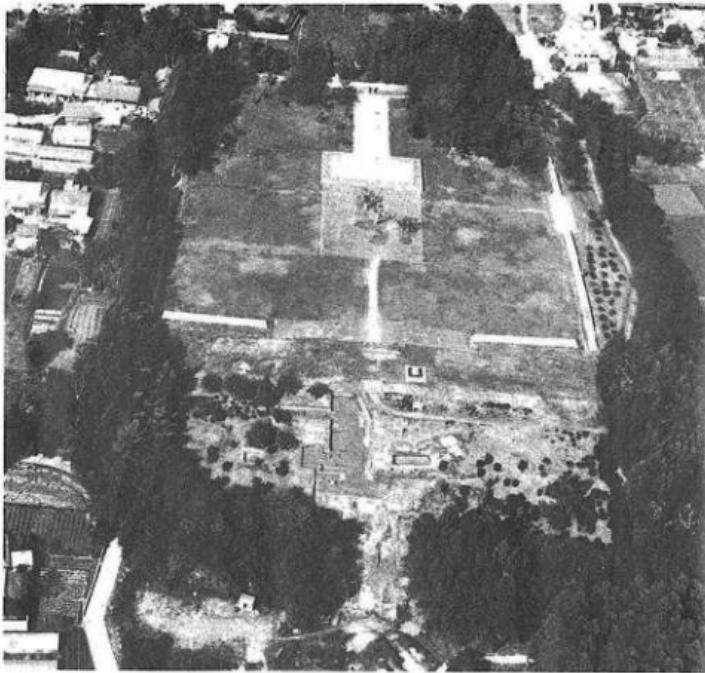
(8) その他

桑原滋郎	秋田城跡環境整備指導委員	多賀城市史編纂委員・執筆委員
	名生館遺跡発掘調査指導委員	夏井庵寺跡調査指導委員
	郡山遺跡発掘調査指導委員	閑和久上町遺跡発掘調査指導委員
	多賀城市文化財保護委員	

白鳥良一	払田柵跡環境整備審議会委員	名生館遺跡発掘調査指導委員
	宮沢遺跡環境整備委員	
高野芳宏	多賀城市史執筆委員	
丹羽 茂	稲荷森古墳発掘調査指導委員	
古川雅清	払田柵跡環境整備審議会委員	宮沢遺跡環境整備委員
	史跡大木圓貝塚環境整備指導委員	

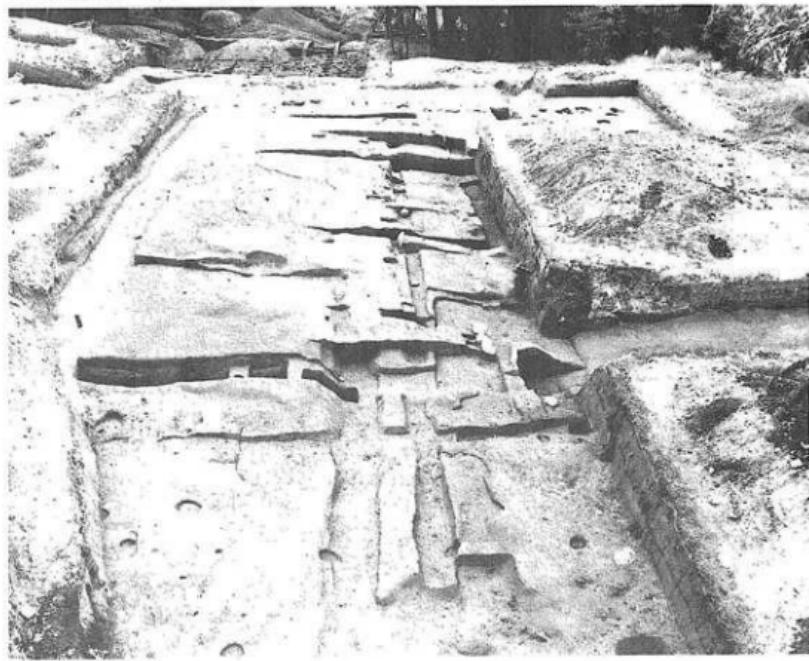
2. 研究成果刊行物

- (1)『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986 1987. 3
- (2)『東山遺跡Ⅰ』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第12冊 1987・3



図版 1 第 50 次調査 上 政府跡と調査区(南上空から)
下 調査区全景(北から)

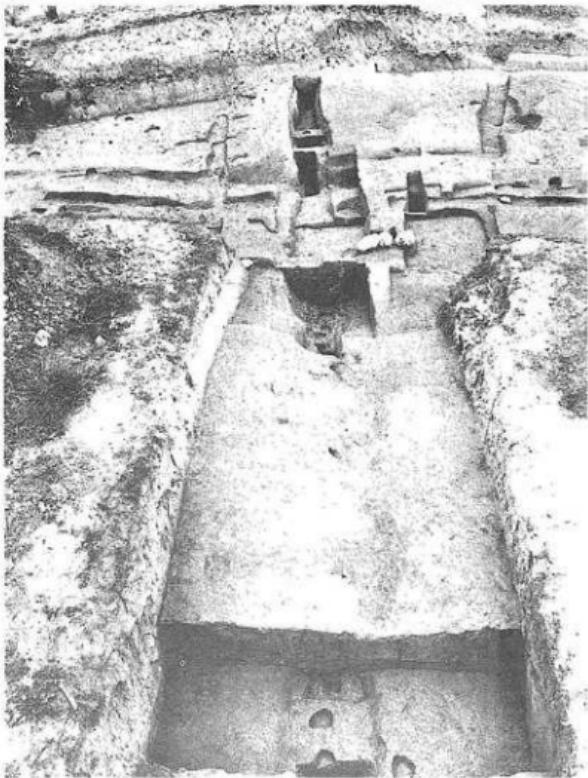
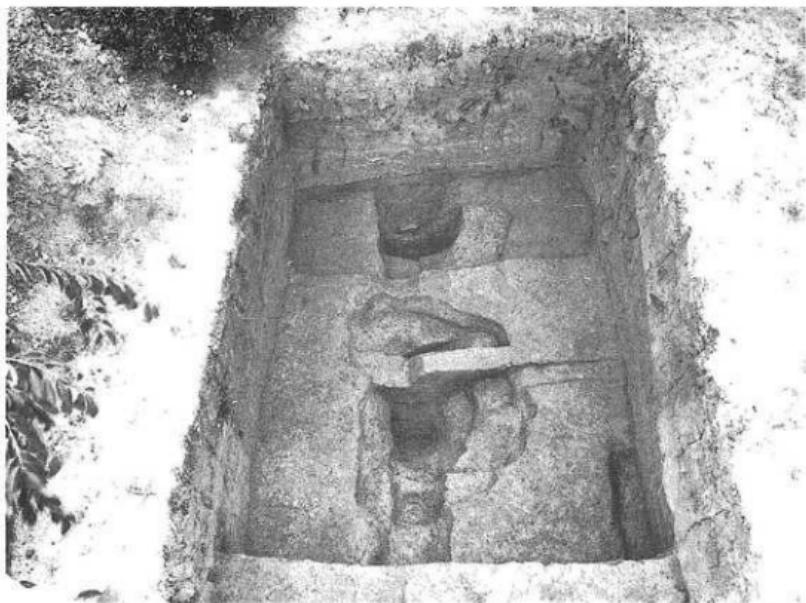
ネガ G 234-14
ネガ B 4753



図版2 第50次調査 上 北区全景(東から)
下 北区全景(北から)

ネガB4750

ネガB4718



図版3 第50次調査

上 SB1599門跡・SA1600・1601

堀跡(東から) ネガB4726

下 SA1600 堀跡(西から)

ネガB4728



図版4 第50次調査

上 SX1604 道路跡全景
(南から) ネガB4714

下 SX1604 道路跡
(南から) ネガB4720



図版5 第50次調査

- 上 SX1607 路肩石列・SD1608
側溝（南から） ネガB4722
- 中 SX1609 階段（西から）
ネガB4711
- 下 SX1609 階段（南東から）
ネガB4709





図版6 第50次調査

上 南区全景（北から）
ネガB4696

下 南区南半部（北から）
ネガB4748



図版7 第50次調査

上 SX1622 平場(東から)

ネガB4699





1



2



3



4



5



6

図版8 第50次調査

- | | | |
|-----------------|---------|-------------------------|
| 1 土馬 第16図1 | ネガB5408 | 2 壁材 第1層 ネガB5410 |
| 3 羽口 第11図3 | ネガB5409 | 4 絵画のある平瓦 第27図2 ネガB5411 |
| 5 白磁 第23・25・26図 | ネガB5413 | 6 三筋壺 第23図1 ネガB5414 |

図版9 第50次調査 かわらけ

1. IA・IB類

ネガB5415



1

2. II A～II C類

ネガB5416



3. IA類の内面ナデ調整

ネガB5420



4. II A類の底部糸切痕跡

ネガB5424

5. IA類の不明圧痕

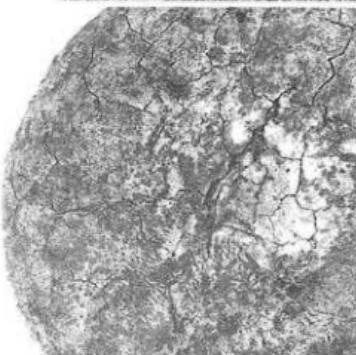
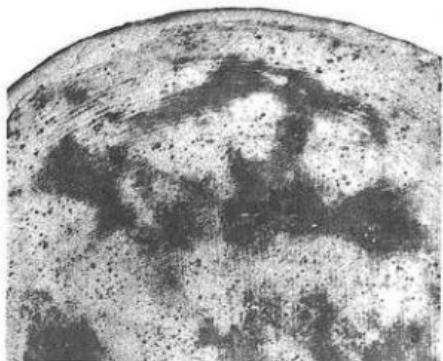
原寸ネガB5418

6. IB類の不明圧痕

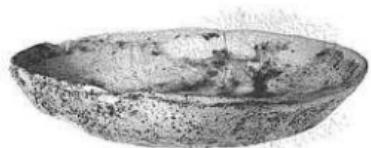
ネガB5423



2



4



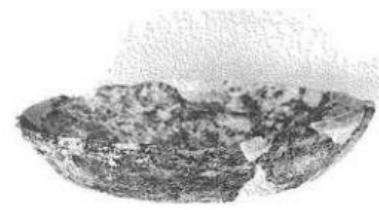
1



2



3



4



5



6



7



8



9

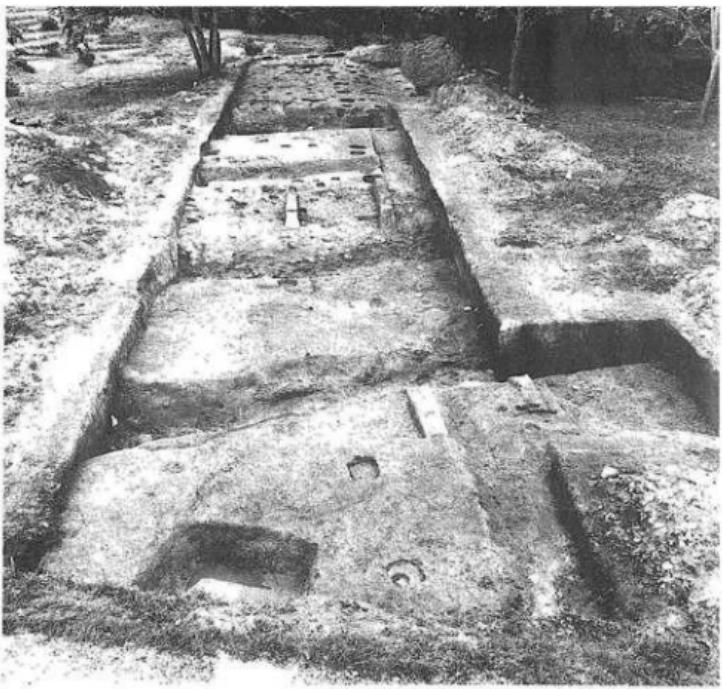


10



図版 10 第 50 次調査 かわらけ

- | | | | |
|-------------------|---------|------------------------|---------|
| 1. IA類 第 25 図 1 | ネガB5425 | 2. IA類 第 25 図 17 | ネガB5428 |
| 3. IA類 第 25 図 2 | ネガB5426 | 4. IA類 第 25 図 3 | ネガB5427 |
| 5. IB類 第 25 図 11 | ネガB5429 | 6. IB類 第 25 図 9 | ネガB5431 |
| 7. II A類 第 23 図 4 | ネガB5432 | 8. II B類 第 23 図 5 | ネガB5434 |
| 9. II B類 第 26 図 4 | ネガB5435 | 10. II C類 第 25 図 14・15 | ネガB5425 |



図版 11 第 52 次調査

上：調査区西半部

(西より)

下：調査区中央部

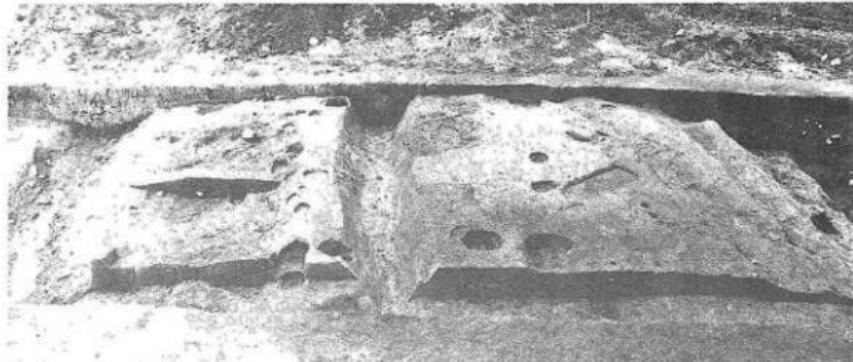
(西より)

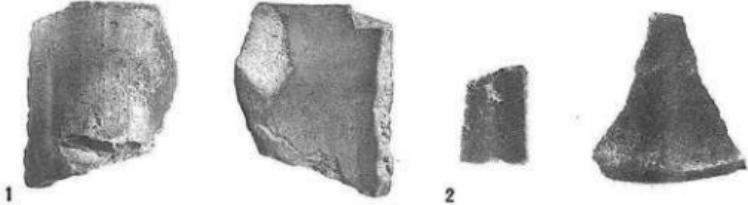
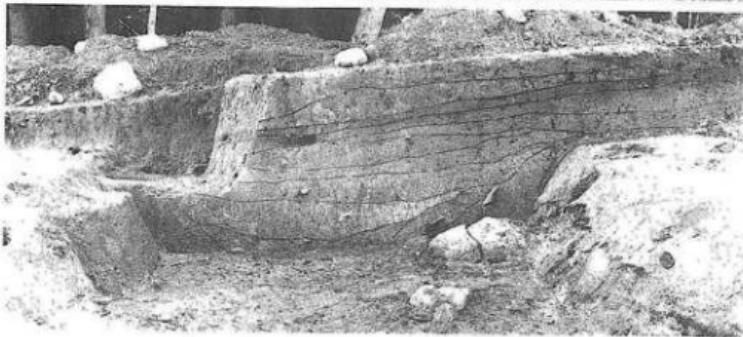
図版 12 第 52 次調査

上：調査区東半部
(西より)

中：調査区西半部
(東より)

下：S X1742・1748
S A1743など
(南より)





1

2

図版 13 第 52 次調査

上：SD 1709・1710（南東より）

中：SD 1709・1710 断面図

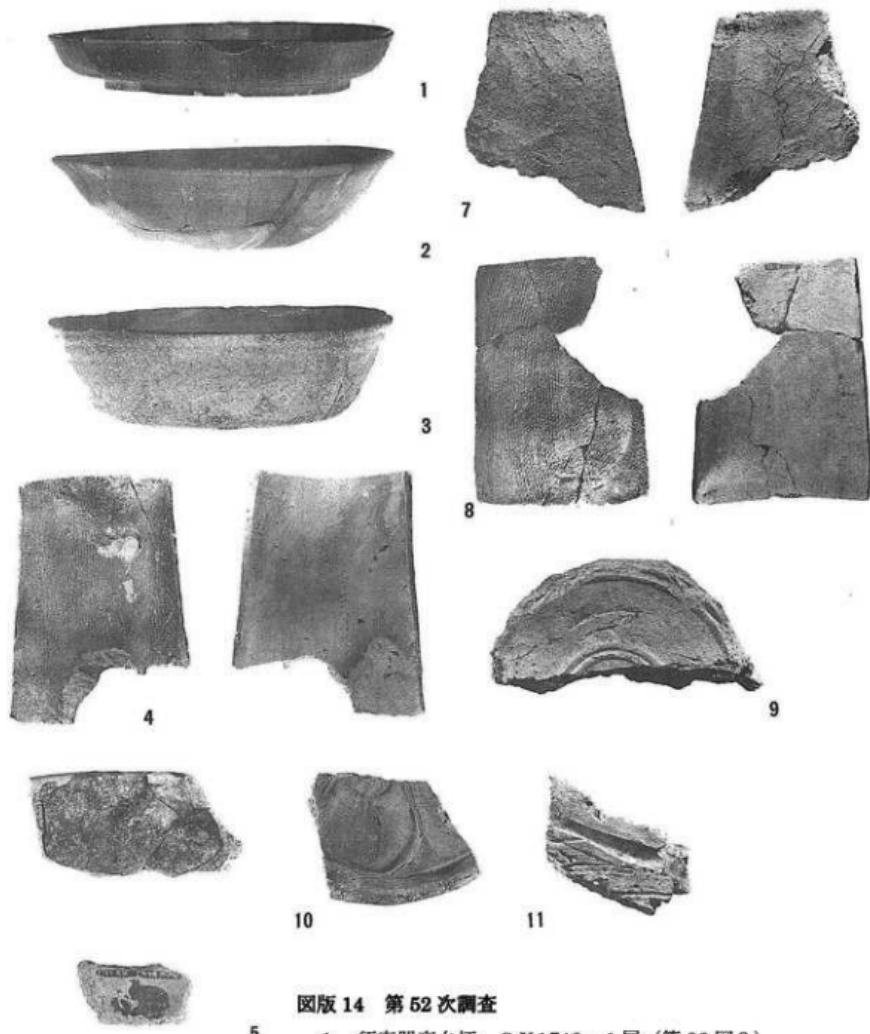
1. 丸瓦

2. 灰釉陶器平瓶破片（右：第 48 図 6）

3. 上：縁釉陶器破片

下：灰釉陶器破片



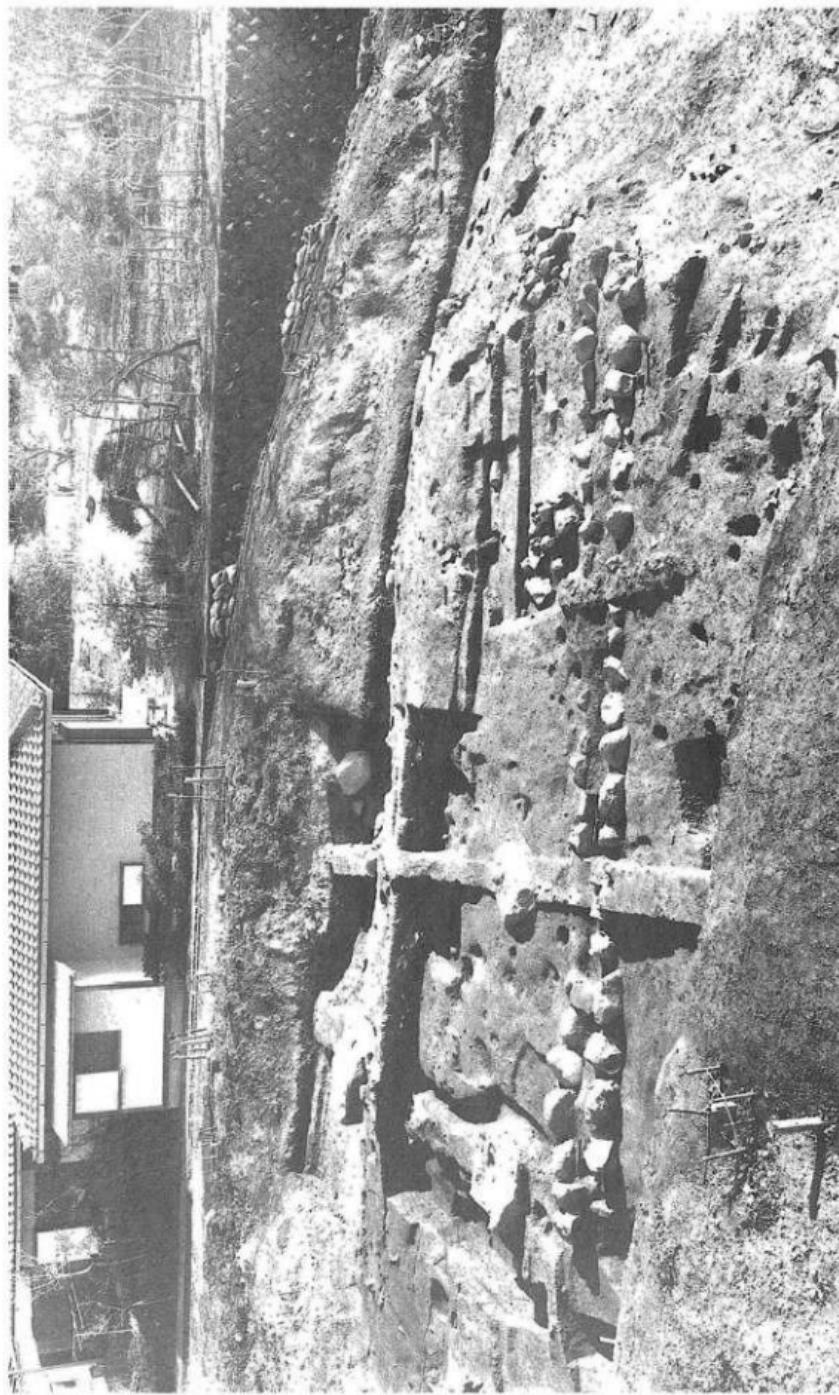


図版 14 第 52 次調査

- 5
1. 須恵器高台杯、SX1748-1層（第38図3）
 2. 須恵器杯、第1層（第48図1）
 3. 須恵器杯、SX1748-1層（第38図1）
 4. 平瓦ⅡB類bタイプ、SD1709-4層（第41図15）
 5. 須恵器系土器杯、第4層（漆付着）
 6. 揃鉢、第3層（第48図5）
 7. 平瓦ⅡB類（凸面ナデ調整）、第1層（第48図11）
 8. 平瓦ⅡB類（凸面に凹孔）、SD1710堆積層（第40図1）
 9. 軒丸瓦 242、第4層（第48図17）
 10. 軒丸瓦 120、第1層（第48図16）
 11. 軒平瓦 640、SD1709-4層（第41図8）

図版 15 第 53 次調査
新発見の外郭東門跡（北側から） ネガ B5193





図版16 第53次調査 新発見の外部東門跡（西側から） ネガB5196

宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987
多賀城跡

昭和 63 年 3 月 25 日印刷

昭和 63 年 3 月 31 日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前 133
T E L (022) 368-0101
印刷所 小泉印刷株式会社
